

27-316

文學士北澤定吉著

偉人耶穌

東京弘道館發兌

明治
39 4 16
丙交

序

今は十年の昔、修學の半にして、重き病の床に臥し、人命の脆く、敢果なく、人生の意義遂に解くべからざるを觀じて、激しき煩悶に沈める時、我は我が兄事する友、醫學士宮本叔氏の勸により、聖書を取りて、これを讀みぬ。會心の文字多き文よ、貴き書、捨て難き書よてふ感は、深く我が腦裡に刻まれしが、病癒えて後は、學窓事多くして、又これを讀むの暇を得ざりき。去る明治卅六年、某私立大學に、中世哲學を講ぜし時、先づ簡明に原始基督教を叙述するの必要を感じ、この目的に向つて、稍聖書を精讀するの機會を得たり。讀むに従つて、興はいよ／＼深く、或は、希伯來思想の特色を辿りて、これを希臘思想の特色と比較し、或は、基

督其人を忍びて、其品性の高きを仰ぎ、斯の如くにして、一年をこの書の研究に送りぬ。かゝる間に、チーグラーの「基督教倫理史」、ルナンの「基督傳」、ストラウスの「基督傳」、ストーカーの「基督傳」、同じ人の「基督の儀表」(Imagio Christi)を通讀し、これに參照するに、ハツチの「原始基督教」、ハルナックの「基督教の本質」、其他二三部の「基督傳」を以てし、さて後、眼を閉ぢて、基督其人の面影を忍べば、彼の面目、彷彿として我が眼前に浮び來るを覺ゆ。茲に於てか、我が眼前なる基督を描かんと欲し、卅七年八月六日筆を執りて、九月六日に至り稿を脱す。其體裁、其議論、共にストーカーの「基督の儀表」に負ふ所大なり。

余は、基督教の専攻者に非ず、又基督教徒にも非ず、研究

の日なほ淺き門外漢なるが、余の見て以て怪訝に耐へざるは、基督教に關する小冊子の出版せらるゝもの、頗る多きにも係らず、基督傳、其他基督に關する著書の極めて少きことこれなり。邦語にて書けるこの種の書物を求むれば、ニコルの「基督傳」、フアルラーの「基督傳」、ハウスラーの「基督傳」等一二部に過ぎず。基督教の研究に従事するの人、この種の著述を無用視するか、將た他に故ありて然るか。身基督教徒にして、信仰の立脚地に立ち、神としての基督を語る、これ固より基督の一方面なり。身門外漢にして、歴史及び批評の立脚地に立ち、人としての基督を語る、亦基督の一方面なり。島に就いて、詳細なる智識を得んと欲すれば、島に上りて、内よりこれを精査するの要あると共に、

船に乗りて、外よりこれを見るの要あるべし。本書は、前者に非ずして、後者の立脚地に立てり。前者の立脚地より、基督を論ずる人の如きは、蓋し其人を缺かじ。たゞ余の淺學なる、誤れるふし極めて多からん。大方の是正を尋うせば、余の幸なり。人あり、ルナンの「基督傳」を評していふ、基督を拉し來りて、ルナン自らを語るものと、何等思想の拘束なくして、人の傳記をものしなば、これに吾人主觀の色を混ざるは、固より當然の理、人としては、避け難き事に屬せり。豈獨りルナンのみならんや、余の基督を描けるもの、亦基督を拉し來りて、余自らを語るものに非るなきを知らんや。

書中、聖書より引用せる字句及び事實には、一々出所を

示したり。あまりに煩雜にして、讀者の興を殺がん憂あれど、未だ基督教を知らず、又聖書を讀みたることなき讀者に向つては、これを示さんことの、却りて引照に便なるを思ひてなり。書中の固有名詞及び聖書の用語は、總て邦語譯聖書により、引用亦これによれり。たゞ餘りに讀み難き所には、送假名を補ひて、其困難の幾分を減せんことに心したり。

余の本書を草するに至れるは、恩師今井恒郎氏の勸誘に出でたり。材料の供給、其他氏の助力を仰げるもの頗る多し。稿成りて後、これを筐底に藏するもの一年餘、去年の暮、基督傳の專攻者石川角次郎氏と相知るに及び、再びこれを出して氏の通讀を請ひしに、氏は快くこれを諾して、

有益なる幾多の忠告を與へられたり。今俄に舊稿をとりてこれを世に問ふものは、氏の勸誘與りて力ありしなり。特に記して、兩氏に對する深き／＼感謝の意を表す。

本書は初めストーリーカーに倣ひて、「基督の儀表」と呼ぶべかりしを、儀表の文字あまりに生硬にして、一般の讀者に本書の内容を示す能はざらんを恐れて、「偉人耶蘇」と改めつ、人と見て基督を叙するの意を明示したり。

明治三十九年三月

著者識

偉人耶蘇目次

序論……………一頁

第一章 家庭に於ける基督……………六

(一) 家庭に於ける必然的關係と自由的關係

(二) 基督は何故に家庭を作らざりしか

(三) 親の子に對する務

第二章 國民としての基督……………二

(一) 國家と個人との關係

(二) 基督の愛國的感情

(三) 基督は何故に政治に冷淡なりしか

(四) 基督は果して失敗者か

目次

第三章 教會に於ける基督……………三九

- (一) 教會に對する基督の愛
- (二) 宗教改革者としての基督
- (三) 教會設立者としての基督

第四章 祈禱……………五八

- (一) 基督と祈禱
- (二) 基督は何時何處に祈りしか
- (三) 基督は如何なる場合に祈りしか
- (四) 祈禱嘉納の徵驗

第五章 聖書の研究……………七二

- (一) 希伯來文學
- (二) 基督と舊約聖書

(三) 基督の教育

第六章 基督の勤勞……………八六

- (一) 勤勞に關する理想
- (二) 基督の活動主義
- (三) 職業に貴賤ありや
- (四) 休養の必要

第七章 基督の忍耐……………一〇〇

- (一) 幸福と災厄
- (二) 多難の生涯
- (三) 忍耐の結果

第八章 基督の友誼……………一一三

- (一) 基督に友ありや

- (二) バブテズマのヨハネ
- (三) 十二使徒
- (四) 友とは何ぞや
- (五) 友を作るの道

第九章 基督の社交……………一三一

- (一) ヨハネと基督との相違
- (二) 基督の社交

第十章 基督の博愛……………一三九

- (一) 博愛の意義
- (二) 博愛の徳は基督教の獨占か
- (三) 基督の博愛

第十一章 牧師としての基督……………一五六

- (一) 牧師としての基督
- (二) 人を牧する手段
- (三) 羊の爲に命を捐つる牧者

第十二章 基督の説教……………一六六

- (一) 聴衆
- (二) 基督の説教が人を動かせし理由
- (三) 説教の形式
- (四) 説教の内容

第十三章 弟子の教育……………一八〇

- (一) 説教と教育
- (二) 教育の方法
- (三) 教育の目的

第十四章 信仰の擁護……………一九四

- (一) 信仰擁護とは何ぞ
- (二) 基督の學者及びパリサイ人に對する態度

結論……………二〇二

偉人耶蘇



文學士 北澤定吉著

偉大と嘆
美

小さく美しき苦の一片を、其掌上に弄しつゝ、大なる苦よ、大なる宇宙を收め、この中にありと山嶽ぶ詩人の傍より、迂遠なる詩人よ、彼に眼あり、しかも苦の小なるを見ずと、鼻うごめかす學者あるを見、山翁村婦の朝に美しき山に逢ひ、夕に麗しき雲を見れども、毫も其佳なるを知らず、見て以て何等の奇なしと爲すに、想ひ合せて、大なるもの自ら大なるに非ず、これを見て、以て大と爲す人を俟ちて、初めて、大なり、美なるもの自ら美なるに非ず、これを見て、以て美とする者を俟ちて、初めて、美なりと、感じたる事あり。今の學を修め、道に志す輩は、やしもすれば、批評を偏重して、驚駭嘆美の情を缺き、眼に見耳に聴く所の事、一に其短所を發見して、酷にこれを難せざれば、休まず、師に

序論

學び書を繙くや、冷然として曰く、この人君子人ならず、この書善美を盡さずと。其爲す所の何ぞしかく、かの學者かの山翁村婦に類するや。觀る者の心に驚駭嘆美の情なくんば、天地の間、一物の大なく、一物の美なからんとす。これを愛し、これを嘆美すれば、一片の苔に於て宇宙の大を見、一塊の土に於て万物の理を發見すべし。況んや人をや、況んや偉人をや。偉人に於て其大を見ず、其美に打たれずといふ者あらば、自ら恐にして其恐を知らず、自ら陋にして其陋を知らざる者なり。

世界は學
校は其
教師は其

教父時代の哲學者と呼はるゝ人々の中に、アレキサンドリアのクレメンス (Clement of Alexandria, +217) といふあり、教へていふ、神はもと完全なるもの

なるが故に、其創造物たる万有をも、完全ならしめんと欲す、完全は、万有の究極たるべき原型なり、自然人即ち基督教に由りて教へられざる人々は、たゞ他日完全の域に達し得べき萌芽を包含するのみ、この萌芽を養成して完全圓滿なる發達を遂げしむべき學校は、世界にして、基督は、其教師なり、基督は、身を以て、完全圓滿なる人の儀表となし、愛の力もて吾人を導き、吾人をして

完全圓滿なる神の域に達せしめんとす、故に世界は苦の世界に非ず、身體は、プラトーン及び新プラトーン學派の人々が主張する如く、吾人の精神を束縛すべき獄屋に非ず、従つて、吾人の完全圓滿なる人となるべき道は、苦行禁欲に非ず、一に基督を儀表として、其行動を學ぶにあり、神は、この世界、この肉體の人を妨げて、完全圓滿の域に到る能はざらしむることなきを證せんが爲めに、自ら肉體にやどりて人となれりと。

御足の跡

斯の如きは、基督を以て、大なる者、美なる者、完全圓滿なる者、吾人の驚駭嘆美して、其域に達せんを希求すべき理想となして、吾人に勸むるに、其足跡を踏みて、完全圓滿なる人となるべきを以てするもの、簡單明瞭に基督教の根本思想を道破せるものと言はざるべからず。吾人は、基督に於て、基督教の全體を見る、教會の信條の如きは與からず。基督を離れて、基督教を見んと欲すれば、百の信條を立つると雖も、なほ及ばざるなり。我が友に基督教を信するものあり、嘗て其經驗を語りていふ、磐根錯節に當りて、我が力の小さなを、かこつ時、不幸の淵に沈みて、空しく絶望の聲を發する時、我は先づ人を

忘れ、世を忘れ、我を忘れ、心を明鏡止水に比し、聖き神のみ前に額きて、徐に祈禱をこらし、さて後自ら問うて、基督をして、この事に當らしめば即ち如何、基督をして我と同じ境遇に立たしめば即ち如何と、いひき、此問に對する我が衷心の答こそ、み足の跡として、我が蹈み來れる道なれと。豈た々に我が友のみならんや、苟も眞に基督を解し、眞に基督教を信ずる人にして、誰か基督を儀表とし、基督がみ足の跡を辿らんと欲りせざるべき。西洋今日の文明は、基督教徒の文明にして、その偉人と呼ばれる、人々は、何れも皆、基督を儀表として、以て其大を成し、以て其文明に貢獻し、これ等偉人が、時を重ね世をかへて、相協力せる結果、遂によく西洋今日の文化を致せるを思へば、基督は大なる者、美なる者、完全圓滿なる者、吾人の驚駭嘆美して、其域に達せんを希求すべき儀表なりてふ、クレメンスの説、我を欺かざるを覺ゆ。

本書の目的

基督は、或一派の人々の主張するが如く、人にして神に非るか、我これを知らず。基督は又、或他の人々の主張するが如く、神にして人に非るか、我これを知らず。基督は、果して更に他の人々の主張する如く、神にして同時に

人なるか、我又これを知らざるなり。この種の問題は、基督教徒が嘗て血を流して相争へる歴史を有するもの、基督教徒としては、口角沫を飛ばして論争するの要あるべし。されど、吾人は、たゞ基督の大なるを知るのみ、基督の美なるを知るのみ、完全圓滿なる儀表たるを知るのみ、其神たる、否とは、吾人の與り知らざる所、たゞ基督を人と見て、其行動を觀察し、吾人日常の生活に於て、吾人自らを律するに當り、彼を儀表とし、彼を模範として、如何に多くを學び得べきかを究めんと欲す。吾人は基督を敬仰す、基督を嘆美す、必ずしも其神性を拒まず。されど、基督を神と見て、基督と宇宙、基督と人との關係を究むるが如きは、宗教家の事、本書の目的に非ず、本書は、たゞ人としての基督を究め、基督を中心として、基督教の倫理を論ぜんと欲す。世の品性の修養に志して、儀表を求むるに急なる人、若くは、實踐倫理の研究を志す人々の爲に、多少資益する所あらば、我が望足れり。

第一章 家庭に於ける基督

家庭と人との關係

家庭の人に於ける吾人はこれを兩方面より觀察するを得べし、

- (一) 必然的關係
- (二) 自由の關係

これなり。吾人は或る父母の子、或る兄弟姉妹の同胞として、吾人の生るゝに先ちて、一定の歴史、一定の品位、一定の財産を有する家庭に生れ來るもの、この父母を欲りせざるが故に、他の父母を望み、この同胞を好まざるが故に、代ふるに他の同胞を以てせんとするも、えて望むべからず。富は人の望む所、名譽は人の希ふ所、心身の病は人の避くる所なりと雖も、一度貧しき家庭、不名譽なる家庭、心身の遺傳病ある家庭に生れ來れば、これを捨て、他を撰ぶに由なきなり。斯の如きを、家庭の人に於ける必然的關係といふ。されど、吾人は、この家庭を材料として、これに吾人の力を加へ、これ等必然的の關

係に支配せられ、制限せられつゝ、なほ自ら富を作り、名譽を作り、心身の病を治し、我が愛し我が好む婦人を娶りて、これを妻とし、我が祖先、我が父母の作り來れる歴史の流を換へて、こゝに我が家庭を作るを得べし。斯の如きを、家庭の人に於ける自由的關係といふ。

我に撰擇の自由なし、従つて我は其善惡に關して何等の責任を有せず。

我に撰擇の自由、矯正變易の自由あり、我はこれに向つて其責に任ぜざる可らず。家庭を試金石として、人の大小を驗せんと欲せば、吾人は先づ其家庭の必然的關係を究めて、後彼のこゝを如何に利用し、これに如何なる矯正變易を加へて、如何なる新家庭を作りしかを見るを要す。家庭の必然的關係を觀過して、其人の品性を論じ、家庭の自由的關係を無視して、其人の價値を定めんは、えて望むべからず。吾人は先づ必然的關係より出立して、後自由的關係を論じ、家庭に於ける基督其人をうかゞはんと欲す。

基督は、ガリラヤなるナザレの人、木匠の子なり。父をヨセフといふ。敬神の念盛なる義しき人なりしが、基督のなほ若かりし時、既に他界の人とな

基督の家庭に於ける必然的關係

りて、家を宰るの重任は、早くすてに基督の双肩にかゝりしに似たり。母の名をマリヤといふ。其の性行を傳へて、詳なるものなしと雖も、彼女がザカリアの家に入りて、エリサベツに問安したりし時路加一章三、彼女の歌へりと傳ふる神をたゝへし歌に由れば、彼女が、温良にして、敬神の念に富みしこと、彼女が舊約聖書を熟讀せることのほの見えて、この母にして、この見ありの感なくんば非ず。基督の説教に於て、この歌の精神の、絶えず繰返さるゝを見れば、彼の女の基督に對する感化の、小ならざるを知るべし。馬太傳一章一路加傳三章七等に、基督の祖先を詳記して、彼のダビデの裔なるを示したるは、我が家は王家の出なりて、ふ觀念が、基督を刺激して、多少其大業を成すの動機となれりと、信ずるに由るなるべし。基督には、兄弟姉妹多かりしも、多くはこれ凡庸の人たゞに基督を解せざるのみかは、其事業に向つて、何等の同情をも有せざりし事、基督の預言者は、其故土、其家の外に於て、尊まされざることなしと、嘆じたるに徴して、推知し得べし。彼の同胞たる雅各、猶太の二人は、基督教の擴布に盡力して、聖書の内に、其書簡をさへとゞめられた

基督の家庭に於ける自由的關係

ど、彼等が道の爲に奔走するに至れるは、もとより基督の死後に屬せり。基督は、かゝる家庭に生れて、かゝる父母の下に、かゝる同胞と共に、木匠の業を執り、静黙を守る事、卅年、其父母の家庭を去り、世の爲め、人の爲めに、道を傳へて、四方に活動せるは、たゞ最後の三年のみ。基督が道をガリラヤに傳へて、其郷里ナザレに至れる時、其郷里の人々が、目をそばだて、この人の知慧と異なる能は、何處より來るや、これ木匠の子に非ずや、其母はマリヤ、其兄弟は、ヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダに非ずや、その妹等は、皆我儕と偕に在るに非ずや、然るに、此人の凡て此等の事は、何處より來りしや馬太傳十三章五、と言へるもの、よくこの間の消息を洩せり。

基督の境遇は、新に妻を娶りて、其夫となり、新に兒を擧げて、其父となり、父母の家庭以外に、我自らの家庭を作るを許さざりき。こゝを以て、家庭に於ける基督には、必然的關係ありて、自由的關係なし、吾人の學んで以て吾人の家庭を作るべき儀表なしと、論ずる人あれど、果して然るか、下にこれを論ぜんと欲す。

夫婦の關係の重視

基督は自ら家庭を作らざりき。しかも當時のバレスチナ人が家庭の重んずるべきを知らず、あやしげなる口實の下に、妻を去りて恥ぢず、其結果親子の愛情も亦極めてうすくして、父或は母に對ひて、爾を養ふべき物は、コルバン即ち禮物なり、と曰へば、事ずともよし馬可第七、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、百夫婦の關係は、人倫の中にありて、最も重んずべきものなること、離婚はいやしくもすべからざることを教へて、開闢の初、神人を男女に作り給へり、この故に、人は其父母を離れ、其妻に合ひて、二人の者一體となるべし、然れば、二には非ず、一體なり、この故に、神の耦せ給へるものは、人これを離す可らず、凡そ其妻を出して、他の婦を娶るものは、其妻に對して、姦淫を行ふなり、又婦若し其夫を出して、他に嫁がば、この婦も姦淫を行ふなり馬可十、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、百操の眞義を解して、古の人に告げて、姦淫すること勿れと、いへることあるは、爾等が聞きし所なり、然れど、我爾等に告げん、凡そ、婦を見て、色情を起す者は、中心既に姦淫したるなり馬太五、二七、二八、二九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、百基督は夫婦の關係を輕視

親子の愛の重視

するが故に、家庭を作らざりしには非るなり。

基督は自ら家庭を作らず、自ら父とならざりき。しかも、幼兒を慈み、孩提を愛すること、に於て、子を持つて、父に劣らざりき。ルナンは、基督の嬰兒に對する態度を記して、いふ、東方の俗、客の或る家に來るあれば、村人を擧げて、こゝに集るを常とす、子供等亦其中にあり、基督は、喜んでこれを迎へ、これを抱き、これを慈みしかば、子を持つて、母は、其子を携へて、彼に來り、手を按けて、祈らんことを請へり、たまふ、弟子等の煩しとて、これを拒む者あれば、嚴にこれを禁じたるが故に、幼兒と母とは、彼を圍みて、彼を拜せり」と。基督は、幼兒を愛して、其母と親しみ、母と親しみて、其家の友となり、家を變じて、教會となしたり。牧師祭司の徒を擧げて、彼に反抗せる時、其避難所を小さき家庭の中に求めしもの故なしとせんや。路加傳第十五章に記されたる、失へる子の譬を讀むに、失へる子の、再び父に往ける時、其父かれを見て、憫み、趨り行き、其頸を抱いて、接吻し、僕等に命じて、其衣を代へしめ、犢を宰りて、これに食はし、兄のこれをとがむれば、爾は、常に我と共にあり、又我が所有は、皆汝の屬

なり、爾の弟死して復生き、失ひて復得たるが故に、我等喜んで樂むは、當然の事なりといへる、よきあしき値あると値なきとに論なく、普ねく其子を慈む親心を寫して、よく眞に迫るに非ずや。誰か言ふ、基督の子を愛すること、子を持てる親に如かずと。

基督の親子の關係を重視することは、彼の神と人との關係を説きて神は父、人は子といふにて著し。思へらく、神はよきあしき値あると、値なきとに論なく、彼の孩提たる人の子をして、普ねく福祉を享けしめんと欲す、神の父として人を見るや、平等なり、一視同仁なり、こゝを以て、神の父たり、人の子たる事より、四海同胞の説導かる、四海同胞の義他に非ず、隣人を愛するなり、隣人とは、我等の補助を要する人なり、故に、惡しき人、値なき人に逢はば、我等は殊にこれに注意し、この人を導きて、よき人、値ある人たらしむるを要す、父たる神の、惡しき人、値なき人の爲に憂ふるは、よき子、値ある子よりも、更に大なれば也と。基督を難じて、孝を知らず、慈を知らずなどいふは、未だ基督を知らざるなり。

嬰兒を愛する他の理由

基督の嬰兒を愛するには、更に大なる理由ありて、吾人の注意を値す。「もし改りて、嬰兒の若くならずば、天國に入ることを得じ、されば、凡そこの嬰兒の若く、自ら謙る者は、これ天國に於て大なる者なり。」馬太傳九章一節「孩提を我に來せよ、彼等を禁むる勿れ、神の國に居る者は、斯の如き者なり、誠に我汝等に告げん、凡そ孩提の如くに神の國を承けざる者は、之に入ることを得ざる也。」馬可傳十章十六節「見る可し、基督の嬰兒を愛するは、其無邪氣、其謙遜、其脆弱にして、人に頼り、人を恃むに由ることを。これを以て、ソクラテスが我に頼り、我を恃み、獨立自主を重んずる青年を愛すると對照し、來れば、明らかに希臘思想と希臘來思想との相違を見るを得べし。希臘來人の理想は、希臘人のその如く、強き人に非ずして、弱き人、脆き人なり。我を恃まずして、神に頼るの人なり。基督の所謂神は、義人の神に非ずして、罪人の神なり。基督は、上流に同情せずして、下層教化もて、自任したり。幸多き人に與せずして、悲に泣く人の友となれり。青年を愛するソクラテス、嬰兒を慈む基督、兩偉人に於て、希臘思想と希臘來思想との、美しき對照を見る。

非經聖書(Apocryphal Books)の中には、基督がナザレに於ける靜默の卅年を叙して極めて詳なるものありと雖も、これ等は總て信ずるに足らず。福音書の中には、路加傳に、彼が十二歳の時、エルサレムに上りし事を叙し、ナザレに歸りて、彼等に順ひ居り、云々、イエス智慧も齡も彌増り、神と人とに益愛せられたりと、記せるあるのみ。この記事に由りて、吾人のおぼるげに推知し得るは、彼が父の家庭にありて、從順の子たりし事なり。加ふるに、約翰傳第十九章に、十字架上の基督を叙述せる中に、イエスの母と、母の姉妹、およびクロバの妻のマリヤ、並にマグダラのマリヤ、其十字架の傍に立てり、イエス、母と愛する所の弟子と、傍に立てるを見て、母に言ひけるは、婦よ、これ汝の子なり、また弟子に曰ひけるは、これ汝の母なり、この時、其弟子、彼を己の家に携れ行けりとあるを讀みては、基督の平生の忍ばるゝものあるなり。肉體の苦痛はいよ／＼加はれり。死の時はいよ／＼迫り來れり。彼をして世の常の人たらしめば、黙して語らず、靜かに眼を閉ぢて、神を祈りつゝ、辛うじて死の至るを待ちしなるべし。かゝる非常の瞬間に於て、彼は、其母を顧み、其

最愛の弟子を顧みて、これに、其母を托しぬ。母を思ふことの切ならざる者にして、いかでかこゝに至らんや。彼は、卅餘年の短生涯を父の家庭に送りて、自ら家庭を作らざりき。されど、彼の自ら家庭を作らざるは、斷じて、家族的關係を輕視したるの結果に非ざるなり。かく、妻に對するの愛情を解し、子に對するの慈悲を解し、親に對して敬愛の至情を有したる人にして、自ら家庭を作らざりし理由如何。この間の消息に關しても、史籍の徵すべきものなしと雖も、以弗所書第五章の記事は、吾人に與ふるに、或種の暗示を以てす。曰く、婦なる者よ、主に服ふが如く、己の夫に服ふべし、云々、夫なる者よ、キリストの教會を愛し、其爲に己を捨て給ひし如く、爾等も婦を愛すべし、云々と。キリストの教會を愛し、其爲に己を捨て給ひし如く、爾等も婦を愛すべし。見よ、基督は、教會をもて妻子となし、身を捧げてこれを愛せしかば、其愛を分ちて、妻を愛し、子をはぐ／＼み、家庭を作るに暇なかりし也。家庭の重からざるに非ず、教會の更に／＼重かりしなり。家庭は、もと人生の目的に非ず、人生の目的を達すべき手段なり。この

目的を達せんが爲に家庭を作るに暇なくんば、これを作らざる大に可なり。家庭の輕きに非ず、人生の目的の更に大なるものありて存するなり。基督は、ただに夫たり妻たり父たり母たり子たる人の儀表たるのみならず、又實に大事の爲に家庭を作らざる人の儀表たるなり。

(三)

基督が其親に事ふるや、よく其誠を致して、至らざる所なかりしが、基督は、世の親たる人乃至其母マリアに對して、何事をも要求せざりしか、基督は、單に親權の尊嚴を説きて、親の子に對する務を教へざりしか、吾人をして、進んで、これを究めしめよ。

親の子に對するや、其愛盡さざるべからず、其注意至らざるべからず。されど、父母の子に臨むや、子を教へて、父母の注意なしに、其身を處し得るが如き、自由の域に至らしむるを以て、其目的とせざる可らず。師若し其弟子を待つに、干渉又干渉、子弟をして、人の干渉なしには、何事をも爲す能はざらしめば如何。誰か其恩を笑はざらんや。父母の子に於けるも亦然り。愛は

父母干渉の弊

長へに續かざるべからず。ただ干渉注意に至りては、一時の方便たるを忘るべからず。この干渉をゆるむるの時期や、子によりて一定すべからず、人の親たるものは、よく其子の資性を究めて、干渉をゆるぶることの早きに失せず、又遲きに失せざるや、心するを要す。餘りに早く父母の干渉を脱するものは禍なり。幼にして、放縱不羈に身を過つことあればなり。あまりに遅く父母の干渉を脱する者は禍なり。我自ら我を治むる能はず、ただ人に頼りて事を爲さんとする、卑屈漢となり終るべければなり。

基督既に卅歳修養既に成り、準備既に終りて、我が道を傳ふべく、其公生涯を始むるに至りても、其母マリアは、なほ嬰兒基督を知りて、偉人基督を知らず、屢其事業に容喙して、いたく基督を苦めたるに似たり。カナの婚禮に於て、母も基督も其弟子も、共に之に招かれし時、葡萄酒罄きければ、母イエスに曰ひけるは、彼等に葡萄酒なし、イエス彼に曰ひけるは、婦よ、爾と我と何の與あらんや、云々。此他、イエス人々に語り居る時、其母と兄弟、彼に言はん

とて、外に立ちければ、或人、イエスに曰ひけるは、爾の母と兄弟、爾に曰はんとして、外に立てり、イエス、告し者に答へて曰ひけるは、我が母は誰ぞ、我が兄弟は誰ぞや、手を伸べ、其弟子を指して曰ひけるは、これ我が母、我が兄弟なり、蓋しすべて我が天に存す父の旨を行ふものは、これわが兄弟、わが姉妹、我が母なればなり、馬太傳第十三章と、言ひけるが如き、基督の親同胞のやうなき干渉を斥けて、毫も假借せざるを示せるなり。我が子、我が同胞の、未だ獨立獨行すべき資格なき時は、さてありなん、既に一人前の紳士となりて後、猶これに干渉せんとするは、父兄たるもの、過失なりと、言はざる可らず。

馬太傳第十章三十三に曰く、地に泰平を出さん爲に、我來れりと思ふ勿れ、泰平を出さんと、非ず、刃を出さん爲に來れり、夫れ我が來るは、人を其父に背かせ、女を其母に背かせ、媳を其姑に背かせんが爲なり、人の敵は、其家の者なるべし、我よりも父母を愛む者は、我に協はざる者なり、我よりも子女を愛む者は、我に協はざる者なり、其十字架を任りて、我に従はざる者も、我に協はざる者なりと。路加傳に、同じ辭を記して、今より後、一家に五人あらば、三人

良心及び
自

は、二人に敵對し、二人は、三人に敵對して分るべし、云々と、いへり。基督が是等の辭を引きて、基督は、家庭の平和を重んぜず、父子の親骨肉の間を割きて、相せめがしむ、五倫を中心として教を立つる東洋にありては、基督の教斷じて信ずべからずと、論じたる論者ありしが、基督の眞意は、果してこゝに存するか。若し論者の所論にして、よく基督の意を傳ふとすれば、吾人が項を重ねて縷説せる所は、擧げてこれを否定せざる可らず。論者の言ふ所眞か、吾人の見る所否か、こゝにこれを略論するの要あるなり。前項、基督の娶らざりしを論じて、基督は、教會をもて妻子となし、身を捧げてこれを愛せしかば、其愛を分ちて、其妻を愛し、其子を愛するに暇なかりき、家庭の重からざるに非ず、教會の更に重きなりと、言ひたりしが、自ら、宗教を重視すること、斯の如き基督の人に、勸めて、教會を愛し、信教の自由、良心の獨立を得んが爲には、寧ろ、家庭を捨てよと、言ひたりとて、何の奇しき事かある。之も前に論じたるが如く、獨立獨歩の人に對する親同胞のやうなき干渉を斥けて、毫も假借せざる基督の信仰の自由、良心の自由に對する家族の束縛を、斥けたりとて、何

の怪しき事がある。見よ彼の辭の要點は刃を出さんが爲に來れりといふにはあらで我よりも父母子女を愛ひものは我に協はざる者なりといふに存するを。家庭の重からざるに非ず彼の教の更に／＼重きなり。初め基督の其道を傳ふるや猶太教を信ずる輩若くは他の異教徒の反對激烈にしてたま／＼彼に歸依する者あるも其父母其同胞のこれを阻まんを豫想したり。否たゞにこれに止らず彼の同胞の如きも冷然彼の教を迎へ彼の衷心に言ふべからざる煩悶を與へたり。身親しくこの煩悶を経験して預言者は其故土其家の外に於て辱まれざることなしてふ嘆聲を發したる彼は彼の足跡を踏まん人々のやがて彼と同じ運命を反復すべきを豫想して彼等を慰藉激勵せんが爲に豫めかゝる言をも發したるなり。豈たゞに信教及び良心の自由に於てのみならんや。小は其職業の選擇に於て配偶の選擇に於て大は智識の自由に於て父子同胞の間に意見の相違あるは何人も常に經驗する所人の子たり人の弟妹たるものにしてかゝる境遇に際會すれば虚心胆懐父兄の訓戒を熱感しかくてもなほ服し難きものにして事の

大に且つ重く一步も曲ぐべからざる者あらば寧ろ父兄に背くも事の大き且つ重きに就くを要す。東洋の倫理學者が苦諫の道を説くはこれが爲なり。これを要するにこゝに基督の説く所は人の常道に非ずして變に處するの道なり。基督が變に處するの道として教ふる所のものを捉へてこれを常時の道と誣ひ基督孝を知らず基督家庭を輕視すなど論んは論者の爲に採らざるなり。吾人は重ねていふ家庭の重からざるに非ず良心の自由智識の自由の更に／＼重きなりと。

第二章 國民としての基督

(一)

國家と個人との關係に關する思想は大要三變せり。獨り國家を偏重して人格の尊きを認めず個人を犠牲に供して國家の繁榮を謀らんとする

(一) 國家主義

個人を偏重して國家の尊きを認めず國家は個人の權利を保護し福利を増進せんが爲に存する手段なりと主張する

個人と國家との關係に就いて見

(二) 個人主義

國家個人の兩者を重んじ、

(三) 國家と個人との關係を調和的に説明せんとする主義

これなり。

希臘人は、極端なる國家主義をとり、國家自衛の爲には、子を殺し、又は、個人の自由を奪ひて、之を奴隸とするを辭せず、博學プラトリー、アリストートルの如きすら、眼中個人なかりき。若し夫れ、プラトリーの理想國、アリストートルの政治學の如きものを緝かば、何人か、彼等の所謂國家なるもの、全能にして、其權利、其道德に、何等の制限なく、何等の拘束なきに驚かざるを得んや。羅馬人も、大體に於て、希臘人の思想を襲ひしが、羅馬人は、政治法律の方面に於ては、希臘人に較べて、一頭地を抜きたる人種にして、國家に關しても、希臘人よりは、遙かに明瞭なる觀念を有して、多少、國家の意志を制限し、また、其權力の範圍を限り。近世の初に、マキアベリー出て、國家全能論を唱へ、ホッブス、スピノザの徒、其意見を繼承したりしが、今日に於ては、此種極端なる國

希臘羅馬
國家主義

中世及
個人主義

家主義全然消滅して、又これを唱ふる者なきに至れり。

中世の基督教徒は、此點に於て、希臘人及び羅馬人の正反對に立てり。彼等は、國家を以て、吾人の肉體を支配するもの、教會を以て、吾人の靈魂を支配するものと考へ、靈魂は重くして、肉體は輕し、教會即ち神の國は、國家の上にあると主張したり。茲を以て、人にありて最も重きは、其内的生活即ち不死の靈魂にして、これが爲には、總てを擧げて犠牲に供するを辭せず、従つて、我が靈魂と神との中保者教會の爲には、財産は勿論生命をも擲ちて顧みざらんとす。かくて、子とし、夫とし、父として、家庭にありて、盡すべき道如何と感り、善良なる國民たらんよりは、寧ろ善良なる個人たらんと懸念したり。これ實に、基督の遺風を傳へたるもの、世界は、基督を待ちて、初めて、個人の價を知れり。靈魂は、地の生じ得べきあらゆるものよりも、尊きを知れり。世界の産物中、最も尊きものは、偉大なる品性なるを知れり。偉大なる個人を待つに非れば、教會も、家庭も、國家も、何等の價値を有せざるを知れり。基督教は實に、國家と個人との關係に關する、在來の思想を轉倒して、宗教的、道德的

の立脚地より極端なる個人主義を立てたりといふべし。これと稍趣を異にして政治法律の方面より個人主義を唱ふる學者ありて、十八世紀の一大勢力なりき。ロック、ルソー等盛にこれを唱導して、亞米利加の獨立、佛國革命等の動機となりし民約説これなり。個人は生れながらに神聖にして犯すべからざる権利を有す。假令國家の力を以てするも、天賦の人權を奪ふに山なし。あらず、國家は寧ろ此人權を保護する爲に、民約によりて成立するもの、國家にして、この目的を忘れて、人權を侵害するに至れば、これを仆して可なりといふもの、民約説の主張なり。

この種の個人主義が、天賦の人權は神聖にして犯す可らざるもの、國家に先ちて存在すと主張するは、事實を無視し、歴史を顧ざる見解にして、權利は寧ろ國家に於て存するもの、國家に由りて存するものなり。國家若し存在せざらんか、權利てふ觀念、個人てふ觀念をだに生ぜざりしなるべし。元んや、權利其物をや。天然は、動物的の人の作り、國家社會は、合理的の人の作り。かくて後初めて人に人格あり、初めて人に權利あり。個人の權利を保

兩主義の
短所と其
調和

護せんが爲には、國家を仆すも可なりと論ずるが如きは、深淵に臨める樹枝に縫りつゝ、この枝を切りて、自己の力をほころに似たり。力愈大なれば、己は將に深淵に墜落して、魚腹に葬られ終らんのみ。基督敎の徒や、いもすれば、この種の論者と、同じ過に陥り、國家なしに教會あり、個人の靈魂あり得べしと考ふるは、國家と個人との關係を誤解するもの、いみじき誤謬なりと雖も、基督が猶太敎の神の前には、何人も平等なりて、ふ見解を展開して、貴賤老若貧富賢不肖の差別に論なく、よきあしき、値あると、値なきとを問はず、人は平等に尊きもの、人格を無視し、人格を犠牲に供するは、罪惡の最も大なるものなりと教へて、希臘人及び羅馬人の夢想だもせざる眞理を發揮したるは、人類の歴史に特筆大書すべき功績にして、假令個人主義其物は、遂に支ふべからずとするも、人格尊重の眞理に至りては、これを疑ふの餘地なきなり。偉大なる人物を待つに非んば、國家の發達を期す可らず。茲を以て、國家主義も、個人主義も、盾の一面を見て、他の一面を見ず、其積極的主張即ち國家を重視し、若くは個人を重視する方面に於て、眞理の半面を攫めりと雖も、其

消極的主張即ち個人を犠牲にし、若くは國家を犠牲にせんとする方面に於て、眞理の他の半面を逸したり。要は、國家主義及個人主義の積極的主張を毀損せず、兩者の主張を綜合して之が調和を謀るにあり。輓近學者の主張は、フイヒテ、ヘーゲル等哲學的立脚地よりする者と、最近學者の歴史的立脚地よりする者との別こそあれ、國家と個人との關係を有機的なりと見て前掲兩主義を調和せんとするに於て、全然相一致す。第三の主義即ちこれなり。個人の品性を高むるとに由りて、國家の品位を高め、國家の品位を高むるとに由りて、個人の品性を高むるを得べし。善人にして悪しき國民あり、善き國民にして悪しき人ありといふが如きは、えて解すべからざるなり。

よく忠、よく孝、義勇公に奉じ、一旦緩急あれば、生命を捧げて國難に赴くは、これ我が國民の美風にして、愛國心の盛なること、日本民族の如きは、他に其比類を見ざるなり。日本固有の道德を發揮せんと努むるの士が、盛に賞揚する武士道の如きは、疑もなく、此美風を發揮して遺憾なきもの、我國民道德の一要素として、重大なる價值を有すべきは、勿論なれども、仔細にこれを吟

邦人思想在來
の思想と
基督教的
關係

味し來れば、一大缺陷の其美を損するものありて、病膏盲に入れるを忘る可らず。缺陷とは何ぞや、人格の輕視これなり。武士の餘りに生命を輕視し、死を急ぐの短はこれを數へざるべし。たゞ、彼等の忠義の爲め、はた所謂義理の爲に、妻を殺し、子を殺し、甚しきは、他人を殺して顧慮せざるに至りては、如何にこれを辯護するも、人格の輕視に非ずと謂ふを得ざるなり。豈たゞに武士道のみならずや、人格の輕視は、實に我邦在來の道德に通ずる一大短處なりと言はざる可らず。維新以後、民約説の輸入せられて、我が國民を風靡せる、國民を擧げて國會の開設に狂奔せる、頃者ニイチエ等の歡迎せらるゝ、觀じ來れば、何れか人格の輕視に對する反動ならざる。これ等反動思想の結果として、はた法律の整備するに従ひ、法律思想の普及せる結果として、人格を重んずることのいよ／＼盛なるに至れるは、日本民族の爲に慶賀すべき現象なり。されど、國民の全體に涉りて觀察し來れば、人格の觀念なほ不明瞭にして、他人の人格を蹂躪して、毫も悲まざるが如き者、比々皆然り。我邦固有の道德を以て、これを希臘羅馬の國家主義に較べなば、これと基督

教の個人主義との對照は、移して以て、日本道德と基督教道德との對照と見るべし。希臘羅馬の國家主義にして、基督教其他の個人主義と相補充して、國家と個人との關係初めて全しとすれば、基督教の個人主義は、或る論者の主張するが如く、日本國有の倫理を破壊するものとして、斥くべきものにはあらで、寧ろ探りて以て他山の石となすべきものなり。

いでや進みて、基督が國家に對して、如何なる説を持し、又如何なる態度をとりたるかを致察せん。

(二)

瑣末なる小事、綿々たる追懷の緒となるとは、いかに美しき辭ならずや。たゞ一本の松のみ、しかも我が追懷の緒となりて、親しき友の三五、無邪氣にこの下に遊びたる様を語らばいかに。たゞ一片のリボンのみ、落花風に亂るゝのあした、我が亡き妹の髪を飾りて、美しと眺めやりたる昔を語らばいかに。人生趣味の大部分は、小事を緒として、綿々たる追懷の鎖を連るるにあり。故郷故郷、これ實にこの種追懷の緒たるべき事實もて、充たさるゝ

もの、吾人より奪ふに、故郷に關する記憶の全體を以てしなば、人世趣味の過半は滅殺し去らるべきなり。吾人の郷土にして、何等の奇なく、又何等の歴史なく、嘗て偉人を出したる事なきも、故郷は依然として、この種の樂土たるべきを、況して、其地の風景の美にして、幾多の傳説口碑を有し、幾多の人傑を生み、幾多著しき歴史を傳ふるをや。パレスチナの地や、長き、昔より、アブラハムの子孫の國したる所、幾多の預言者を生み、豊かにして、美しき傳説口碑を有し、加ふるに、光榮ある歴史を傳へたり。生れてこの地の民となり、アブラハムの子孫たるもの、いかでかこの國を愛せざるを得んや。茲を以て猶太民族は、神の特に撰みたる神聖なる民なり。猶太民族はこの地上に神の王國を實現すべき使命を有す。猶太人にして、神の命する律法に、だに從はば、神の國に君臨すべき救世主の降臨する時あるべし。て、確信を有し、印度歐羅巴人の樂園を昔に置きて、其詩人等が失はれたる樂園を悲める間に、猶太民族の其國其民族を愛するや、殆んど狂熱的にして、國歩の困難に遭遇して、いよ

其度を高め來れり。彼等がバビロンの虜囚より歸りて後猶太人は、事實に於て死したりとも言ふべく、昔日の如き大預言者は、地上に其影をとゞめず、人は唯汲々として、昔を守り、非經聖書、默示錄の如き當時の著書は、たゞ古人の名を假りて、古人の思想を語るのみ。舊約全書時代の全盛を見降りてこの時代に及べば、何人かよく猶太民族の爲に、一掬同情の涙なきを得んや。されど仔細にこれ等の著書を考察し來れば、猶太民族の宗教的狂熱、愛國的熱誠は、猶太民族の衰運に際會して、愈昂り來れるを見るなり。試に、エズラ書、ネヘミア書、オニアス書、マカビ書、ダニエル書、エノク書等を開きて、これを讀め、思半に過ぐるものあらん。基督の生れしはこの國、基督の生れしはこの時なり。彼をして世の常の人ならしめば、彼はまさに狂熱の宗教家、熱誠の愛國者たりしなるべし。彼は果して然りしか。

基督の愛
國心

然り彼は、赤誠もて、其祖國を愛したり。彼の人と語り、若くは、其道を説くや、多くは譬喩を自然界にとりて、簡單なる辭に深き、意味を託したり。彼嘗て富の恃むに足らざるを説きていふ、鴉を思ひ見よ、稼がず、穡らず、倉を

も納屋をも有たず、しかれども、神はなほこれ等を養ふ、況て爾等は、鳥よりも貴きこと幾何ぞや、爾等のうち誰かよく思ひ煩ひて其生命の寸陰も延べ得んや、云々、百合花は、如何にして生長つかを思へ、勞めず、紡がざるなり、我爾曹に告ん、ソロモンの榮華の極のときだにも、其裝この花の一つに及ばざりき、云々路加傳十二章廿八と。この種の美しき譬喩、擧げて數ふるに暇あらず。基督は、ガリラヤの平野にありて、自然界の美、自然物の美に、おもひあこがれし結果、自然に關して、かくも精細に觀察したること疑なく、彼が人と語り、若くは、説教壇に立ちて、この種の譬喩を用ふる毎に、彼の想像の、ガリラヤの地、ナザレの市に飛びて、言ひ知らぬ思郷の情に動かされし事、必ずしも想像し難からず。基督の安息日に、一婦人を癒せし時、これを難ずる者にあひて、況て、此婦は、アブラハムの裔なり路加傳十三と言へるが如き、又基督の稅吏ザアカイの家に宿れるとき、今日この家は救はるゝことを得たり、蓋この人も、アブラハムの裔なればなり同十九と、言へるが如き、又サイロピニケの女の基督に來りて、惡鬼を逐はんことを請へる時、其ギリシヤ人なるが故に、基督

のこれに答へて、先づ兒女に飽しむべし、兒女のパンを取りて、犬に投るはよからず馬可傳七章廿四と言へるが如き彼の猶太人に對して特殊の感情を有したるを示すものに非ずや。「噫、エルサレムよ、エルサレムよ、預言者を殺し爾に遣さるゝ者を石にて撃つ者よ、母鶏の雛を翼の下に集むる如く、我爾の赤子を集めんとせし事幾次ぞや。然れど、爾等は好まざりき。」馬太傳廿三章廿七エルサレムを切愛して、しかも答へられざるを嘆じて、痛切を極むるに非ずや。此他、基督の口によりて、屢々其名を繰返されたるアブラハム、モセ、ダビデ、エザイア、エリヤ等の偉人が、彼に大なる刺激を興へて、彼等の始めて、未だ成らざる業を大成せんと、熱心を奨したる事、言ふ迄もなし。猶太民族の理想、猶太の歴史は、基督其人に由りて、實現せられ完成せられたりともいふべく、基督が愛國的感情を有せざりしとは、斷じて信ずる能はざるなり。

(三)

基督降誕の當時、精神的宗教的方面より見て、猶太人の憐むべき状態にありし事は、既にこれを説けり。若し夫れ、政治的方面より觀察せんか、彼等は、

猶太の政

更に、憐むべき状態にありて、ヘロデ王、および羅馬の壓制てふ二重の抑壓に苦めり。チウダ、ユダの徒、羅馬人の羈絆を脱し、政治的に猶太人を獨立せしめんとして、叛謀を企てしも、使徒行傳五章卅四其目的を達する能はず、羅馬人及び方伯の壓制は、愈甚しきに至りしかば、當時の猶太人は、救世主の思想に政治的意義を結合して、救世主は、猶太民族の爲に、神の國を實現すると共に、猶太民族を救ひて、羅馬人の壓制を免れしむる者となして、これを期待すると、大旱の雨に於けるが如きものありき。基督は實にこの國歩艱難の時に生れたり。若し、彼に一片愛國の至誠あらば、宜しく劍を抜きて立ち、猶太民族の爲に、其獨立の旗を上げべきには非るか。まして、約翰傳第六章第十四節以下の記事に由れば、彼のガリラヤ湖邊に道を説きし時、人々彼を以て、誠に世に臨るべき預言者なりとなし、彼を執へて、王と爲さんとせるとあるをや。然るに彼は、これを避けて山に入り、海を越えて弟子に従ひ、遂に人々の望に副はざりき。彼は、猶太人の困難を目撃して、これに滿腹の同情を表せしも、我が力のこれを救ふに足らざるを知りて、彼等の望を避けたるか。

若くは彼の愛國心に缺くる所ありて猶太人の爲に奮つて立つを欲せざりしか。この疑問に答ふるに非れば吾人が前項に於て敢て下したる基督は其祖國を愛せりてふ斷案遂に支ふべからざらんとす。いざこの疑問に就いて論ずる所あらん。

試惑の意

静黙の卅年は長きに似て、しかも長きに非ず。公生涯の三年は短きに似て、實は却りて長きなり。公生涯三年の事業は實に彼の心血を傾注し盡せる生涯の事業にして、静黙の卅年は全然この三年の事業の爲に用意しつゝありたるなり。彼ヨハネに行きて、バプテスマを受けし後、我は救世主なり、我は神の子なりてふ確信既に固く、我の任務はこの蒼生に代りて、其罪を贖ふにありてふ信念、また動かす可らず、將に其救世の事業に着手せんとするに當り、其心に激烈なる波浪の襲來するものありて、人遠き寂靜の境を求め、茲に沈思に耽らんとし、この目的の爲に、ヨルダンの岸を去りて、荒野に行けり。四十日四十夜食ふ事をせず、我自らに歸りて、我自らに交り、我自ら問ひ、我自ら答ふ。彼の心は亂れて麻の如く、心心と相駭ひて、且つ悶へ、且つ苦む。

福音書に「惡魔に試みらる」と記せるものこれなり。基督は救世主の意義を理想的に解して、人の靈魂を救ふもの、人の罪惡を贖ふもの、人の肉體よりは、寧ろ其精神の福祉を進むるを以て彼の任務と信じたりしに、彼の國人は他の種類の救世主を要求し、猶太民族に與ふるに政治的物質的の福祉を以てせんことを期待したり。茲に於てか一大疑問は彼の心に浮び來りぬ、我が理想を捨て、國民の望に副ふべきかは、國民の望に背きて理想の途を辿るべきかこれなり。先に「激烈なる波浪」といへるは、この疑問に外ならず。

「試むる者、彼に來りて、曰ひけるは、爾若し神の子ならば、命じて此石をパンと爲よ。」これ彼の靈魂を救済すべき力を轉じて、物質的形體的の事に用ひよといふなり。「惡魔彼を聖京に携へ行き、殿の頂上に立たせて曰ひけるは、爾若し神の子ならば、己が身を下へ投げよ。」之なほ猶太人の要求する救世主たれといふが如し。當時の猶太人は、救世主は、殿の頂上より、公衆の中に墜落し來るが如く、俄に降臨する者なりと信じ居たればなり。「惡魔また彼を最も高き山に携へ行き、世界の諸國と其榮華とを見せて、爾若し俯れ伏して

我を拜せば、此等を悉く爾に與ふべしといふ。馬太傳第四十一これ實に、靈魂の救世主たらんは、政治的救世主たるに如かずといふなり。福音書の記事や比喩もて彼の心に襲來せる彼の大疑問を語るものに外ならず。かくて四十日の後、基督は信仰と愛との力もて人の心に神の國を立てんてふ明かなる理想を抱きて、勇者の戰場より凱旋する勇士の姿もて、荒野より歸り來れり。茲を以て彼の事業の中心たる彼の理想は、鍛鍊なき空想に非ず、烈火の如き激戰の間をくゞり來りて、しかも玲瓏玉の如き美しの理想なり。基督にして、全然政治に冷淡に、其祖國の盛衰を見る事なほ、秦人の越人の肥瘠に於けるが如くならしめば、彼は初より理想の途を辿りて、この種の誘惑に試みられざりしなるべし。其祖國の衰運に眼をつぶりしは、祖國の重からざるに非ず、其理想の更に、重かりしなり。單に基督の行動を見て、深く其心を汲まず、基督を目して、愛國心なしといふ人あらば、共に基督を語るに足らざるなり。

(四)

基督が理想の途を辿りて、猶太人の期待する所に背きし結果は如何。愚なる猶太人は、遂に彼の理想を解せず、彼を十字架に釘けて、歡呼の聲を擧げたり。世の常の人をしてこれを評せしめば、基督をもて、失敗者の中に加へん。然り、基督は、失敗者として、十字架の上に、天死したり。されど、彼は肉體を殺して、しかも、墓の彼方に、永遠不死の生命を得たるを忘る可らず。見よ、基督は、生きて今日に働き、人道の上に、文化の上に、歴史ありて、以來、他に比類なき大影響を與へつゝあるにあらずや。

基督が試惑の四十日を、荒野に送りて、其公生涯に入るの時、彼は既に、猶太人の怒を買ひて、其手に死すべきを覺悟したり。又人の子の、必ず多くの苦難を受け、長老、祭司の長、學者共に棄てられ、且つ殺されて、三日の後に、甦ることを彼等に示し始め給へり。馬可傳八章三十一—三十三蓋し其弟子に教へて、人の子は、人の手に付され、彼等に殺され、殺されて、后、第三日に甦るべし。同九章三十一—三十三我儕エルサレムに上り、人の子は、祭司の長と、學者等に付されん、彼等これを死罪に定め、異邦人に付し、又これを嘲弄し、鞭ち、唾し、且つこれを殺さん、斯くて、第

三日に甦るべし。同十章卅四死に先ちて三度死を豫言す彼の死を以て其理想の途を辿りしこと知るべきなり。ヤコブ及びヨハネの爾榮を得ん時我儕の一人を其右に、一人を其左に坐せしめよ馬可傳十と請へる時基督の答へける辭の中に、異邦人の君と見る者は其地を治め又大なるものどもは彼等の上に權を執る、これ爾曹が知るところなり然れど、爾曹の中には然すべからず、爾曹のうち大ならんと欲ふ者は、爾曹に役はるゝ者とならん、又爾曹のうち首たらんと欲ふ者は、凡の人の僕とならん、蓋し人の子の來るも、人を役ふ爲に非ず、反りて、人に役はれ、且つ多くの人に代り、其命を與へて、贖とならん爲なり、馬可傳十とあるに徴すれば、彼の救世主の意義偉大の意義を解するに於て、如何に世の常の人と相背馳するかを知るべし。彼は其理想を辿りて、其理想の救世主となり、其理想の偉大を實現して、總ての人の僕と爲れり。理想を實現して、理想の爲に、死す、男子の決事、何物かよくこれに如かんや。吾人は重ねて言ふ、彼を失敗者と言はんは、凡俗の見のみ、歴史ありて以來、彼に優りて成功せる人よく幾人かあると。

第三章 教會に於ける基督

(一)

基督の newly 家庭を作らざりしは、教會の家庭よりも重きが爲なり。基督の心を政治に絶ちしは、理想の政治よりも重く、教會の祖國よりも重きが爲なり。基督は、妻子を愛するの心を移して、教會を愛し、祖國に盡すの心を移して、教會の爲に盡せり。茲を以て、教會に於ける基督の態度を解するに非ざれば、家庭に於ける基督、國民としての基督、亦解すべからざらんとす。教會に於ける基督の態度は、やがてまた家庭に對し、國家に對する基督の態度と見るを得べし。茲を以て、本章には、教會に於ける基督を論ぜんと欲す。猶太人は、宗教の方面に於て、著しく發達したる民族にして、夙に、世界の創造者及び支持者たる眞の神を信じ、この神には、絶對的に服従するを要すと考へたり。神は、國家の行爲、人間の行爲を照覽して、賞罰を分つもの、正義は最終の勝利者なりと教へ、以て道徳的勇氣を鼓舞したり。この神の概念こ

猶太教及び教會

を猶太教のよりに立つ根本義なれ。神に對する信仰の結果として、猶太人の重視したるは律法なり。律法は神の、モーゼによりて、イスラエルの民に授けしもの、出埃及記、利未記、及び申命記に、これを説きて詳なり。律法とは、人の神に對し、又人に對して、行ふべき道にして、社會的、道德的のもの、希臘羅馬の法律の如く、抽象的權利を示す者に非ず。律法の主眼は、收めてモーゼが十誡の中にあり。山埃及モーゼの十誡を通じて、ほの見ゆる精神にして、特に吾人の注意を値するは、神の前には、何人も平等なりて、思想これなり。猶太人は、個人の靈感を重んじ、各種族、皆僧以外に、預言者を有し、其勢力極めて大なりき。彼等は、聖靈に感じて、神の啓示を蒙り、これを人に傳ふるもの、サムエルより、マラキに至る、約七百年の間には、大預言者相次いで出で、其預言舊約全書の中に傳はれり。預言者は、要するに、王、有司、人民の譴責者にして、嚴に其行爲を監視し、又モーゼの律法の解釋者なり。彼等は、皆モーゼの律法はなほ不完全なれど、さりとて、神より授けられたるものなれば、これをだに實行し行かば、救世主の降臨するありて、よくこれを完成すべしと教へ猶

太民族の間に夙に存したる、猶太人は殊に撰まれたる國民にして、この地上に、神の國を實現すべき使命を有す、彼等にして、よく律法を守らば、必ずや、救世主の降臨する時あるべして、ふ信念を、いよく深からしめたり。基督の當時は、猶太教の著しく衰へし時にして、また預言者の出づるなく、清新の氣遂に見るべからざりしも、猶太人は、なほ宗教的狂熱を有して、厚く猶太教に信頼せること、前章に略説せるが如し。猶太教の中心は、エルサレムにして、モリヤ山上に、神の殿あり、エホバを祀れり。バビロン虜囚以來、會堂を建設し、市々村々にも、神を拜する所を、建つるに至れり。猶太人は、安息日毎に、こゝに集りて、律法と、預言者の書とを、定まれる順序に従つて朗讀し、詩篇を歌ひて神を讚美せり。當時の會堂には、一定の説教者なく、第一に來りし者、立ちて朗讀者となり、先づ原文を朗讀して後、これに自由なる註釋を加へたり。たゞ事務を司り、參詣人を司配し、及び教會を主理する爲に、四五人の長老ありき。

基督の生れしは、かゝる宗教、かゝる教會を有する國にして、生後、八日、律法

に從つて割禮を受け、潔の日満ちて後、エルサレムに伴はれて神の殿にて祭を行へり。これより後、一度伴はれて埃及に行き、十二歳の時、エルサレムに上りて、逾越の節筵につらなりしが、父母彼を失ひしかば、驚き尋ねて殿のうちにて、これに遇へり。かれ教師の中に坐し、且つ聴き、且つ問ひたり云々、兩親これを見て驚き、母彼に曰ひけるは、子よ、何を我儕にかく行したるや、爾の父と我と愛ひて爾を尋ねたり。イエス答へけるは、何故我を尋るや、我は我父の事を務むべきを知らざる乎。路加傳第三章四、五、十二これに由りて、これを見れば、基督の長ずるに從つて、いと切に神を敬し、又教會を愛したる事推知し得べし。彼が静默の卅年中、彼は常に喜んでナザレの會堂に行き、時には、朗讀者、説教者となりし事疑ひなし。

基督がナザレを出て、其公生涯を始め、後彼は安息日毎に會堂に行き、定れる説教者なきに乘じて、屢説教壇に立ち、集ひ來る群衆の爲に、其道を説けり。會堂は實に彼が活動を助けたる好箇の舞臺なりき。たゞにこれに止らず、彼はまた教會の儀式を尊び、節筵に出席し、弟子と共にエルサレムに

彼の教會
事を愛せし

上りて、逾越節の小羊を食ひ、殿の廊にて説教を試みたり。又納金を忍にせず、馬太傳一七、廿四、廿七貧しき差婦の、レプタ二を囊錢箱に投ぜしを見て、これを賞讃せるより推せば、馬可傳十三、四、十一、十四基督のかゝる末節にも心したること、想ひやらる。當時の教會は、必ずしも純白なるものに非ず、其儀式の如きも、極めて恐なるもの多かりしかば、基督をして、世の常の人ならしめば、先づ形のみなる儀式を輕蔑し、ひいて、當時の教會をも卑しみしこと、疑なし。されど、彼は神を敬ひ、神の殿を尊みし結果、値なき儀式に於て、値を見命なき教會に於て、命を發見したり。彼の信仰の極めて厚く、彼の教會を愛することの、いと切なるにあらざれば、いかでかよくこゝに至らんや。

猶太人の
四派

(二)

バビロンの虜囚より歸りて後、政治の方面に於ては、た宗教の方面に於て、猶太人のいたく衰へ來りし事、既にこれを論じたり。この衰微に、伴つて、猶太民族中に、幾多の派を生じ、宗教上、政治上、共に其見解を異にして、相對立したり。これ等の諸派の中にありて、猶太人一般の信仰を代表するものを

(一) パリサイ派
 と。主として中等社會の平民より成る愛國派にして、猶太の獨立を切望し、猶太國民將來の繁榮を庶幾するの極、個人の利害、個人の品性の如きは、これを國利の犠牲に供せんとす。靈魂の不滅及び天國の天より降り來ることを信じ、神を愛すること、隣人を愛することに優りて、律法及び禮拜の外形就中、斷食、祈禱、十分の一犠牲、及び手洗ふ事を重んじ、儀式の外形を墨守するの極、この派の人々は皆偽善家なるやの觀を呈するに至れり。所謂學者の多數は、この派に屬せり。彼等は、聖書の解釋者、律法の説明者なるが故に、この名あり。これ等學者の註釋書は、世を重ぬるに従つて、漸く其數を増加し、學ぶ者は、原書を讀まざして、これ等の末書を繕くべく餘儀なくせられしかば、末には全く原書の意を離れたる註釋書を生じ、神の意、神の律法を、衣を纏ひて、横行濶歩するの奇觀を呈せり。かゝる註釋、かゝる説明の結果は、個人的、家族的、社會的、公共的の各方面に涉りて、一々人の行動を規定し、手を挙げ、足を踏む、皆これに由らざる可らず。神の律法と學者及びパリサイの

徒が任意に添加したる人の律法とは、同じ力を以て人を拘束し、何れが神、何れが人に屬するかを判別する能はざりき。この派に反對して立つは、

(二) サドカイ派

なり。この派の人々は、註釋説明をすて、聖書に歸り、煩些なる儀式に代ふるに、道德を以てせんと欲したり。されど、彼等は、必ずしも、高尚なる宗教的感情に動かされて、かゝる説を爲すにあらず、煩些なる儀式の拘束をだに脱すれば、彼等の望即ち足れり。冷酷懷疑的現世的にして、愛國の赤誠を有せず、寧ろ羅馬人に味方して、猶太の現狀に甘んぜんとする貴族、この派に屬せり。其最も極端なるものをヘロデ派となす。この他なほ天國を自己の主觀に求め、人は運命の奴隸なりと考へて、自由意志を拒み、苦行に由りて、獨り自らを潔うせんとする。

(三) エッセネ派

と、全然教會の外に置かれたる

(四) 税吏及び罪人

とあり。

基督時代の猶太人は、この種の人々より成り、基督時代の猶太教は、主として、パリサイ派に山りて代表せられたりとすれば、其煩些なる律法を云々し、これを以て嚴に人の形を責めつゝ、しかも其精神を忘却せる形式主義なることいふ迄もなし。況して所謂律法なる者には、學者及びパリサイの徒が任意に添加したる人の律法の加りて、遂にこの煩些を致したりといふに於てをや。かゝる時に當りて、宗教的感情鋭敏高尚なる宗教的天才の出づるありて、よく人の律法と神の律法とを辨別し、形式の底に潜みて、常人の見る能はざる精神を提げて、再び神の律法を發揮するあらば、彼は實に猶太教の改革者なり。されど、眼を轉じて、他の方向より觀察すれば、律法及び儀式の漸く煩些に流れ來るは、厚き信仰に必然なる結果にして、止むを得ざる者あるなり。人の心を空しうして神に向ふ時、人の心は、神の心と結合し、神の心もて充されて、いふべからざる喜といふ可らざる力とを感じ、此力を以て、事に當り、事を成すを得べし。而して、人は、絶えずこの喜と、この力とを欲する

が故に、其都度神を拜禮し、禮拜及び儀式は、漸く其數を増して、禮拜又禮拜、儀式又儀式、日もこれただならざらんとす。基督の當時に於けるパレスチナの現状これなり。然らば、人にこの禮拜を命じ、儀式を命ずる僧侶は、自らよくこれを實行するか。自らよくこれを神聖視し、其の形式の底に潜める意義を意識するか。曰く否、彼等は、其必ずしも良心より發達し來れるに非るを感じ、これを實行するも、かの喜か、力の感ぜざるに至れり。茲に於てか、僧侶必ずしも、總ての儀式、總ての禮拜を實行せず、又徒に其形を責めて、其の心を忘れんとす。かくて、彼等は、偽善家となれり。もし夫れ、宗教的天才の出づるありて、よくこれ等の偽善家を、仆し、心より神を敬するを教ふるあらば、彼は實に宗教の改革者なり。

基督は、實にこの種の改革者なり。彼の公生涯の初に於て、エルサレムに上り、牛羊、鴿を賣る者と、兌換するものとを、殿より逐ひて、神の殿を潔めし時、約三章十八節 既に、彼が改革者たるの本領を示せり。殿に於て、これ等の物を賣買することの起源を考ふるに、節進に際して、他の國より集ひ來る

數千の人々が犠牲を供へんが爲に、これ等の動物を買ひ調へんは、頗る困難の事に屬す。參詣者の爲に、この種の手數を省かんとして、殿に賣買することの始りしなり。兎銀また然り。さるを、この種の賣買、この種の兎銀に際して、徒に暴利を貪り、徒に喧噪して、禮拜を妨げ、若くは、商店の廣き場所を占めて、遠く他國より來れる異教人を強ひ、殿の外にて禮拜せしむるに至りては、要言すれば、基督の難じて言へるが如く、父の殿を貿易の家、盜賊の巢となし、祭司等のこれと利益を分つに至りては、心あるもの誰かは、擯斥せざらんや。基督は、節進に際して、エルサレムに上る毎に、親しく此弊害を目撃し、其公生活の初に於て、先づエルサレムに上りて、神の宮を潔めしなり。斯の如きは、實に宗教改革者の儀表に非ずや。

基督は又、パリサイ人及び學者の假面を去りて、其偽善を明らかにし、よりて以て、改革者の本領を明示したり。安息日に病者を癒し、馬太傳十三、斷食を守らざりし、馬可傳二、罪人および税吏と交りし、同十三、姦淫の爲に執へられたる婦を赦せし、約翰傳八、よきサマリヤ人の譬喩を語り

偽善者の假面を去る

しも、路加傳第十章、サマリヤの婦と語りし、約翰傳四、皆眞の信仰の何處にあるかを明示して、所謂信仰の假面を剥ぎ、偽善家、偽宗教の眞相を暴露せんが爲なり。斯の如くにして、彼は神爲と人爲とを判別し、神の律法と人の添加とを峻別して、殿を潔め、又宗教を純潔ならしめて、よく改革者の儀表を示せしが、爲に僧侶の怨を買ひ、パリサイ人の怒を促して、罪なきに血を流さざるべからざるに至れり。基督や實に血を流して、以て改革者たるの本領を全うせりといふべし。愚人は常に多く、先覺者は常に稀に、宗教の改革者をして、常に基督と運命を同じうせしむ。嘆ずべきかな。

(三)

宗教改革者としての基督は、墮落腐敗せる當時の猶太教に於て、神意と人意とを別ち、猶太教の律法に於て、神の律法と人の律法とを別ちしが、彼は更に一步を進めて、律法が義しき事として指示する者を探り、これを完成して、更に高き彼が道を、教へ、單に形を責めて、其精神に及ばざる形式主義に反對し、義しきと義しからざるとは、これを行ふの精神にあるを、切論したり。基督

律法の完成

(一) 神の國の近き事、

(二) 審判の日の近き事、

(三) 我が罪を悔ひ改めて神の福音を信すべき事

を教へしが馬太傳第一章 基督以前の預言者が神を心の外に見天國を心の外に見たるに反して基督はこれを心の中に見たり。基督はもと哲學者に非ず神に就いて論じ神の存在を證明すといふが如きは彼の欲せざる所彼はたゞ神を感知して神を信じぬ。思へらく神は我にあり我は神の胸にあり我は神の子神は我が父我父に在り父我に在り西約翰十 我と神とは絶えず相交通して暫時も相離るゝことなしヨハネの教ふるメシアは我にあらずして誰ぞやと。これを歴史に徴するに、一の理想の長く國民を支配して國民多數の心を動かすものあればそは遂に一偉人の意識にありて明瞭の極致に達しこの偉人の意志に由りて實現せらるゝを常とす。吾人は猶太民族の中にありて長く培はれ來りしメシアの理想が基督其人を待ちて明瞭の極致に達せるを見るなり。されど彼は初より自己のメシアなるを公

言して世人を驚かし徒に世人の反抗を買ふを愚なりとし自ら呼んで人の子といひ馬太傳九章廿二 事實の上に於て神國を建設して其使命を果さん急務としたり。人の子とは舊約聖書にあらはれしメシアの稱號中最も卑しきものなり。後には神の子の稱號をも用ひしが自己のメシア即ち救世主なるを公言したるはカイザリアピリビに旅したる時に始まる。

馬太傳第十六章に曰く彼等弟子等に曰ひけるは爾等は我を言ひて誰とすシモン、ペテロ答へけるは爾はキリスト活ける神の子なりイエス答へて彼に曰ひけるはヨナの子シモン爾は福なり蓋血肉爾に示せるにあらず天に存す吾が父なりと。後彼のエルサレムに急ぎしは國民の多く集る所に立ちて我は爾等の期待せるメシアなりと告げんが爲なり。されど基督は父と子との關係を神と彼とに限らざりき。あらゆる人々の心に神を見神は人の父人は神の子なりとて愛の神一視同仁の神を説けり。馬太傳第五章に神を呼んで天に存す爾曹の神といひ神の愛をたへて夫天の父は其日を善き者にも悪しき者にも照し雨を義しき者にも義しからざる者に

基督の教
會の特色

る。夫れ神は、其生み給へる獨子を賜ふほどに、世を愛し給へり、云々、神の其子を世に遣し給へるは、世を審判んとに非ず、彼に由りて世を救はんが爲なり、彼を信ずる者は、審判れず、信ぜざる者は、既に審判れたり、云々、罪の定まる所以は、光世に臨りしに、人其行の惡しきに由りて光を愛せず、反りて暗を愛すればなり、凡て惡を爲す者は、光を惡み、其行を責められざらんが爲に、光に就らず、眞理を行ふ者は、其行の顯れんが爲に、光に就る、蓋し神に違りて行へばなり、第三卷新に生るゝに非れば、人は眞に神の子ならず、又天國に入るを得ず。基督は實に人をして新に生れしむる者、人と神との中保者なり。

基督は、かゝる思想に基きて、新に彼の教會を創めん爲に、心を政治に絶ちて、國民の輿望に背き、生命を彼等の手に委して、多くの人の贖となりたること、前章既に詳論せるが如し。茲を以て、基督の教會は、羊と犢との血に由りて、神と人とを結合する舊約時代の教會に非ず、基督自らの血に由りて、人と神とを結合す。かの晩餐禮の夕、基督、パンを取りて祝し、之を擘き、彼等に予へて曰ひけるは、取りて食へ、これは我が身なり、また杯をとりて謝し、彼等に

基督の教
會の歴史

予へければ、皆この杯より飲めり、イエス曰ひけるは、此は新盟の我が血にして、衆の人の爲に流す所のものなり。馬可傳十四章廿二といへるは、彼自からの口より、教會のこの性質を明示したるなり。又神を拜するには、必ずしも殿を要せず、靈と眞とを以て拜する所には、神即ちあり。基督のサマリヤの女に教へて、婦よ、我を信ぜよ、唯に此山のみならず、又エルサレム而已にも非ずして、爾曹父を拜すべき時來らん、云々、眞の拜する者、靈と眞とを以て拜する時來らん、今其時になれり、夫れ父は、是の如く拜する者を要め給ふ、神は靈なれば、拜する者も亦、靈と眞とを以て、これを拜すべきなり。約翰傳四章廿六といへる、これなり。これも亦、彼の教會の、猶太教のそれに較べて、いたく異なる所たらずんば、あらざるなり。

されど、彼は、教會に關する大體の企畫を示せるのみ、これを事實にあらはして、彼の教を弘布せんが如きは、十二使徒を選び、これを委せり。たゞ、彼は、パテズマ及び聖餐禮の兩典を立て、教徒に向つて、我は世の末迄常に爾曹と偕に在るなり。馬太傳廿二と誓へり。彼の辭吾人を欺かず、彼の教會は、今

に存して、人心を支配し、彼は教會と共に、二千餘年の後に活きて、彼の福音を傳へつゝあるなり。吾人は重ねていふ、彼は、只教會の概形を示せるのみ、この概形に従つて、之を事實に實現せるは、使徒以後の基督教徒にして、歴史的教會は、其手に成れり。茲を以て、今の教會が果してよく基督教徒の理想を實現するに適するか、それは固より疑問なり。今の教會は、よく基督教の事業を繼承するに足るか、これ實に基督教徒の絶えず熱慮を費すべき大問題なるべし。彼等若し、熱慮をこゝに費さずば、教會の墮落腐敗して、基督教の意に背反することなきを保せず。既往に於て、かゝる教會を見たることあり、將來亦然らざるなきを得んや。されど、些々たる歴史的教會の汚隆、何ぞ基督教を増減するに足らんや、基督教其人と其事業とは、人の世の續かんきはみ、長へに活きて、常に人心を支配すべきなり。

第四章 祈 禱

(一)

吾人は、前三章に於て、家庭、國及び教會に於ける、基督を論じ、基督が外に向つて、いかなる確信と、いかなる力とを以て、働きしかを示せしが、本章には、基督の心に歸りて、此確信と、此力との、由りて來る源を、たゞさんと欲す。基督は、嬰兒のごと無邪氣謙遜にして、自ら恃まず、自ら誇らざる脆き人を理想とする猶太に生れて、しかも其事に従ふや、人の評して、權威を有てる者の如く教へ給ふ馬可傳一といふがごと、固き自信を有したり。これ抑何に由れるか。前章に論じたるが如く、我父にをり、父我に在りて、確信を有し、自己を以て、神の子なり、メシアなりとして、一點の私心無く、全然己を捧げて、父の聖旨を成し遂げんとしたる事、固より其原因なるべし。されど、聖書に、基督の公生涯を傳へて、祈禱に關する記事十一回の多きに至るを思へば、彼もなほ人の子、我が使命の極めて大に、我が力のこれに伴はざるを嘆じて、無力の念内に動くものありし事、思ひやらる。基督が、かの大確信かの大なる力を以て、働きしもの祈禱に、負ふ所多かりし事、疑ふべからず。

祈禱に、幾多の形式あり、神を以て、其心のまに、く、人の吉凶禍福を動かす

得るものとし、我に見を授け給へ、我に利益を得せしめ給へ、この雨をはれしめ給へ、戰場に臨むも敵陣よりわれを救ひ給へなど祈るものこれ其一。宗教的感情の鋭き人にして神の存在神の監視を確信する者の人遠く境靜なる處を求めて神と交通するものこれ其二。この第二種の祈禱に、我が理想既に高く、我が行亦これに副ひ、我よく神の域に到れるを思ひて、感謝の情禁ずるに由なく、これを神に告ぐるものと、我が理想既に高きも、我が力これに副はで、これを實現するに由なき時、言ふべからざる不足の情に動かされて、思はず神のみ前に額づき、我に力を假させ給へ、我をして神の域に至らしめ給へと、祈るものとの二種あるべし。前者は水の器物に充ちて、遂に溢れ出づるがごとく、喜悅満足の情に溢れて、これを外に發するもの、後者は心に不満を感じ、悲哀煩悶の結果、顯はれて外に出づる者なり。吉凶禍福の爲に祈るが如きは、匹夫匹婦の事、基督の如き偉人にして、如何てか彼等を學ばんや。基督の、我父にをり、我父に在り、我と父とは、絶えず相交通して、暫時も相離るゝ事なしと、感ぜし時、彼の心は、喜悅満足の情に溢れて、これを祈禱に發せし

事言ふ迄もなし。されど、基督の、ゲッセマネの園に祈りし時の如き、我心いたく憂ひて、死ぬるばかりなり馬可傳十 四章卅四と、自白せるに徴すれば、基督の心に不満を感じ、悲哀煩悶の極、これを祈禱に發せし事、亦疑ふ可らず。基督がゲッセマネの園に入りて、理想の爲め、天國の爲め、救濟の爲めに、近く受くべき自己の運命を思ひ、更に既往の事業に顧みて、彼に集りし者、多くは彼の奇跡に隨喜して、未だ彼の本領を解せず、理最もよく彼を理會すべき彼の使徒すら、なほメシヤの眞意を知らずして、メシヤ王國に高位を求むるが如き姿なるを思うて、彼の事業の將來に及ばず、日暮れて道遠しの嘆禁じ難かりしなるべく、其心憂ひて死ぬるばかりなりし者故なしとせず。死なんか、我が事業を繼ぐものなけん、死なざらんか、廣く公衆に示すに、メシヤの本領を以てする能はざるべし。死生の間に迷ひて、遂に神に行き、祈禱に由りて神と交り、こゝに其心を決したる事言ふ迄もなし。基督が、激しく鞭撻れかつ、十字架に釘けられて、些の嘆聲を發せず、寧ろ、彼を釘くる者の爲に、父よ、彼等を赦し給へ、其爲す所を知らざるが故なり路加傳廿三章卅四と、祈りつゝ、父よ、我が靈魂を汝

の手に託く同六上四とて泰然として其命を授けしは、此祈禱の翌日なり。彼の死に處する態度の極めて美しく又極めて自若なりしを思ひ、これと、ゲッセマネの祈禱とを聯想し來れば、この祈禱の、基督に與へたる影響の極めて大なりしこと、知り難からず。基督の神性を過重して、祈禱の意義を無視せんとするが如きは、愚の極なり。我と父とを一體と見て、喜悅満足の情に溢るゝもの、これを基督の半面とすれば、我が使命の獨り大に、我が力のこれに副はざるに煩悶するもの、亦基督の他の半面ならずんば非ず。兩面を併せ見て、基督に關する智識始めて全し。

日常の細節、目前の利害に忙殺せられて、沈思黙想の餘裕を有せざる人あり。我と人とを外にして、より大なるものあるを悟らず、人生、食ひ着ることを外にして、他に意義あるを解せざる人、極めて多し。この種の人々は、其注意主として外に向ひ、我が心の状態は如何、我が性癖は如何、既往に於て、我は如何に働きしか、現在に於て、我は如何に働きつゝあるか、將來はた如何に働くべきなど、自ら反省し、自ら省察するなきを常とす。希臘の聖賢が夙に教

反省に關する三種の態度

へて、先づ我を知れといひけむは、かゝる事を戒めし辭なりけむ。更に他の人あり、人以上に偉大なるものあるを知れり、食ひ着ることの外に、人生大なる意義あるを知れり。しかも、我が行のこの意義に反し、我が爲すところのこの偉大なるもの、旨趣に反せるを知りつゝ、これを改むる勇氣なく、我と我とを隔て、僅かに良心の呵責を鎮めんと欲す。ホーソンが、己が心一個を友として、これと相語らんが爲に、孤獨の生活を愛する人は少し、止む無くんば、眠れる幼兒を擁して、我と我が心とを隔てんと欲すと、嘲れるは、この輩をや指しけむ。我と我が心とを隔てん爲に、酒を用ひて、良心を鈍らし、足を遊里に入れて、其騷擾を樂むに至つては、抑も之を何とか言はんや。更に他の人あり、日常の用務に忙殺せらるゝの傍、人遠く境靜なる處を求めて、沈思黙想に耽り、眞面目に我が心に對して、反省省察の工夫を積み、暫く目前の利害を忘れ、日常の細節と絶ち、高き理想を求めて、人生の意義を直觀せんと欲す。哲學的にこれを言へば、大我小我の交通なり、宗教的にこれを言へば、祈禱なり、坐禪なり、靜坐なり、道德的にこれを言へば、反省なり、省察なり。こ

の工夫を缺く輩にして其品性極めて高く意味ある人生を送り得るといふが如きは吾人の信ずる能はざるところ思ふて茲に至れば基督の生涯を通じて屢祈れりといふもの誠に故あるを信ずるなり。

願て我邦の現状を見るに道徳を口にし宗教を論ふもの漸く増加し來れりと雖も徒に智識を求め學として倫理宗教を究め學として人生を論ずるに急にして意を品性の修養に用ひず智をだに得れば實行のこれに伴ふを信ずるもの如し。識者なほ然り世の凡夫凡婦に至りては比々としてかの第一類の人第二類の人亦少しとせず第三類の人に至りてはこれを聞くこと極めて稀なり。斯の如くにして我が國民の品性を鍊磨し我が國家の品位を高めんとするが如きは難事の中の難事に屬せり。語を國民の道徳を愛ふる人に寄す我が國民の品位を高めんが爲には彼等をして少くとも一日十五分を割きて我が心に反省せしむるの策を立てよ。祈禱可なり稱名可なり坐禪靜坐亦大に可なり。道徳を論じてこの工夫を缺がば智識の増加或は望むべし人品を高めんは斷じて望むべからざるなり。

(二)

人生にありて神秘的なるものを求むれば祈禱即ち神との交通か。他人これを侵すを得ず他人これをうかゞふに山なし。基督の祈禱に於ける亦必ず然りしなるべし。随つて彼が日常の祈禱の如きも多くは傳らず福音書の傳ふるもの如きは只其著しきものに過ぎざらん。されど吾人にして仔細にこれを考察し來ればこれ等の記事より學び得べき幾多の教訓あるを覺ゆ。彼の祈らんとするや彼れは常に人を避けて閑靜の境を求めたり。斯て衆人を歸しければ祈禱せんとて密に山に上り日くれて獨りそこに在せり馬太傳十「味爽にイエス早く起き人なき處に行き其處にて祈禱せり馬可傳一」イエス常に人なき處に退きて祈り給ひき路加傳五とあるこれなり。パレスチナの地至る處に小山ありガリラヤ特に然り全土青々として美しき花卉其間を彩り柔和なる鳥獸其間に遊ぶ。清き小河のやさしき音樂を奏てつゝ其間に出沒してよくこれ等の風景と調和するに至つては天下何物の美かよくこれに如かんや。人多き町を離れて行くこと十五分

若くは卅分にして、かゝる山の頂に達し、四圍の風光を樂みつゝ、獨りこゝに立たば、詩想先づ湧くが如く、よく世を忘れ人を忘れて、神秘的默想の中に入るを得ん。基督の旅して、或る場處に至るや、彼は先づ仰ぎて四圍の山を望み、他の旅人のよきホテルを求むるがごとよき山を求めて、こゝに入り、こゝに祈禱をこらして、神と相交れるものゝ如し。基督は祈禱の場所として、閑靜の地、特に山を撰べり。

祈禱と夜

場所を以てして閑靜の處を求むれば、即ち山時を以てして閑靜の境を求むれば、即ち味爽と夜となり。深夜世事に狂奔する人々の眠り盡して、食をあさる鼠の音を除きては、何の聞く所なきの時、未だ眠を成さずんば、我と我が心を隔てんとする輩だに、暫時は我に歸りて、良心の前に立たざるを得じ。味爽亦然り。况んや、宗教的感情に鋭き人にして、此時に遭ふをや。基督は、祈禱の時として、味爽と夜とを撰べり。イエス祈禱の爲に山に往きて、終夜神に祈れり、路加傳六章十二とある、及びゲツセマネの園にて、終夜祈れるが如きことなり。

忙中の祈

されど、基督は又、汝祈る時は、嚴密なる室に入り、戸を閉ぢて、隠微れたるに在す爾の父に祈れと教へき。祈禱せんが爲には、必ずしも山に行くを要せず、必ずしも夜に於てするの要なし。車飛び機械さしり、騷擾の音耳にかまびすしき都會の中にあつて、靜かなる時、靜なる場所を得て、神と相交る亦大に可なり。祈るに地なし、祈るに時なしなど言はんは、熱心を缺くの人なり。熱心はよく時を作り場所を與ふ、止むなくんば、騷擾の中に立ちて、眼を雜踏に絶ち、耳を雜音に澄して、祈らんも、更に大に可ならずや。

(三)

基督は如何なる場合に祈り

基督の何時何處に祈りしかは、既にこれを論ぜしが、こゝには、如何なる場合に於て、祈りたるかを見んと欲す。
 (一) 事の重大なるものありて、これを決せんと欲する時、彼は先づ祈りぬ。かの十二使徒なるものは、彼の死後、彼に代りて天國の福音を傳へ、彼に代りて彼の教會を立てしめんが爲に、特に弟子の中より選べるもの、彼の事業の成否は、一に彼等の上にかゝれり。使徒の選擇如何て忽にするを得んや。

彼はこれを撰ばんが爲に山に行きぬ。終夜祈りて朝に及び十二人を指名してこの大任を授けたり。馬太傳十章 基督がメシアの國を建つるに急にして自己のメシアなるを公言するを後にせし事、前章既にこれを言へり。彼始めてこれを公言し、メシアとして死すべき事を預言する時、彼はまた祈れり。路加傳十九章

二方に餘る重荷を負ひて、これを運ばんに苦む時、多事にして心を過勞せる時、試惑に遭うてこれに屈せん恐れある時、彼は祈禱に山りて力を得、辛勞を忘れ勇氣を恢復したり。 ゲツセマネの祈、荒野の試惑は、た路加傳第五章に、イエスの聲名ますく揚りて、許多の人々其教を聽かんとし、或は病を醫されんとて集り來れり、イエス常に人なき處に退きて祈り給ひき十六とあるが如きこれなり。

(四)

祈禱の彼に與へたる効果の極めて大なりし事は、既にこれを論じたり。而して、多かる聖書の記事中、祈禱の徵驗最も著しきもの二つあり、バプテズ

マの祈禱、及び變貌これなり。

路加傳第三章に、二十一「民みなバプテズマを受けけるに、イエスも亦バプテズマを受けて、祈れる時、天ひらけ、聖靈鴿の如き狀にて其上に降りぬ、また天より聲あり、云く、爾は我が愛子、我が喜ぶ所のものなり」とあり。こゝに「聖靈天より降り」とあるは、基督が神を直觀したるの謂なり。頓悟したるの謂なり。眞理の直觀即ち悟に、三種の狀態を考ふるを得べし。

- (一) 頓修頓悟
- (二) 漸修頓悟
- (三) 漸修漸悟

これなり。哲學研究の結果若くは、宗教的修養を積むの結果、眞理を發見して、大悟すといふが如きは、第三類の直觀、修養に修養を積み、工夫に工夫を重ねて後、或る機會に際して、轉然大悟するは、第二類の直觀、修養を積まず、工夫をこらさず、たましく、或る機會に乗じて頓悟するものは、第一類の直觀なり。第一類の直觀の如きは、我寡聞未だ其實例を聞かず、釋迦の如き、基督の如き、

世界無比の大聖と雖も、皆これ第二類の人なり。第二章に論じたるが如く、基督静黙の卅年は、まさにこの直観、この大悟の爲に準備しつゝありしなり。この時代の終に當り、ヨハネの名バレスチナの全土に響きわたるしかば、基督は、ガリラヤを去りて、ヨルダンの邊に至りて、其説を叩けり。基督が彼のバプテズマを受けしに徴すれば、彼の説に首肯せること言ふ迄もなし。基督バプテズマを受けて後、水より上りて、祈禱したり。このバプテズマこの祈禱は、彼に與ふるに頓悟の機會を以てしたるもの神を其心の中に見たり。神は我が父、我は神の子、我はヨハネの所謂メシアに非ずして誰ぞやとは、基督のこの瞬間に直観し得たる思想なり。彼既に神を見、我が使命を直観す、しかも我が使命の民衆の期待する所に反するを如何せん。これ試惑の來る所以、彼は、この誘惑の鍛錬を経て、然る後其公生涯に入れり。これに由りてこれを見れば、基督が其三年の公生涯に於て、よく彼の大業を成就したる偉大の力は、この祈禱の結果として、得來れるものなること疑ふべからず。

馬太傳十六章及び十七章、路加傳九章に由るに、カイザリヤ、ピリビの旅に

變貌

於て、初めて、自己のメシアなるを公言して後、凡そ八日、イエス、ペテロ、ヨハネ、ヤコブを携へ、祈禱せんとて、山に登れり、祈れる時に、其顔の貌常と異り、其衣服白く輝きぬ、二人の人ありて之と言へり、即ち、モーゼとエリヤなり。蓋し基督の生涯に三個の頂點あり、バプテズマ及び試惑、メシアの宣言及び變貌、ゲッセマネの大苦悶及び死これなり。バプテズマの祈禱に由りて、彼は真理を頓悟し、試惑に由りて、其理想を精鍊し、理想發展の極致に達して、こゝに變貌の事あり、メシアの宣言あり。死はメシア事業の完成にして、ゲッセマネの祈禱は、この死に先つ大苦悶なり。斯の如く觀察し來れば、心の底にありて、發展の極致に達せる理想の祈禱に際して、其容貌に影響し、これを變ぜしめたること言ふ迄もなく、變貌の時に於ける神々しさ、其形は神々しさ、其心の外に表はれ出でたるなり。祈禱に由りて、人の心の更生する毎に、何人の容貌にもこの變化あらん、只其心靈的更生のなほ完からず、其容貌の變化も、人の注意をひくに至らざるのみ。これを要するに、基督教徒の神祕的に解釋して、祈禱嘉納の徵驗とするところのもの、即ち聖靈の降下及び變貌は、

これを合理的に説明するを得べく、且つその底には深遠なる意義を包含せらるゝを見るなり。

第五章 聖書の研究

古代の
文學の

昔の國民中、文學を有する者は、希伯來人と希臘人とのみ。其分量を以て、これを後世の文學に比すれば、えて及ぶべくもあらざれど、これ等兩文學影響のもとに、他の文學の起り來れるを思へば、兩者共に輕視すべからず。兩者各其特色を有して、異彩を放てり。希臘文學は自然にして美しく、希伯來文學は莊嚴にして神祕的なり。

兩國語の
比較

國語は、文學の發達に向つて、大なる影響を與ふるもの、如何なる天才の生るゝあるも、其國語より全然獨立して、其才を振ふを得ず。茲を以て、文學を比較する者は、先づ國語を比較するを要す。希臘人は其思想豊富なるが故に、其言語の數も多く、希伯來人は其思想豊富なざるを以て、言語の數も少

兩國語の
比較

し。希臘語は主として、抽象的、概念的なるに、反し、希伯來語は、標號的、直觀的なり。例へば希臘語には、「傲慢」「失望」「嫌惡」「憤怒」といふものを、希伯來語には、「頭を高く」「心溶く」「顔を下ぐ」「息を急にす」といふが如し。希臘語は、文法複雑にして、屈曲に富み、希伯來語は、簡單にして、屈曲少し。従つて、前者は、緻密なる學問的思想を表はすに適し、後者は、深き情緒を表はすに叶へり。希臘にありては、思辨家勢力を有し、希伯來にありては、預言者勢力を占む。これ、希臘語の理屈を、いふに適し、希伯來語の感情を表はすに適するに由るなり。希臘語は、屬性を示す辭に富み、希伯來語は、これを缺けり。従つて、希臘の文體は、複雑にして、希伯來の文體は、簡單なり。

兩國語のこの相違は、いたく文學に影響し、詩に就いて見るも、希臘には、叙事詩あり、叙情詩あり、劇あるに、反し、希伯來には、叙情詩あるのみ。學問的文學は、希臘には、豊富なれど、希伯來には、全くこれを缺けり。神話に就いて論ずれば、希臘のは、客觀的、自然的にして、天然の説明を主とし、希伯來のは、主觀的、人事的にして、靈魂に就いて語れり。自然を擬人的に考ふるは、希臘人超

舊約全書

越的の神自然を動かすと考ふるは、希伯來人なり。最後に、文學全體に就いて論ぜんに、希臘文學は變化に富み、希伯來文學は千遍一律なり。たゞ情緒を歌ふに至りては、希伯來語に特殊の長所にして、他のあらゆる國語の企て及ばざる所ヨブの稍哲學的なるものを除き、他の文學は皆直觀的標號的にして深き／＼感情を歌へるものなり。

舊約聖書は、希伯來人の神話なり、傳説なり、詩なり、文學なり、哲學なり、歴史なり、律法なり。これを外にしては、希伯來思想をかゞふ可らず、猶太教解するに由なき也。この中に收めらるゝ重なる書物を擧ぐれば次の如し。

(一) 五書 モーゼの五書と呼ぶるものにて、次の五書なり。

- 創世記
- 出埃及記
- 利未記
- 民數記
- 申命記

(二) 歴史

- 約書亞記
- 士師記
- 撒母耳書
- 列王記略

(三) 大預言書

- 以塞亞書
- 耶利米亞書
- 以西結書
- 但以理書

(四) 十二種の小預言書

- (五) 詩歌
- 詩篇
- 箴言

約百記

雅歌

路得

哀歌

傳道

以士帖

五つの巻物

(六) 歴史後集

歴代史略

以士喇

尼希米亞

此他の希伯來文學

此他になほトピアス、ユヂス、ソロモンの智識、マカビ書等所謂非經聖書とエノク書、エズラ書、小創世記、タルムウド、シビル、デヒリ、其他多數の點示書とあり。舊約聖書と新約聖書との中間に來る希伯來文學なり。これ等の諸書は、基督時代の時代精神を知るに必要なもの、基督の研究者は、新舊約全

基督と舊約全書

書と共に、これを通讀するを要す。

(二)

基督の談話若くは説教の、舊約全書より引用せる句に富むこと、舊約全書に其源を發し、彼の心の大なる湖に入り、こゝに其大を成して、再び流れ出てたる思想に富むこと、彼の屢舊約聖書なる出來事人物に就いて語れることは、福音書を通讀せるもの、熟知する所なり。彼の引用に就いて考ふるに、舊約聖書中彼の特に愛せるは、モーゼの五書、詩篇、以塞亞書等なるに似たり。されど、其引用の、舊約聖書の全體に涉り、且つ必ずしも其顯著なる部分に限らず、他人はさまで注意せざる所にも及ぶを見れば、彼が舊約聖書の全體に涉りて忠實にこれを究めしこと、想ひやらる。彼の精神の、前項に論じたるが如き希伯來文學の影響を受け、これによりて培養せられたる事疑ふべくもあらず。彼がモーゼの律法より、出立し、これを完成して道徳を説き、猶太教より出立し、これを完成して、其教會を創めしもの故なしとせず。舊約聖書より分離しては、基督の教、基督の事業斷じて解すべからざるなり。

次に、基督が如何に舊約聖書を利用せるかを考ふるに、基督は、

(一) 舊約聖書に由り我が敵に對して其教を守れり。

彼は、其公生涯の全體を通じて、絶えずパリサイ人其他の非難を受けしが、此敵に對するの武器は、常に神の辭なりき。彼が、いかに巧に聖書の辭を利用して、敵の論難攻撃に答へ、敵をして沈黙を守るの止むを得ざるに至らしめしかば、路加傳第廿二章等を見れば、明らかなるべし。吾に之に止らず、彼は又、

(二) 聖書に由りて、彼自らを激勵したり。

地上に於ける彼の境遇は、一として彼が心に委せざりき。彼の家族彼を信ぜず、彼の郷貫彼に聴かず、彼の弟子平凡にして彼を解せず、強て知己を求むれば、唯古人あるのみ。孤影蕭然林間の小路を辿る時、彼は常に、アブラハムと共にありき。人遠く境靜かなる廣野の中に、彷徨ふ時、彼は常にモーゼ、ダビテ、エリアの徒と語れり。彼と同じ使命を負ひて、彼と同じ運命に苦み、遂によく其使命を全うしたるこれ等預言者の一言一行は、彼の心に如何なる慰藉如何なる鼓舞の音楽を奏でけむ。彼が切に國家を愛して、しかもこれ

に背き、家庭を愛して、しかもこれを作らず、泰然自若として、彼自らの道を行き、彼自らの使命を果したるもの思ふに、この慰藉この鼓舞の力なるべし。

基督の、我はメシアなり、我は勝利者たるメシアに非ず、衆に代りて、苦む所のメシアなりて、ふ確信に達したるは、何時なるか。吾人は、定かにこれに答ふるを得ざれど、彼がこの種の思想を舊約全書に得たる事言ふ迄もなし。福音書を読む輩が、絶えず、是主預言者に由りて、……と云ひ給ひしに、應せんが爲なりと、あるに遭遇するは、基督が、預言者のメシアに就いて言ふ所の者を以て、其身を律し、

(三) 聖書を以て、我が行く道の儀表となせる

證と見る可し。

程子嘗て曰く、論語を讀むに、讀み了りて全然事なき者あり、讀み了りて後、其の中の一兩句を得て喜ぶ者あり、讀み了りて後、之を好むを知る者あり、讀み了りて後、直ちに手の舞ひ足のこれを蹈むを知らざる者ありと。吾人は、これを読み、論語を讀む者の態度を評し盡して、些の遺憾なきを覺ゆ。聖書

を讀む者も亦斯の如し讀みて何等の得る所なく即ち卷を捨て、この書人に用なしといふものあり。讀みて一二會心の文字にあひ初めて聖書の尊きを知るものあり。斯の如きは未だ聖書を讀みて至らざる者たゞ聖書てふ希伯來文學の全體を貫通する思想の中心點を解する者にして初めて共に聖書を談ずべし。基督の如き蓋し其人か。基督は常に聖書の辭を用して自説を確かめしのみならずよく其辭の精神を發揮し、一見頗る乾燥なる文字を變じて趣味津津たる者となせり。聖書の全體を貫通する深き精神を汲みこゝに引用せる辭の口より總てこれを噴出する者に非れば如何てかよくこゝに至らんや。基督は忠實に聖書を讀みてよく其精神を汲みこれを儀表として其生涯を送れり。こゝを以て基督を究めて其精神を汲む者あらばこれ猶太思想の精華を集めてこれを其身に體する者基督を儀表としてみ足の跡を辿る西洋の偉人に求むれば其例敢て少しとせず。吾人が禿筆を呵して基督の儀表を説くは猶太思想の精華を示さんと欲りすればなり。

我が知人の子に學校の課程として論語を讀む者あり。嘗て試にこの子を捉へて之に問うて曰く論語は何人に就いて語るかと。彼答ふる能はず。茲に於てか重ねて問ふ子曰の子とは何人ぞ。彼曰く孔子。孔子何人ぞや。彼又答ふる能はず。即ち孔子の傳記性格の大要を語りて後教ふるに論語の其言行録なるを以てす。彼喜色滿面叫んで曰く我今にして初めて論語を解せり論語は實に我が最も嫌厭せる課程なりきこれ教師の孔子に就き論語及び論語の精神に關して毫も教ふる所なかりしに由る我今にして初めて論語を解せり今より後樂んでこの講義を聴くを得んと。論語を教へて其精神を傳ふる能はざるもの如何てこの教師のみならんや。徒に聖賢の語を云々し勅語の文字を引用して殿に學生の形を治め聖賢の精神勅語の御主趣を忘るゝは今の倫理教育の通患なり。よく舊約聖書を究めてこれを同化しよく律法の精神を解してこれとより更に百尺竿頭に一步を進めてよく律法を完成せる基督吾人のこれを今の教育界に待つこと猶太人のメシアを期待せるに譲らざるなり。

如何なる如
基の語を
聖の語を
みし約か

(三) 舊約聖書は其初め希伯來語にて書かれたるものなるが紀元前二百八十四年より二百四十七年の間に於て埃及王シロネマイオス、フィラデルフス、七十人の學者に命じて希臘語に翻譯せしめたり。これをセブチアジクタ (Septuaginta) といふ。基督の世に出でし時希伯來語は既に死してこれを語る者なくアラマン語と呼ばるゝものこれに代り。馬可傳第六章なるタリタクミ(女よ我爾に命ず起きよの義)四十の如き又馬太傳第廿七章なるエリ、エリ、ラマサバクタニ(吾が神吾が神何ぞ我を遣て給ふやの意)四十の如き何れもアラマン語なりといふ。アラマン語の希伯來語に於けるはなほ以太利語の拉丁語に於けるが如し。セブチアヂンク即ち希臘譯舊約聖書は當時既に廣くパレスチナに行はれしがアラマン語に譯されたる舊約聖書もありて基督のこれを讀みしや否俄に決す可らず。基督の引用せる舊約全書の辭の中には吾人の有する何れの聖書とも相合せざるものあり。茲に於てか説を爲す者ありていふこれアラマン語譯舊約全書より引けるに

基督の教

由ると。されどアラマン語譯聖書の存在は固よりたゞ假定のみこれが存在を斷定すべき證據は一としてあるなきなり。然らば基督は如何なる國語に由りて舊約聖書を學べるか。

當時の猶太にありては教會のハツザン(Hazzan)即ち聖書を讀むの人町の兒童を集めてこれに讀書を教へ頗る我邦の寺子屋に類するものありき。基督にして教育を受けしとすればたゞこの種の教育を受けし其不完全なりし事いふ迄もなし。今日にありてこそ教育の有無に由りて人品の高下をも分て教育制度なほ不完全に智識はこれを口より口に傳へ時代の精神はこれを人と人との觸接によりて傳へたる昔にありては文字の有無必ずしも人品と相影響せず無教育は寧ろ人に與ふるに獨創の見を出すの機會を以てしたり。基督の生れしは實にこの種の地この種の時代なれども彼は早くより人に卓越せる智識慾を有し心を空しうして賢者の説を聴き又開きて其眼前に横はる三大書を究めて暫時も怠る事なかりき。三大書とは何曰く自然曰く人曰く聖書これなり。

ルナンは基督の智識を最も狭小に解したる人論じて曰く彼の當時希伯來語は既に死したり彼はアラマン語譯の聖書を読みしのみ原書を知らず希臘語はバレスチナ特にガリラヤに廣まりしもこれを用ひしは政府に仕へて官吏たる人々のみ基督希臘語を知らず希臘文化は當時の一大勢力にして埃及のアレキサンドリアを中心として幾多の學者こゝに集り舊約全書を希臘語に譯せるのみかは希臘思想と希伯來思想とを結合して其上に自己の哲學を立てんとするフィロン(Philon, about 30 B. C. — about 50 A. D.)^註出せしも基督は嘗てこれを知らざりきたゞにこれに止らず基督がよく世界の大勢を解し羅馬帝國が宇内を越えて支配しつゝあるを知りしや否頗る疑はし彼の智識の範圍は唯猶太教に限れりと。基督が希臘の文化を解せず世界の^{大勢}に通せずして其智識の専ら猶太教に限れるは何人も首肯する所なり。基督希臘語を解せるや否やに關してストーカーは論じていふ當時のガリラヤ人は異教徒とせられし位にて希臘人のこゝに住する者極めて多かりき基督豈希臘語を學びてセプテアデントクを讀む機會なからんや

舊約全書より新約全書に引用せられたる句の頗るセプテアデントクに類するものこれを證して餘りありと。基督が希伯來語を解せるや否やに關するストーカーの説は次の如し。曰く學者の言ふ所によれば彼の引用せる句の中には希臘譯に遠くして希伯來の原書に近きもの頗る多し加ふるに基督はナザレに於て安息日に會堂に入りて聖書を讀まんとて立てり^{傳四}六章十當時會堂に備へられたる聖書は希伯來の原書にしてこれを讀むの人先づ讀みて後これをアラマン語に譯せり基督が會堂に於て聖書を讀まんとして立てるは彼の希伯來語を解する證にあらずやと。兩者共に半想像を交へたるの説吾人初學者の容易く決し得る所にあらず取捨撰擇はこれを讀者の自由に任せんと欲す。これを要するに基督の智識はこれを今日より見れば頗る狭小なり。未だ世界を知らず未だ世界の文化を知らずたゞアラマン語若くは希臘語若くは希伯來語の聖書を究めてよく猶太教の奧義に通じたるのみ。

なほ一事の注意すべきは彼が家の富を以てして聖書の全體を所持する

が如きは、難事中の難事たる事なり。思ふに、詩篇其他美しき一二の書を有するに過ぎざりしなるべし。されど彼の智識慾の盛なる、或はこれを人に借り、或はこれを會堂に借りて、其全體を通讀し、其全體を理會し、玩味し、遂にこれを利用するに至りしなるべし。これを吾人の聖書を讀むに比すれば、其苦心霄壤も、霄ならず。彼がよくこの困難と戰ひて、これに勝ちし忍耐を思へば、同情の念頻りに湧きて、敬慕も、能はざるものあるなり。

第六章 基督の勤勞

勤勞に關する理想の様

(一) 勤勞に對する理想は、人に由りて同じからず。

あり、(一) 活動を尊ぶもの

あり、(二) 安逸を重んずるもの

あり。人生は戦争なり、努力なり、瞬時も止息す可らず、働けよ、或者たれ、人生

勤勞の尊卑に關する見解の様

の意義の中に存すと主張するは、活動主義、人生の理想は安逸にあり、吾人の勞して食はざる可らざるは、人間のなほ不完全なるに由る、安逸を求めよ、安逸にして、しかも、生活に差支なき時來らば、これやがて黄金時代なりといふは、安逸主義なり。東洋人は安逸主義に傾き、西洋人は活動主義に傾く、熱帯地方の人、粘液質の人は、安逸主義、温帯地方の人、膽汁質の人は、活動主義を慕ふ。又、一方に、勤勞を卑しみて、精神的の勤勞を重んじ、

(一) 職業に尊卑を分つ者

あれば、他方に、勤勞を尊重して、

(二) 職業に尊卑を分たず

あり。昔者希臘の俗、公民は、専ら公事に盡力して、勤勞を潔しとせず、勤勞は、これを舉げて、奴隷に委任したりしかば、公民奴隷の別を生じ、公民は尊く、奴隷は賤しく、政治は、高き業、勤勞は、低き職業となれり。我邦の封建時代も、亦これに髣髴たるものあり。武士は、尊族にして、遊食の徒、四民は、卑族にして

労働の民たり。斯の如きは、共に職業の尊卑を分ち、職業に山りて人を上下する者なり。西洋晩近の傾向は、これに反し、獨立自營人によらず、人を頼まざるに汗して食はんと欲す。労働者の地位を高めて、これに富者同様の權利を與へ、これをして、富者同様の快樂を享けしめんとする社會主義の如きは、此主義を標榜して立つものなり。活動果して尊きか、安逸果して忌むべきか、労働果して卑きか、職業に果して尊卑ありや、以下、これ等諸問題の解釋に向つて、基督の儀表が如何なる光明を與ふべきかをたいさんと欲す。

活動の生

基督はもと貧しき木匠の子、早く父を失ひて、後自ら父の業を繼ぎ、額に汗して母と同胞とを養ふ三十年、深く間斷なき沈黙を守つて、嘗て語らず、嘗て言はず、尋常一様の境遇にゐて、尋常一様の勞役に服しぬ。所謂静黙の卅年これなり。されど、この卅年を以て、單に木匠の卅年と解する者あらば、これ彼を知らざるの言なり。既に屢言へるが如く、彼の静黙を守れるは、他日大に活動せんが爲なり。一度大に縮みて後、又大に伸びんが爲なり。大に潛ん

て後、大に雄飛せんが爲なり。美しきナザレの山水に接して、絶えず其詩想を養ひ、貧民と交りて、其内情を探り、人に接し、人に交り、人の心の奥を發きて、これをうかひ、忠實に聖書を學びて、古の預言者を友とし、猶太人の道德、猶太人の理想を究めて、これに通じ、手に工匠の業をとりつゝ、心に人生の歸趣を求め、又人生の意義を探りて、些の暇なかりしなり。斯の如くにして、人心を知ることに既に熟し、人生の歸趣、人生の意義既に明らかに、我が使命の那邊に存するかを感ずるに及び、基督は、忽ち飽と鈍とを捨て、立ち、或は奇跡を行ひて、人身の病を治し、或は説教を試みて、人心の疾を癒せり。彼が天國の福音を宣傳して、東奔西走せる三年の公生涯は、他に其比類を見ざる多忙の生涯にして、食ふべき時をだに有せざりしこと、イエス、彼等に曰ひけるは、爾曹衆を避けて、我と偕に暫く寂寞しき處に往きて、休むべし、是れ往來の者多くして、食する暇も無りしが故なり、馬可傳第六、多くの人々來り集りければ、食する暇も無かりき、同三十一、あるに徴して、思ひやらる。基督の如く、其生涯の全體を通じて、絶えず活動せる人は稀なり。

基督は、單に活動主義を實行せるのみならず、又これを人に教へて、人の偉大は其力、其時を擧げて、獻身的に人の爲に活動するにあるを示したること、第二章に論じたるが如し。約翰傳第十三章^{十一}に由れば、基督弟子等と晩飯の席につきし時、自ら弟子の足を洗ひて後、教へて曰く、爾曹我を師と呼び、又主と呼ぶ、爾曹の言ふところはよし、我は誠に是なり、我は爾曹の師、又主なるに、尙爾曹の足を濯ぶ、爾曹もまた互に足を濯ぶべし、我爾曹に例を示せり、こは、我爾曹に行し、如く、爾曹にも行しめんが爲なりと。獻身的に活動せよといふの意、いよく出て、いよく明らかなるに非ずや。路加傳第十九章^{十二}に、金十斤の譬あり、曰く、ある貴者、自ら領地を受けて歸らんとて、遠國へ往く時、十人の僕を召びて、彼等に、金十斤を與へて、曰ひけるは、我來る迄、商賣せよ、云々、領地を受けて歸りし時、各商賣して、幾何の利を得たるかを知らんとて、金を與へおきたる僕等を召べと命じぬ、初の一人來りて曰けるは、主よ、爾の一斤は、十斤の利を得たり、主人曰ひけるは、愈し、善き僕よ、爾は少かの者に忠なれば、十の邑を宰るべし、云々、又一人來りて、曰ひけるは、主よ、爾

の一斤は、此に在り、我手巾に裹みて藏め置きたりき、蓋爾嚴しき人なるが故に、我もそれたり、爾置かざるものと、播かざるものを獲る人なればなり、主人曰ひけるは、惡しき僕よ、我爾の口に因りて、爾を鞠くべし、爾、我は嚴しきものにて、置かざるものを取り、時ざる者を獲ると知る、然るに、何ぞ、我が來る時、本と利を得んが爲に、我が金を免錢肆に預けざりしや、遂に傍に立てる者に曰ひけるには、此人の一斤を取りて、十斤有てる者に與へよと。之、譬喩に由りて、人の務の忽にすべらざる、と、其務を怠る者の責罰大なるを説きて、安逸主義に反對する者に非ずや。此他、馬太傳七章^八、求めよ、然らば與へられ、尋ねよ、然らばあひ、門を叩けよ、然らば開かる、ことを得ん、蓋すべて求むる者は、え、尋ねる者は、あひ、門を叩く者は、開かるべければなりとあるが如きは、求めずして與へられんを欲し、尋ねずして遣はんことを思ひ、叩かずして門の開かれんことを希ふ、安逸主義に反對して、至らざる無きに非ずや。基督の如く、よく活動主義を實行し、又よく活動主義を教へしもの、よく幾人がある。

基督教の道徳は、愛を中心として、柔和と謙讓とを重視す。故に、惡は、惡に由りて勝つ可らず、善に由りて勝つべし。勸善は、善によりて善を勧め、心に由りて心を化すること、に由りて仕遂げらる。神の國に於ける唯一の武器は、力にあらずして、柔和なり。こゝを以て、基督は、爾曹の敵を愛み、爾曹を誼ふ者を祝し、爾曹を憎む者を善視し、虐遇め、迫害むるもの、爲に祈禱せよ馬太五章四十三と説きぬ。人若し、人の神の子たるを知らず、我に、天國を求めて、これに入る可き使命あるを知らざれば、止む若し、眞にこの使命を解して、これを果すの容易ならざるを思はゞ、謙讓の念、油然而して、其心に湧き來るを見む。謙讓の念は、微力の威より來らず、人の使命を尊ぶより來る。謙讓の念なき者は、未だ神の大ならざるを悟らず、未だ人の使命の重きを知らず。茲を以て、基督は、嬰兒の謙讓を愛して、これを祝したる事、第一章に論じたるが如し。斯の如く、柔和を教へ、謙讓を教へ、没我獻身を説きて、弱き人、脆き人を理想とする基督にして、自らよく活動主義を實行し、活動主義を教へて、獨立自主を標榜する希臘人の壘を辱するは、頗る疑はしきに似たり。されど、仔細に觀

察し來れば、希伯來主義の長所は、柔和謙讓と自信、脆弱と希望との兩極端をとりて、美しくこれを調和し、如何なる困難に處するも、敢て阻喪せず、敢て自暴自棄せず、如何なる得意に處するも、敢て傲らず、敢て高ぶらざるにあり。これを基督に見るに、彼は、我父にあり、父我にありて、ふ信仰を有するの結果、我の世に降れるは、父の榮の子に因りて、顯れんが爲なり。約翰傳十三と信じたるを以て、この確信は、彼に精力を與へ、熱心を與へ、彼を化して、活動主義の人たらしめしなり。斯の如くにして、彼の活動せる結果、彼はよく其使命を全うし、我なんぢの榮を世に顯し、爾の我に委ねし所の行は、我これを成せり。約翰傳十といひ、又事畢りぬ。約翰傳十といひて、戰勝ちし勇士の戰場に仆るがごとく、得意の微笑を、其兩頬に湛へつゝ、泰然として、この世を去りしも、彼は、毫も其功に誇らざりき。これ、我のよく大業を成就したるは、父の我を通して言ひ、我を通して行ひしに由ると信じたればなり。爾曹の聞くところの言は、我言にあらず、我を遣し、父の言なり。約翰傳十四これ、爾凡の者を制する權威を、我に賜ひたればなり。同十七章などある以て、徴すべし。彼より

後、彼を敬慕し、彼がみ足の跡を蹈む者は、何れも皆彼に倣ひて、人の爲め、世の爲に其身を捧げ、没我的に活動したり。されど、かくて成し得たる功績は、敢てこれを我身に收めず、弱く脆き我をして、よくこの功を立てしめし神の榮に歸せんとす。勤勞はこれに當り、榮はこれを辭して受けず。吾人はこのに基督教の美を見こゝに、基督教の大を見る。我邦人若し基督教のこの長所を解して、よくこれを學ぶあらば、所謂紳士てふもの、人品を高めんこと、それ果して幾何ぞ。

(三)

希臘人及び封建時代の日本人が、職業に由りて、人に貴賤を分ちしことは、既にこれを論じたり。羅馬人も亦勞働を卑しみて、遊食を重んじ、職業に由りて、人に貴賤を分ちしかば、當時の學者、エピクテッス(Epictetus, about 100 A. D.)は、論じて言へりき、毬戯に重んずべきは、球其物にあらず、これを投じ、これを受くるの巧拙にあり、富と地位とに應じて人を上下し、職業に由りて人の貴賤を分つが如きは、毬戯に球を重んずる者に類すと。エピクテッスの言、實

職業に貴賤なし

に我が意を得たり。蓋し人の貴きは、人にありて地位にあらず、又職業にあらず、職業人を上下せず、人却りて職業を上下す。基督木匠に出づれば、木匠爲に貴く、ワシントン農家の出なれば、農業爲に貴きが如し。

人の社會に居るや、従ふべきの業實に少からず、勤勞の形式は千差萬別なり。更に顧みて、人を見れば、其個性亦同じからず、長所あり、短所ありて、千差萬別なり。千差萬別の職業を以てして、千差萬別の人を待つ、人は須く我が個性に適するもの、我が得意なるものを選びて、これに當るべきなり。社會の存する所、こゝに分業行はれ、協力分勞して、社會始めて全く、個人も亦全きものは、これにこれ由る。協力分勞の結果は、人力を集めて、自然に當り、以てこれを征服すべく、協同一致の徳こゝに養はれ、堅忍不拔の氣象こゝに培はれ、規律を重んじ、秩序を尊ぶの美風こゝに萌し、ひきて同情同感の必要を促し、人と人とを結びて、一團となし、以て其文化を進め、以て其幸福を増進す。故に吾人は重ねていふ、職業に高下なし、あらゆる職業相補充して、社會始めて全しと。基督が木匠を卑しとせず、こゝに活動の地を求めて、其家族を養

ひ、又自らを養ひしもの、故なしとせんや。頃者、この眞理に着眼する者漸く多く、文學者亦労働の尊きを唱へて、労働の福音を傳ふ。トルストイ、カーライルの如き其最たるものなり。

職業に難あり

職業に貴賤なし、たゞ人これを貴くし、又人これを卑しくすてふことの果して、事實ならば、基督の木匠をすて、牧師となり、説教者となり、宗教擁護者となりて、其生命を捨てたる理由如何。曰く他なし、彼自ら彼は、木匠たらんよりも、牧師たるに適し、説教者たるに適し、宗教擁護者たるに適すと、信じたれば也。木匠に適する者、其人に乏しからず、只牧師、説教者、宗教擁護者としてよく其任を全うし得るものは、彼を措きて他に人なきを信じたればなり。職業に高下なし、しかもこれに難易あるは、争ふべからず。フヒテの如きは、牧師、學者及び美術家を以て、特に貴き職業として、これを他の職業と分ちしが、これ其難くして、素養あり、準備あり、天才あるの人に非れば、其職に當りてよくこれを辱めざる能はざるに由る。基督は初より、自己の使命の那邊に存するかを知りぬ。されど其至困至難にして、素養を要するの大なるを知

職業は同じ人は様々

れり。茲を以て、静黙卅年汲々として、修養に努め、準備略成りし後、始めて其事業の爲に立ちたるなり。彼の木匠として、静黙の卅年を送りしは、木匠を以て、我が事となしたるに、あらず、これを以て、他日我が使命を全うすべき階梯となしたるなり。彼の職業を轉じたるを以て、職業に高下あるの證となすは、即ち當らず。

職業に高下なし、されど、これに當るの人に上下あるは、既にこれを言へり。茲を以て、同じ職業を營みて、同じ田に耕し、同じ机に倚る者も、其人品の高下を較すれば、善壤もたゞならざるべし。或は、人生の歸趣、人生の意義を知悉し、我が地位、我が境遇を善用して、我を利し、人を益せんと欲するものあるべく、或は、人生の意義を解せず、たゞ境遇に餘儀なくせられて、牛馬の鞭のまにまに行くが如く、蠢々乎として、其職業に従事するものあるべし。或は、これを以て、自己の使命とし、これに由りて、人のため、世の爲に、盡さんとする者あるべく、或は、これを以て、一時の便宜に出づるとなし、この職業に當るの傍汲々として、我が使命の爲に、活動する人あるべし。これを要するに、職業は我

九八
偉人耶蘇
以○外○の○も○の○我○の○我○た○る○所○以○は○こ○ゝ○に○非○ず○し○て○他○に○存○す○。○職○業○を○以○て○其○志○
を○移○さ○ず○、○こ○れ○を○利○用○し○て○其○ベ○ス○ト○を○盡○さ○ん○と○す○る○者○あ○ら○ば○こ○れ○豈○眞○の○偉○
人○に○非○ず○や○。○ナザレの基督の如きは即ちこれなり。

(四) 人の精力は無限に非ず、人の體力亦然り。こゝに於てか準備及び休養の
必要あり。活動又活動寸時も休む時なければ、精力體力と共に疲弊して、其
ベストを盡す能はざる可し。猶太人夙にこれを解し、モーゼの律法にも、安

息年及び安息日の定めあり。基督も亦よくこれを解し、明日の事を憂ひ慮
ふなかれ、明日は明日の事を思ひわづらへ、

(一) 一日の苦勞は一日にて足れり。馬太傳七 章三四

とて、日一日其日の務を盡して、やうなき追思、やうなき遠慮に心を過勞する
の愚なるを説けり。彼は又、

(二) 準備なしには何事をも爲さざりき。

時至らずとは、基督の絶えず繰返せし辭、徐に機の熟するを待ち機至れば、猛

然これを斷行して、空しく之を失はざらんことを必したり。靜默の卅年が、
彼の大業の準備時代なりしことは、既にこれを言へり。彼の公生涯の多忙
を極めしは、既に論じたるが如し。かゝる間にありても、彼は、

(三) 絶えず休養の時を求め、

彼の治療を受けん爲め、彼の説教を聽かん爲めに、彼の身邊に蟻集する者あ
るも、彼はこれを、人なき處に避け、茲に身體を休養し、茲に神と交通して、其精
力の復歸を謀れり。弟子の疲勞に注意する時、彼は常にいふ、人なきに來り
て、暫く休息せよと。見るべし、彼のよく休息の必要を解したるを。

猶太人の安息日は、神六日の間働きて、天と地と、其間にある万物を作り、第
七日に休みたれば、この日を記念せんが爲に設けしもの、六日の間働きて、第
七日に休み、世俗の務を擲ちて、専ら神に事へ、神の道を學び、其精力を補ひ、其
身體を壯健にせんと欲せり。基督も亦、神の律法に従ひて、安息日を守りし
が、當時のパリサイ人が、嚴に安息日を守るの極、安息日に善を行ふをすら非
難せしかば、基督のこれを難せしと、馬太傳十二章、約翰傳五章等に見ゆ。猶

本人は、土曜日を以て、安息日となしたりしが、基督復活の日、日曜日なりしを以て、基督教徒は、この日を記念して、主の日となし、これを以て休養の日と定めて、今に至れり。我邦にても、基督教徒の此風習を容れて、日曜日を以て、學校官省等の休日となせども、聖日にこの種の意味あるを知る者少し。基督教徒ならぬ人々に、基督を紀念せよといふは、愚の極なれど、この日を以て、休養の日、反省の日となして、よくこれを利用する人あらば、其品性の修養に裨益する果して幾何ぞ。吾人は、邦人の、日曜日を善用する事を知らざるを悲む者なり。

第七章 基督の忍耐

幸福と災厄

事なうして、日々(一)の勤勞に服す、何の幸かよくこれに如かんや。されど、これは、單に、人生の半面にして、なほ、困厄の半面あるを忘る可らず。論者、或は、幸福を以て、晝困難を以て、夜に類へ、一を人生の光彩面、他を暗黒面と見て、兩者

災厄に處するの道

は、相纏綿する繩の如しと論すれど、これ未だ禍福を論じて至らざるもの、觀じ來れば、禍福兩要素の相働きて、人生を織成すがごと、不可思議なるものは、あらしな。生れてより死に至る迄、何等の災厄なく、面白可笑く世を送る人あれば、死は、そが最愛の人を奪ひ、病は、そが身心を苦めて、涙と共に、其世を終る人あるべし。天才必ずしも世を長うせず、善人必ずしも幸あらず。今日酔うて花にうかるゝの人、焉んぞ知らんや、明日水に溺るゝの人たるを。今夕雷に打たれて死したる人、何を知らんや、今朝樂しき人生を歌ひし人なるを。觀し來れば、禍福兩要素の相働きて、人生を織り成すがごと、不可思議なるものは、あらしな。

「飲めや、歌へや、一寸先は、關よ、今は半の花盛り」。得意に酔ひて、人を忘れ、己を忘れ、人生を忘るゝの人に非ざれば、何人かよく、眠を人生の災厄につぶら之をして、其心を困しましめざるを得ん。况んや、自ら災厄に遭遇して、其不幸に泣くの人をや。茲に於て、か災厄の意義果して如何、災厄に處するの道如何とは、人ありて以來、絶えず、人心を苦めし、大問題なり。世界に國したる

者、世界に國するもの、其數何を限らん。しかも、これ等の諸民族が、高がれ低かれ、宗教を有するは一なり。これ等の諸宗教が、死に對する恐怖の情、禍厄に對する怪訝の念に、其端を發するは、即ち一なり。靈魂の不滅を説くは、墓の彼方の樂土に由りて、墓の此方の不幸を慰せんが爲なり。佛敎の三世説、基督敎の審判説、儒家の知命論、福善禍淫論、何れか此問題の解釋ならざる。既に人生の光彩面を究めて、勤勞に處する所以を考ふるも、兼ねて人生の闇黒面を見、困難に處する所以を説くに、非れば、道を講じて至れるものに非ず。基督の儀表が、前者に關して、吾人に與ふる教訓は、既にこれを略論したり。本章には、其後者に關するものを見んと欲す。

多難の生涯

(二) 闇黒を以て初まり、闇黒を以て終りし事、基督其人の生涯の如きは、蓋し稀なるべし。彼の生るゝや、布に裹みて、槽の内に臥させられたりと路加傳二章六節傳ふ。彼長じて後、其父の家庭にありて、いかなる運命の下に立ちしか、之を傳ふる者なしと雖も、其食しき木匠の子にして、早く既に父に別れ、母と同胞と

を養ふの重荷を負ひし事、疑なきに似たり。彼が後年、彼自らの境遇を語りて、狐は穴あり、天空の鳥は巢あり、然れど人の子は、枕する所なし馬太傳八章廿二節と云へる、彼が生涯の

(一) 日常必須の衣食住にすら缺くる所ありし。

(二) 試惑

を洩して、吾人の同情を値する者あるに非ずや。彼が準備時代の終に於て、二精神的の大困難に遭遇したる事は、既にこれを論じたり。されど、試惑はただこれに止らず、其公生涯の三年間すら、屢これに遭遇し、甚しきに至りては、彼の死を預言せる時、其高足、ペテロ、イエスを援きとめて、主よ、宜からず、此事爾に来るまじ馬太傳十章廿二節といふに至りしかば、彼は、憤然として怒り、サタンよ、我が後に退け同廿三節と大唱したり。其心を苦めしこと、果して幾何ぞ。彼既に、公生涯に入り、其道を説くに及び、家族彼を信ぜず、親屬彼は狂氣せり馬可傳三章廿一節と見、ナザレの人亦彼を信ぜず、起ちて、イエスを邑の外に出し、投げ下さんとて、其邑の建ちたる山の崖にまで、曳き往く路加傳九章廿九節の暴狀を極め、

彼をして、預言者は、

(三) 其故土其家に於て辱まれず

の嘆を發せしむ。唯にこれに止らず、彼の神國を宣傳し、奇跡を行ふが故に、彼を目して、彼は惡鬼の王、ヘルゼブルに藉りて、惡鬼を逐ひ出せるなり路加十一。五章となすものあり、彼安息日を守らず路加六章。彼の弟子斷食を守らず馬可傳二章。とて、彼の律法を守らざるを難するものあり、彼失はれたるものを求め、レビの家にて饗應を受くれば、食を嗜み、酒を好む人、稅吏罪ある者の友也馬太傳十と難ぜられ、祭司の長、爾キリスト、神の子なるかと問ふに答へて、爾が言へる如しといへば、此人は、褻瀆することを言へり馬太傳廿六章。六と難ぜられたり。斯の如くにして、彼は、其生涯を通して、

(四) 其道の爲に苦めり。

彼のガリラヤにありて、道を説くや、彼の身邊に蟬集するもの極めて多し、彼は、此中より、常に彼と共に在るべき弟子の一團を作らんとして、十二の使徒を撰べり。後基督の、其與へんとするは、肉體を養ふ、パンにはあらで、生命の

パンなるを説くに及びて、彼の弟子は、多く、返り往きてイエスと偕に行かざりしかば、彼は之を願て、爾等も亦去らんと思ふやと問ひ試みしに、彼等は答へて、主よ、我儕は誰に往んや、永生の言を有る者は、爾なり、又我等信じて知る、爾は活ける神の子、キリストなり約翰傳六章。六といへりと傳ふ。されど、彼等も、王國の意を形式的に解し、基督をして、此謬見を解くに苦心せしめしは、福音書の明らかに傳ふところ、彼をして、爾曹の心なほ頑さか、目ありて視ざるか、耳ありて聽まざる乎、また覺えざる乎馬可傳八章。と詰責せしむるに至りては、

(五) 使徒の信仰に厚からざる

知るべきのみ。況んや、彼の死に處する彼等の態度の如何にも、女々しく、彼の死後思ひ／＼に離散せるをや。彼の事業の後繼者、斯の如し。彼が其身の上に來るべき運命を預知し、願みて、其使徒に及びし時、彼が胸裡に往來せる感懷果して如何。又手術に先ちて、メスの相觸るゝ音を聽きつゝ、切開の苦痛を豫想することの如何に、不愉快なるかを知る者は、必ずや、我が死期を

豫想しつゝ、其到達を待つ人の心事を解して、これに限なき同情を表せむ。兆民居士の一年有半が、其内容の値なきにも係らず、なほ讀むものを動かし得たりしは、直接間接にこの種の苦痛を語りて、人の心の弦線に觸るゝものありたればなり。基督は、實に、其死を豫期して、三度もこれを豫言せるの人、

(六) 絶えず、死を豫想するの煩悶を感じたり。

この煩悶や、死期の接近するに、従つて、其度を増し、ゲツセマネの園に於て退いて、神に祈し時の如き憂悶の極、血の汗を流せりと傳ふ。これにもましてや、さしき彼の心を痛ましめしは、

(七) 彼が他人煩累の原因たること多し。

てふ感なり。彼年長じて後、彼の父ヨセフが、嬰兒と其母とを挾へ、エジプトに往きて、其所にとどまりし苦心を思ひし時、彼の胸は、いかに感謝と苦痛とにおどりけむ。彼道を傳ふるに及んで、彼の迫害を受けしは、言ふ迄もなく、彼を信ずる者も亦、迫害を受けたり。祭司の長等、ラザロをも殺さんと謀る。而、ラザロの故に因りて、多くのユダヤ人、行きてイエスを信ずるが故なり。輪約

十^二章とあるにもしるし。况んや其使徒等をや。此迫害や彼自らの迫害にもまして、彼の心をいたましめけむ。彼囚へられたる時、イエズ復彼等に、誰を尋る乎と問ひ給ひしかば、彼等、ナザレのイエズなりといふ、イエズ答へけるは、我既に、爾曹に、我はそれ也といへり、若し我を尋ぬるならば、此輩を容して、去らしめよ。約翰^八章^{十八}と云へる、彼が其弟子の爲に憂ひたる苦衷を察すべし。かゝる多數の災厄と共に、彼の生涯を通して、彼は苦めしは、

(八) 人々の輕蔑なり。

心ある人々の爲に、身體の苦痛にもまして、苦しきは、恐くは、この苦痛なるべし。彼は、先づ、其生れの卑しきが爲に、いたく輕蔑せられし事、既に屢言へるが如し。彼囚へられて後、ヘロデの前にひかれし時、ヘロデ其士卒と共に、彼を藐視しめ、嘲弄して、華はしき服を衣せ、復ピラトに遣れり。路加^{廿三}章^{十一}、方伯(ピラト)の兵卒、イエスを携へ、公廳に至り、全營を其もとに集め、彼の衣を褫ぎて、絳色の袍を着せ、棘にて冕を編み、其首に冠らしめ、又葦を右手に持たせ、且つ其前に跪づき、嘲弄して曰ひけるは、ユダヤ人の王安かれ、又彼に唾し、其

葦をとりて其首を撃てり。馬太傳廿七章 斯くて、イエス、十字架に釘けられて後、往來の者、イエスを嘗り、首を揺りて曰ひけるは、殿を毀ちて、三日にこれを建つる者よ、自己を救へ、爾若し神の子ならば、十字架より下りよと。祭司の長、學者、長老等はいふも、更なり、同に十字架に釘けられたる盜賊も、同くイエスを嘗れり。馬太傳廿七章 身體の苦痛これに加ふるはなかるべく加ふるにこの輕蔑を以てす。忍んでこの輕侮を甘受したる人の如何に偉大なるよ。かくて、

(九) 十字架上の死

は來れり。

孟子嘗て論じて曰く、天の將に大任を是の人に降さんとするや、必ず先づ其心志を苦しめ、其筋骨を勞らし、其體膚を餓やし、其身を空乏にし、行其爲す所に拂亂す、心を動かし、性を忍にす、其能はざる所を會益する所以なりと。吾人は、孟子のこの言、これを基督の爲に言へるに非るかを疑ふ。しかも、これなほ基督其人困厄の様を名狀し盡すに足らず。彼は實に人として受く

十字架の死の意

べきあらゆる困厄に遭遇し、泰然自若これを甘受したり。しかも彼か態度の泰然自若たるは、罪なうして、罪に問はるゝ人の、我に罪なく、罪する者に罪あるを感じて、悲哀の底に、言しらぬ満足を感じずるが爲にはあらで、人類の罪はやがて我が罪我は多くの人の贖として、其生命を與へざる可らずと、大慈大悲の覺悟より出て來りしなり。例を以てこれを言はんか、其父酒に溺れ、其兄罪を犯し、其妹、其妹皆墮落せるが中に、獨り清く聖き心を保ちて、いとしらしさよ、あの姫百合は、ばらやいばらの中に咲くの感あらしむる一小女が、我に罪なし、我が親、我が同胞に罪ありといひて、獨り我身を潔うせず、家族の罪を其一身に負ひて、身を以て、これに當らんとするにたとへつべし。人類てよ、家族の罪を一身に負ひて、これに死したるは、基督其人なり。彼が死に先ちて、ゲッセマネの園に祈り、十字架上にありて、我が神、我が神、何ぞ我を捨て給ひしや、といひしもの、此間の消息を洩して餘りあるなり。斯の如くにして、彼はメシアなりてよ、彼の主張と彼の死とは、密に結合せられ、彼が十字架上の死は、深遠なる意義を有することゝなれり。彼死して後、彼の弟子

四方に離散せしも、彼隠れりてふ信仰に再び其元氣を恢復して、神國の擴張に盡力し、彼死するも、彼の神國はいよ／＼其大を致せしもの、一に此美しき死に山らずんば非ず。これを要するに、基督の如き困難に處したる人は、古來稀に基督のごと甘んじてこれを受けし人、亦古來稀なり。以下、彼が忍耐の結果に就いて論ずる所あらん。

(三)

「酸き涙を知らざるの人、何ぞよく甘き涙を知らんや」とは、シエロクスピア、ムペスト中の辭なりと覺ゆ。自ら困難に遭遇して、人生の關面を熟知し、人生の不幸に泣きたるの人に非ざれば、人の同情、人の親切の貴きを知らず。況んや他人の不幸を見て、これに同情を寄するをや。使徒パウロ嘗て曰く、「願美むべき哉神、即ち我儕の主イエスキリストの父、慈悲の父、總ての安慰を賜ふの神、神は、我儕が諸般の患難の中に、我等を慰め給ふ。之我儕をして、神の我儕を慰め給ふ安慰を以て、又諸の患難に居る者を慰むることを得しめん爲なり」哥林多後書三章四節と。これ豈酸き涙によりて、甘き涙を知り、人をして甘

幸なき人
の友たる人

基督の偉
大と忍耐

き涙の幸にあはしめんと欲するものに非ずや。基督にして彼の如く貧賤に生れ、彼の如く困厄に遭遇せずば、彼の如く貧しき人に同情し、重荷を負へる人に同情し、罪ある人、弱き人に同情し、これが爲めに宗教を立て、凡て勞れたる者、重きを負へる者は、我に來れ、我汝を息ません、とは言はざりしなるべし。世の不幸なる者、世の自暴自棄の徒が、聖書を讀みて、會心の文字にあひ、彼の教に行きて、言ひ知らぬ、温味を感じ、再び勇氣を恢復して、幸あるの人、希望に充てる人となり、基督の忍耐を學びて、泰然自若甘んじて、困難と戦ひつゝあるは、吾人の絶えず目撃する所、基督の性癖を以てして、彼の困難に鍛へられずば、彼の立てたる宗教は、人に慰藉を與へ、人に希望を與へて、温和春の如きなつかしき宗教には、あらで、人を威服する、秋霜烈日の宗教となり、了りしやも知るべからず。

彼の人物の偉大にして、其理想極めて高かりしは、言ふ迄もなし。されど、大困厄に際會して、人生の關面をうかゞふ毎に、其理想いよ／＼明らかになり、其人品いよ／＼高まり行きしを忘る可らず。彼の試惑以前にありては、彼

も亦俗界の人、屢現世に執着して、其理想に離れざるを得ざりき。其現世を捨て、たゞ理想の爲に死せんことを誓へるは、試惑の彼に與へし大訓練なり。死に先ちて、ゲツセマネの園に祈りし時、先づ吾が父よ、若しかなはゞ此苦を我より、離ち給へ馬太傳第三十九とて、神に訴へし人、忽ち變じて、献身の人、没我の人となりて、然も、我心のまゝを成さんとするに非ず、聖旨に任せ給へ三九と言へる、彼か煩悶の、彼に救ふるに、眞の没我、眞の謙讓を以てしたるに非ずや。困難汝を玉にす、古語我を欺かず。基督教徒、或は基督の神性を説くに急にして、基督は初より完全なり、初より玉なり、困難よく彼に加ふるに何物を以てせんやと主張すれど、斯の如きはよく困難を利用して、其品性を修養し、其人品を高めたる、彼か偉大を没了するもの、困難實に基督を玉成したり。若し基督の生涯より、其忍耐を除き去らば、吾人は何處にか彼が偉大を求めん。

彼か死の結果

彼が死の、彼か事業に如何なる關係を有するかは、既にこれを説けり。彼の死は、これを家族皆悪しくして、我獨り正しき處女が家族の罪を一身に負

ひ我が身を殺すことに山りて、新に幾多の人の靈魂を甦らしめんとしたる者、彼自ら、麥の種の譬もて示せるもの、よく此間の消息を洩らせり。己れ獨り死して、更に多くの實を結ばしめんとす。然り、彼の所期は空しからず、彼の死によりて、彼の事業はいよく堅く、彼を信じ、彼に行くの人は、いよく其數を増加したり。彼の死や、事實に於て、彼か愛の無限なるを證し、彼が没我的精神の大なるを示すもの、人を越えて、基督の有する偉大の勢力は、主として、美しき其死より來れり。彼は死に處する忍耐によりて、世に勝てり、又人に勝てり。大なる哉、彼の死や。

第八章 基督の友誼

(一)

吾人は、第四章以下、の四章に於て、基督其人に歸りて、彼が祈禱に由り、聖書に由りて、如何に其精神を修養せるか、又事あるに當り、事なきに於て、彼のとりたる態度如何を論ぜし、が本章以下、彼の人に對する態度を見んと欲す。

基督は神の子、神の子を以てして、人に對す、何ぞ人と人を平等に見て、其間に成立する友誼てふものあらんや、新約聖書は、友誼に關して、何等の儀表を與へずといふものあれど、果して然るか。若し基督に友人なしとすれば、バプテズマのヨハネと基督との關係は、如何にこれを解すべきか。彼自らこれを呼んで、其伴侶、其朋友、其兄弟、其僕、其勞作者、其子と言へる、彼が十二使徒と、彼との關係は、如何にこれを解すべきか。彼、マルタ、マリヤ、及びラザロの同胞を愛せりと傳ふれど、一、約翰傳十この家族と基督との關係は、如何にこれを解すべきか。又路加傳八章一—三には、マグダラ、ヨハンナ、スザンナ、此外多くの婦ありて、皆其所有を以て、イエスに供事へたる事を記せど、これ等の婦人と基督との關係は、如何にこれを解すべきか。吾人は、バプテズマのヨハネに於て、彼が兄事せる友を見、使徒其他の人々に於て、彼が弟妹視したる友を見る。基督に友なしといふが如きは、論ふに足らず、彼は其博愛主義もて、普ねく人を愛するの傍、其友として、特にこれに親み、又特にこれを愛したる小數の人を有したりしなり。吾人は、先づ、ヨハネと彼との關係、使徒と

彼との關係を究め、さて後、友は如何なるものぞ、友を得るには如何にすべき等、友誼に關する疑問に就きて、基督の與ふる儀表を見んと欲す。

(二)

バプテズマのヨハネは、ユダヤの野に近く生れし人、基督より長すること六ヶ月、父母共に祭司の裔にして、養ひし人なりきと傳ふ。彼は、己が心、一つを友として、これと相語らんが爲に、夙に野に入りて、陰者の生活を營み、身に駱駝の毛衣を着、腰に皮の帯を束ね、蝗蟲と野蜜とを食物とし、馬太傳三、かのエツセネ派の人々の風を學び、又かの昔の預言者、エリヤの峻嚴を慕へるに似たり。彼の名の漸く、パレスチナに聽ゆるや、弟子の野に出て、彼の四邊に集り、其爲す所、其説く所を學べるもの極めて多かりき。其宣言したる王國の峻嚴にして、基督の王國の福ばしき音を傳へしには、似るべくもあらぬこと、既に第三章に論じたるが如し。彼の名愈高く、彼に集まる者愈多きに及びて、人の彼をエリヤの再生となし、彼の自ら任せざるにも係らず、メシアとさへ爲す者あるに至れり。イエスのヨハネに、來りしは、まさにこの時、イ

基督の友に兄弟

エスも亦他の人々の如く、ヨハネのバプテスマを受けたり。其思想を以て兩者を較べんか、ルナンの言へる如く、ヨハネは確かに兄たるべし。しかも以て父たるに足らず、兩者の理想相契合するもの多く、且つ同じ流に棹せば、相互助けて斯道の爲に盡さんと誓ひし事疑なし。ヨハネは、實に喜んで基督を迎へ、基督は、我が先輩として、これに兄事したるに似たり。約翰傳第一章卅九に由れば、アンデレ、ペテロ、ピリポ、タナエル、バルトロム、等重なる弟子の基督に従ひしはこの時、彼等は、其初めヨハネの弟子たりしといふ。所謂十二使徒は、總て、一度ヨハネの弟子たりし人々なるやも知るべからず。かゝる事實に徴するも、當時の基督が、ヨハネ保護の下に立ちて、徐に其羽翼を張りつゝありし事疑ふべくもあらず。

ヨハネが、メシアを以て自ら居らず、聖靈と火を以てバプテスマを施し、手には、箕を以て、其禾場を潔め、麥は歛めて其蔵にいれ、穀は滅えざる火にて焼く路加傳三章十八べきメシアの來るを期待し、我は其履帯を解くにも足らず同六といひしが、こは果して馬太傳及び約翰傳の著者がいふ如く、基督其人を

ヨハネは
如何に
かみ
し

指したるか、吾人は、こゝに疑なき能はざるなり。これより先、約翰は、他の預言者のごと、嚴に國君の行爲を監視して、其惡を責め、毫も假借する所なかりしが、爲めに、分封の尺、ヘロデ、アンテパスの怒をかひて、死海の東岸マケラスの山寨に囚へられたり。されど、ヘロデの心には、なほ良心の炳焉たるものあり、俄に彼を殺さざるのみかは、彼を以て、義しく且つ善き人と知りて、彼を敬ひ、彼を保護り、彼に聞きて、多くのことを行ひ、且つ喜びて彼に聽くことをせり。馬可傳六章二十從つて、彼の弟子等、自由に獄裡の彼と往來して、世の消息は、彼の耳に通ひ、基督が天國を宣言してガリラヤに活動しつゝあることをも知りたるに似たり。ヨハネは、嘗て喜んでイエスを迎へ、道を同じうするの友として、これを尊敬せるの人、己中道に蹉きて、獄裡にイエスの成功を聞く、其感懷果して如何なりけむ。茲に於てか、彼二人の弟子を基督に送り、これをして基督に問はしめて曰く、來るべき者は、爾なるか、また我等他に待べき乎路加傳七章十九と。吾人は、この記事に由りて、ヨハネが初よりイエスを待つに、メシアを以てせざりし事を知る。しかも、彼の基督を尊び、基督を信じ、彼

を以て人の子の最も偉大なるものとするに非れば如何でか彼のメシアなるを疑ひ使を發してこれを問はしむることをせんや。ヨハネは蓋し基督が知己中の知己たりしなり。彼の使は歸りて基督の言を傳へ彼をして其宣言せる天國の事實に於て實現せられつゝあるを確信し微笑を其頬に湛へて瞑目するを得せしめしか將たこの使の未だ彼に達せざるに彼は既に身首處を異にしてマケラス塞裡に横りしか史のこれを傳ふるものなきを憾むなり。たゞヨハネの殺さるゝや弟子等來りて屍を取り之を葬り往てイエスに告ぐ。馬太傳十二ヨハネの其生前に使を基督に送りし事はヨハネの弟子を驅りてイエスの下に赴かしめし事疑なくヨハネの徒と基督の徒とは遂に結合するに至りしもの如し。

この事ありてより後基督はヨハネに對して特殊の尊敬を拂ひ彼に就いて語りてわれ爾曹に告げんこれ豫言者よりも卓越れたる者なりそれ爾に先ちて道を備ふる我が使者を爾の前に遣らんと録されたるは即ちこれなり我爾曹に告げん婦の生める者の内未だバプテズマのヨハネより大なる

ヨハネに對する基督の態度

豫言者はなし路加傳七章廿八といへり。基督又曰く然ど天國の最も小さき者も彼よりは大なるなりバプテズマのヨハネの時より今に至る迄人々勵みて天國を取らんとす勵みたる者はこれを取れりそれ總ての豫言者と律法の預言したるはヨハネの時迄なればなり若し爾曹我言を承ることを好まば來るべきエリアはこれなり馬太傳十一と。斯の如きは基督を以てメシアとしヨハネを以てメシアの來るに先ちて廻り來るべきエリアなりとし以て時人のメシアに關する信仰に合せんとするものヨハネを以て舊約より新約に入る可き橋梁と見るなり。馬太傳約翰傳等の記者がヨハネ豫め基督のメシアなるを知れりと説くは基督のこの見解より附會せるもの吾人はこれを信する能はず。これを要するにヨハネは初めより基督を解して其偉大を觀破せるの人基督はヨハネの偉大を解し其始めたる事業を完成して愈ヨハネの大を成せり。異なる運命を荷へる二個の偉人が双心相照して同じ道の爲めに盡せしもの見來れば千古の壯觀たらずんば非ず。唯惜む載籍極めて乏しうして兩者の關係を詳知する能はざるを。

かの律法は猶太人の間に發達して、單に其行爲の形式を律せしが、基督出づるに及んで、これを完成し、これに精神的の意義を附與したるが如く、メシアの觀念も、理想的の人格として、猶太人の間に發達し、猶太民族を塗炭の苦より救ふべき人て、政治的の意義を有したりしが、基督によりて純化せられて、精神的の意義を得たり。ヨハネの教へしメシアは、猶太民族のそれと基督の教へしそれとの中間に立つべきものなり。茲に於てか、説をなすものあり、曰く、馬太傳及び約翰傳に記すが如く、ヨハネは初めより基督をメシアとなし、が、マケラスの山寨にありて、基督の爲す所を聞けば、其爲す所我が期待したるメシアの事業と相合せざるものあるを以て、これを怪しみ、即ち路加傳に記さるゝが如く、使を發して、これを質せるなりと。或は然らん。されど、ヨハネの所謂メシアと基督の所謂メシアとの間に、この種偉大なる相違ありや、吾人はこれを疑ふものなり。

(三)

基督の初めて道を山高く水清きカペナウムに説くや、よくこの地の山水

と調和して、活潑、正直にして、樂しく、やさしき、人々の一羣彼の四周に集り來りて、信仰を中心とする家族を作りしが、彼は其首長として、ナザレに於ける血縁的家族の中に於いて、よりも、更に樂しき月日を送れり。彼が十二使徒を選定せるは、實にこの信仰的家族の中よりせり。十二使徒とは、ヨナの子、ペテロ及びアンデレ、セベダイの子、ヤコブ及びヨハネ、ピリポ、バルトロマイ、マタイ、トキマス、ダツダイ、カナンのシモン、アルパヨの子、ヤコブ及びユダ、これなり。ペテロは既婚の人にして、既に子あり、其義母彼と共に住へり。マタイの基督に於けるは、なほクセノフネスのソクラテスに於けるが如し、彼の言行録を物して、詳にこれを傳へたり、第一福音書これなり。第四福音書の著者は、これをソクラテスのプラトーンに比すべきか。よく基督の意義を汲みて、更にこれを發展せしめたり。この十二人中、獨りユダのみは、ユダヤの住人なりしが、他の十一人は、ガリラヤ人なるに似たり。マタイは、税吏少くとも、ペテロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネは、漁夫なりき。アンデレ、ペテロ、ピリポ、バルトロマイ等は、バプテズマのヨハネの弟子たりし事、既に言へるが

親子疎き弟

如く、カナンカナンのシモンシモンは、政治的に猶太の獨立を謀りたるユダの徒なりしもの如し。

十二使徒の間にも、自ら親疎の別あり。基督が呼んで雷の子といへるセペダイセペダイの二子、ヤコブ及ビヨハネヨハネは、猛烈なる熱血男子にして、基督特にこれこれを愛せり。就中ヨハネ特に、基督に親まれき。基督が死に臨んで、其母を彼に托せりてふ傳説あるは、これが爲めなり。ペテロは、直情にして親切なる血性男子、率直に其疑惑、其偏見、其弱點を師の前に示して、毫も恥づる色なし。基督またこれを愛し、これに天國の輪を與へしと傳ふ。馬太傳十六ペテロ、ヤコブ及ビヨハネの三人が、基督と特殊の親交を有したる事は、福音書の諸處に散見す。これ等特殊の關係が、他の弟子の猜疑心を挑發したること疑なく、ユダが其師を賣せしが如きも、一は猜疑心の結果なるべし。約翰傳十二章馬太傳十六章五等の記事に由れば、彼は、使徒中の勘定方にして、常に其金を私し、銀三十枚五約十を得んが爲に、基督を賣したりといふ。利慾の爲に、其師を賣すとすれば、三十銀はあまりに小なり。況んや、基督の死罪に

弟子は皆身分卑しき者

決するや、いたく其罪を悔ひ、縊れて死せりと傳ふるをや。八約傳十彼は、利慾以外何物をも解せざるの人に非ず、しかも、其大罪を取てせるもの、利慾以外更に大なる動機なかるべからず。彼が基督のメシアなるを信じて、しかもメシアの眞義を解せず、基督の爲す所我が期待したるメシアのそれにかなはざりしもの、蓋し重なる動機なるべく、猜疑心も亦これを助けて、この大罪を取てせること疑なし。

十二使徒は、彼か天國の未來の爲めに、彼が弟子中より、其俊秀を抜きし者なる事、既に屢これを言へり。しかも、彼等の多數は、皆身分の卑しき者、必ずしも、基督を解せず、必ずしも、心美しからず、又、必ずしも、人品偉大ならず、たゞ其信仰の活潑なるが故に、選ばれて、其大任に當りしのみ。基督が身を以てこれを感化し、これを導き、これを教へ、遂に天國の福音を傳ふるに至らしめたる苦心、いかに大なりけむ。いてや、項を追ひて、基督が其弟子に對する友誼の儀表を究めん。

(四)

友とは、我を愛すること、最も切なる人か、はた我を益すること、最も大なる人か。其人いかに卑しく、其人如何に言ふに足らざるも、心の誠を捧げて我を愛し、我が爲に憂ひ、我が爲に悲まば、この人實にいとしく、この人の愛に由りて、言ひ知らぬ慰藉を得るは、吾人の常に感ずる所なり。又思慮深き人にして、よく我が爲に慮り、我を苦痛の淵より救ひ、我が爲に地位を求め、活動の場所を與へて、我が力を振はしむる人あらば、我はこの人に頼り、この人を愛し、之を呼んで、我が善き友といふに躊躇せざるべし。されど、單に我を愛するの人、單に我を益するの人、これ果して我が友なるか。試に、單に其人と對坐して、我心爲めに豊かなるが如き友を以て、これを前の兩者に較べれば、其差果して如何ぞや。友の友たるは、相信するの心、相信するの心と結ぶなり。世は舉りて彼を難するも、我は之を難する能はず、世は舉りて我を疑ふも、彼は之を疑ふ能はず。樂はこれを分ちて二倍ならしめ、苦痛はこれを分ちて半ならしむ。双心既に相結ぶ、何物かよくこれを隔つるを得んや。この種心の友を有するの人は、幸なり、廣く廣くして、はてもしられぬ荒野の

中に其途を失ひし時、心の友は、來りて彼を慰むべければなり、陸遠き海路に舵をたえて、浪のまに／＼流浪する時、心の友は、來りて彼を勵すべければなり、世を舉りて彼に敵する時、獨りこの友のみは、來りて彼を守るべければなり。吾人は重ねていふ、心の友を有するの人は、幸なり、かくの如くにして不幸の底に沈淪するも、阻喪せず、自暴自棄せざるを得べければなり。偉人の傳記を読み、若くは、其人となりを學びて、これを敬慕する者は、必ず其人を得て、これを我か友とせんと欲す。プラトンを慕ふもの、誰か彼と共に其の花園を散歩し、耳を其説に傾けんと欲りせざるべき。ルイテルを思ふもの、誰かは彼の食卓に就き、基督を愛するもの、誰かは其伴侶に入るを欲せざるべき。茲を以て、吾人は、イエスの足下に坐りて、其道を聴きたるマリア路加傳三章九三十一イエスの懷によりてありしヨハネ約三章三十三の多幸なるをうらやまざるを得ず。基督の如き偉人を友とし、これと肝膽相照せる使徒彼の感化を受けしこと、果して幾何ぞ、基督の死後使徒等が戀々として、終生基督の再來を期待したりしもの、誠に故なきに非るなり。

双心既に相結ぶ愛は實にそれが必然の結果なり。單に同じ村に生れ、同じ學校に學び、同じ級に屬したるが故に、これを稱して友といふものあらば、何人か其愚を笑はざらんや。見よ、昨日軒を並べて、相談せるの人、今日相別れて後、明日忽ち相忘るゝを。たゞ心を以て心に換へ、心心と相結ぶものは、彼我相去る數千里、雲井遙かに相思ふ時、相思ふこといよ／＼切に、相愛することいよ／＼大なり。人或はいふ、心を以て心に換へ、双心相信じ、相結ぶ、二人相友たるを得べし、二人以上の友あるを得ず、若しそれ、我に二人以上の友ありと稱する人あらば、これ未だ眞の友を有せざるの證なりと。眞の友誼をもて相許す人々に、この種獨占の情ありて、我獨り我が友の愛をほしいまゝにせんとするは、吾人の常に目撃する所、相愛し、相信するの極は、まさにかくあるべし。されど、相思の度を異にする多數の人ありて、同時にこれが友たらんは、必ずしも難からず、基督の儀表、吾人に示すに其實例を以てす。

双心既に相結ぶ友の幸福を謀るは、實にそれが必然の結果なり。戀愛は、もと人性の必然に發する者、こゝに於てか、兩性相愛すべしと説くもの、我は未

だこれを聽かず。唯戀愛に加ふべき制限を教へ、人間自然の情を制裁して、美しくこれを發現せしめんと欲す。友誼亦然り、人性の自然に發して、双心相結ぶ者、双心相結べば、我にもまして、彼に幸あれ、假令我が悲の重く、共彼が憂の輕かれよと、希ふを常とす。朋友相愛し、朋友相助くるの義務を説くが如きは、なほ男女相愛せよと教ふるに似たり。寧ろ滑稽に屬せずや。吾人は、朋友相助くるの情を制裁して、友誼に厚きの極、家族に對し、國家に對し、隣人に對するの義務を缺かざらんとを教ふるの、寧ろ人情に近きを思ふ。朋友の義務を説きて、友誼を強行せんとするの世は、澆季なるかな。吾人は、大聲疾呼してこの澆季の世を呪はんと欲す。さる美術家の素朴なる青年も、て友誼の標號としたるを見しが、其衣には、しにもいさもと書かれたり。生死を以て心をかへずとの義なり。其額には、夏も冬もとあり。盛衰もて交を二にせじとなり。左の肩をぬぎて、そこに、遠くとも近くともと書かれ、右手の指これをさせり。時を隔て、處をかゆるも、相忘れじとなるべし。基督が其友に對するや、實にこの種の友誼を以てせりき。ラザロを甦らしめたる

秘密をあふ

る奇跡約翰傳十一の如き、これを荒唐不稽の傳説と爲さず、仔細にこれを読み、
 基督が態度を分析し來れば、この種美しき友情の油畫を其眼前に思ひ浮べ
 んこと、いと容易なるべし。
 双心既に相結ぶ相互に其心の底を語りて、毫も包むなさは、それが必然の結
 果なり。我我が友と對して坐す、彼語らず、我言はず、しかも、我が心彼の心と
 相通じて快極りなし。たゞ機一たび熟して、談話の端緒こゝに開くれば、萬
 想口を突いて出て、禁ぜんとして、禁ずる能はざるなり。基督が、其弟子を伴
 ひて湖上に出て、人なきに至り、遂には、其周圍に群り來る人々を避けて、獨り
 其弟子を伴ひ、サイロ、ピニシヤに旅せしもの、其弟子に感ぜしむるに、この種
 の友情、この種心の交通の樂を以てせんと欲りせしに由る。基督の友誼は、
 たゞにこれに止らざりき。祈禱は、人にありて、最も秘密なるものなる事、既
 に言へるが如くなるが、基督は、これにすら、屢其弟子を伴へり。變貌の時、ゲ
 ツセマネの祈禱の時、ペテロ、ヤコブ、ヨハネの三人、基督に伴ひし即ちこれな
 り。弟子をして、其秘事に與らしむる斯の如し。其弟子を信じ、弟子を愛し、

友は第二の良心

これに向つて何等包む所なきの證に非ずや。
 これを要するに、基督の如く、高く美しき友誼を解したるの人、古來極めて
 稀なり。神に友なしてふ詭辯の如きは、例の基督を高めんとして、却りてこ
 れを下すものなり。

(五)

「朱に交れば紅くなる」とは、友の品性を移すをいふなり。高き友、善き友、美
 しき友に交りて、我も高き人、善き人、美しき人となるは、何人も知る。所基督が、
 税吏漁夫より十二使徒を作れる、友の人を移すの偉大なるを證して、遺憾な
 きものに非ずや。双心相信じ、相愛し、相結びて、こゝに友あり、友の思ひ所は、
 我これを避けんと欲し、友の喜ぶ所は、我これを得んと欲す。友をして我を
 忌ましむるは、滿天下をして我を忌ましむるより悲しく、友の賞讃を聽かん
 は、滿天下の喝采よりしも樂し。茲に於てか、吾人は、友の判断に由りて、我が
 行爲を評價し、由りて以て、我が行爲を決せんと欲す。友は、第二の良心なり
 といふもの、誠にいはれなきに非ず。其良心、正しきに勇む人は、正しき人な

の友を作る

るがごと、其友正しきを好めば、そはその人を刺激して、正しきを行はしめ、其良心、惡を欲りするの人の、惡人なるが如く、其友惡しきを希へば、そはその人を刺激して、罪惡を敢てせしむ。友の人性を移すは、これにこれ由るなり。

友は、我が第二の良心なると共に、我は又友が第二の良心たるを忘る可らず。彼に於ては、滿天下の賞讃は、我が賞讃に如かず。滿天下の嫌惡は、我が嫌惡に及ばず。彼故に我が判斷に由りて、彼の行爲を評價し、由りて以て、彼の行爲を決せんと欲す。友はなほ我が鏡の如きか、我が惡もこれに映り、我が善も亦これに映る。世の友を論ずる者、未だよくこの間の消息に通ぜず、唯友を選ぶの必要を説きていふ、善き友を選ばざれば、我が善を濟するに由なしと。友を選ぶの必要なるは、いふ造もなし。されど、我が品性を高め、我が人品を美しうして、友の爲に善き美しき良心となり、善き友美しき友を作る道を知らざれば、善き友美しき友も、やがて變じて惡しき友醜き友たらんとす。こゝを以て、吾人は、百尺竿頭更に一步を進めて、友を作るの必要を説かんと欲す。基督が其使徒を感化して、よく其善美を濟さしめしもの、友の

作り得可きを證明して餘ありといふべし。友を作るの道他なし、我が品性を高むるにあり。我が品性を高むるの道他なし、善盡し美盡せる儀表を求めて、其足跡を追ひ、若くは、高く尙き理想を求めて、これを實現するにあり。斯の如くにして、友我を作り、我友を作ると共に、儀表我を作り、儀表友を作りて、止む時なく、ひたすら向上の一路を辿らば、我と友と共に儀表に向ひ、理想に向つて、其歩を進め、善く美しき品性を作り得べきこと疑なし。

第九章 基督の社交

(一)

社交と友

社會は廣く、人は多し、我友、我知己たるの人、必しも無きに非るべし。しかも機會の我をして彼を知り、彼をして我を知らしむるもの、無くんば、我等は、遂に友たらずして止まんとす。友あるは人生無上の幸福なり、しかも、友なうして生涯を終るの人、必ずしも無きを保せず。たゞ人の社會に生るゝや、やがて隣人あり、やがて他人あり、吾人は、必ずこれに接し、必ずこれと交るを

要す。吾人のこれを好むと好まざるとは與らず。友誼を以て、人性の自然に發する任意的のものとするれば、社交は社會の組織に基く必然的のものなり。社交は、これを友誼に較べて、其範圍頗る廣し、從つて友誼のごとく深く且つ切なるものに非るなり。世人は、通例、學友の如き、級友の如き、同郷人の如き、同年輩の友の如きを呼んで友といへど、吾人は、これを隣人若くは他人といひて、前章の友と分たんと欲す。こゝに所謂社交は、これ等の人々に接するの道をも兼ねるなり。

ヨハネと基督の遊

バプテズマのヨハネを以て、基督に較れば、この點に於て、兩者の相違頗る顯著なるを見る。ヨハネは、友を有したり、又其弟子をも缺かざりき。されど、彼は、努めて社交を避け、人里遠き荒野に於て、其生涯の大部分を送れり。其衣は、家居に適せず、其食は、之を市街に求む可からず、荒野にありて、得るところのものを着、得るところのものを食へり。基督は、人を避けず、人の中にありて行動せり。ヨハネの如く、人の來るを待たず、彼自ら人に行きて、これを教へ、これを導けり。村可なり、町可なり、市街可なり、會堂可なり、苟も人の

國善主義と救世主義

集る町には、彼も亦行きて、人と語れり。泣く者、笑ふ者、富める者、貧しき者、皆これを訪ひて、隔壁を設けず。祝節には、必ず出席して、衆と共にこれを祝しぬ。税吏マタイ、彼の爲に饗宴を張れば、彼は喜んでこれに連り、税吏と共に食ふを辭せず。馬可傳二章十三節、路加傳十章七節、四福音書一四章一節 彼はこれと卓をならべ、人の彼を呼んで、食を嗜み、酒を好む人馬可傳十一節、路加傳十一節といふ迄に、毫も遠慮することなく、飲食せり。若し、夫れ、ヨハネを以て、伯夷に比すべくんば、基督は、柳下惠か、兩者態度の相違、霄壤もたゞならずるなり。

社交には、動もすれば、肉體的快樂の伴ふあり、多くの人多くの家庭は、これが爲に墮落したり。信仰未だ厚からざるの人、社交場裡に立ちて、肉慾の誘惑にあひ、其信仰を捨てたるためし、少しとせず。ヨハネは、専ら社交のこの弊害に着目し、純潔なる信仰を保たんが爲には、寧ろ人と絶てよと教へたり。基督の爲す所は、これに反し、社交場裡に立ちて、あらゆる機會を利用して、いよいよ廣く其道を傳へんと欲す。前者を獨を潔うする、獨善主義なりとすれ

偉人耶蘇 一三四

ば、後者は實に世を擧げてこれを化せんとする救世主義なり。我が力なほ微弱にして、人生の惡感化を遠かるに非れば、其信仰を全うする能はざらば、世を避けて、獨を善くするも亦可なり。若し、夫れ信仰既に固く、これを以て人を感化し、世を動かすに足るの人、徒に退いて、苦行を事とし、獨善を事とせば、社會の進歩は、これを何處に求めん。基督が神を我が心の中に見ると共に、亦人をして、神を其心の中に見しめ、自ら天國を實現すると共に、人をして其天國に入らしめんと努めしもの、故なしとせんや。獨善主義は、眞の偉人の事に非ず。

(二)

匹夫匹婦の徒に生れ、徒に死するに反し、明らかに人生の意義を意識し、人生に於ける自己の使命を意識して、この使命を果さんが爲に、其心身を捧ぐるは、實に偉人の特色なり。基督は實にこの種の偉人にして、一言一行もいやしくもせず、其使命を果さんが爲に、言ひ、其使命を果さんが爲に行へり。茲を以て、彼の使命を觀過しては、彼の行動遂に解す可らず。使命とは何ぞ、

神國の實現これなり。神國とは何ぞ、神を父とし、人を子とし、人神を愛し、人を愛して、愛の支配する國これなり。基督の社交に於ける亦この使命を實現するの手段に外ならず。この愛を進むるに益あらば、祝節可なり、饗宴可なり、彼は何處にも行きて、敢てこれを辭せざりき。諺に曰く、知るは、愛するの初なりと。よく其物を知れば、心なき草もいとしく、心なき山水にも心ひかる。况んや人をや。遠く其人を望みて、彼氣にくはぬ男なり、彼生意氣な男なりなど忌はしく感ぜられし人の、相知り、相解するに及べば、意氣相投ずるのため、また少からず。人を知るは、人を愛するの初なり。社交は、吾人に與ふるに、人を知るの機會を以てし、人を知るは、人を愛するの初、基督が社交を忽にせざる第一の理由はこれなり。路加傳第七章^{卅六}—^{五十}に由れば、基督嘗てパリサイの人に請かれて、食に就けりし時、惡行を爲せる女、來りてイエスの後に立ち、足下に哭き、涙にて其足を濡し、首の髪をもて之を拭ひ、且其の足に口を接け、又香膏を之に抹れり、パリサイの人心の中にこれを難じければ、基督は、我爾の家に入るに、爾は我が足に水を給す、此婦は涙にて我が

足を濡し、首の髪をもて拭へり、爾は我に口を接けず、此婦は我こゝに入りし時より、我足に口を接けて已まず、爾は我が首に膏を抹らず、此婦は、我足に香膏を抹れり、是故に我爾に言はん、此の婦の多の罪は赦されたり、之れに因りて其愛も亦多かりといへり。見るべし、基督の客を待ちて、敬意と愛とに缺くる所あるパリサイ人を難じて、至らざるなきを。彼の客を待つに愛と敬とを重んずる知るべきなり。基督がシモンシモンの家に住ひし時、喜んでマリヤの膏をぬるを受けしが如き、亦此意に外ならず。又路加傳第十四章に、爾午餐或は晚餐を設くる時、朋友兄弟親戚また富る隣の人を請く勿れ、恐くは、彼等又爾を請きて、其報答をせん、爾を爲さば、貧乏、痲疾、跛者、替者などを請け云々七十四とあり。彼の饗宴に、華麗を禁ずるの意推知すべし。華麗の悪しきに非ず、華麗の弊は流れて、敬と愛とを失ふに至らんを悲めばなり。彼の社交を重んずるには、更に大なる理由あり。これを利用して天國の福音を傳ふべき機会を作らんとすることこれなり。従つて、彼の教説の根本義を傳へて、趣味津津たる彼の辭の、食事に際して發せられたるもの少し

とせず。康強なる者は、醫者の助を需めず、唯病ある者これに需む、我が來るは、義しき人を召く爲に非ず、罪ある人を召きて、悔ひ改めさせんが爲なり加路七五章三十二といふが如き、これなり。

山來會食は、人に向つて墮落の機會を與ふるもの、今の書生の身を誤るもの、多くは端を會食に發す。下宿の冷かなる待遇に嫌焉たらぬもの、寄宿の單調子なる生活に厭きたる書生の、先づ馳せ行くは、菓子屋なり。菓子屋また面白からざるに及んで、蕎麥屋に行き、牛肉屋に行き、はては酒の味さへも覺えて、遂には、花柳の巷にも出入するに至る。書生墮落の端緒は、會食なり。職工然り、紳士紳商亦然り。會食を濫用するの弊、如何に大ならずや。基督は、人の濫用するこの會食を利用して、人と人との愛をすいめ、又天國の福音を傳へたり。これ豈機會はこれを善用することによりて、人を益し、これを悪用することによりて、人を害するの證に非ずや。心ある父兄の中には、廣く我が家の門戸を開きて、徳高き人、經驗に富める人、又は智識の豊富なる人を迎へ、其子弟をして、彼等の高風を仰がしめ、由りて以て、其子弟薰陶の助と

爲さんと欲りするものあり。其子弟を益する何物かよくこれに如かんや。使徒パウロ嘗て教へて曰く、遠き人を接待す事を忘るゝ勿れ、或人かく行したれば知らずして、天使を接待せり希伯來書二章。廣く其家を開きて隣人を歓迎するは實に基督教徒の美風なり。

生命のメ

こゝに附言すべきは、基督が己を、饗應を設けて、客を招き、これに生命のパンを與ふべき主人と見、凡て、食ふ者をして、死ざらしむる者は、天より降れるパンなり、我は、天より降りし生けるパンなり、若し人此パンを食はば、窮りなく生くべし、我が與ふるパンは我が肉なり、世の生命の爲に、我これを與へん、約翰傳六章廿二章。如何に美しき譬喩ならずや。地より成れるパンを與ふる人は多し。天より降れるパンを與ふる者は少し。死のパンを與ふるものは多し、生命のパンを與ふるものは少し。吾人は、この譬喩を讀みて、いひ知らぬ感想の、我が胸中に湧くものあるを覺ゆるなり。

靈魂の價

第十章 基督の博愛

(一)

基督は、我が心に神を見ると共に、あらゆる人々の心に神を見、我を以て神の所造、神の模像也とすると共に、あらゆる人々を神の所造、神の模像なりとし、神は彼の父なると共に、あらゆる人々の父、彼は神の家庭に於ける長兄にして、あらゆる人々は神の家庭に於ける子なりと見て、この思想の上に、彼の教を立てたる事、第三章に略論せるが如し。茲を以て神の前には何人も平等なり、税吏罪人と雖も、其靈は重く、義しからざる人と雖も、其靈は貴し。パリサイの徒が、税吏を賤みて、これと齒するを潔しとせざるに反し、基督は、税吏マタイを召して、これを使徒の列に加へ、馬太傳九章。税吏長ザアカイの家にやどり、路加傳十九。又屢税吏と共に食へり。パリサイの人及び學者、姦淫を爲せる時執へられし女を曳き來り、石もて撃殺せんと言へば、基督は立ちて、爾曹の内罪なき者、先づ彼を石にて撃つべしといへり。約翰傳八章。學者

等嬰兒に鑑ありや否やを疑へば、基督は寧ろ嬰兒を祝して、其靈の貴きをた
 たへたり。路加傳第十八章 嬰兒、税吏より罪人にして、既に斯の如し、職業の
 差別、地位の高下、貧富貴賤の如き人の外面的關係の如何てか、其人靈魂の價
 値を増減するに足らんや。これ等外面的關係に由りて、靈魂の價值を増減
 せんとするは、例へば、金剛石の他の石に包まれて地下にあるか、既に掘られ
 て存するか、將た指輪となりて、人の手を飾りつゝあるかに應じて、金剛石の
 價值を分たんとするが如し。恐も亦甚しからずや。靈魂は、それ自身價あ
 るもの、神の前には何人も平等なり。

博愛の根
本精神

父母は子の爲に愛ふ。親に事へて孝なる所以の道は、兄弟相愛するに如
 くはなし。こゝを以て、神の父たる事、人の子たる事、靈魂それ自身貴きこと
 より、四海同胞てふ思想導かる。家庭に於て同胞相愛するがごとく、博く衆を
 愛せよとなり。父母は子の爲に愛ふ、値あると値なきとは與らず。父母は
 子の爲に愛ふ、善きと悪しきとは與らず。否、値なき子、悪しき子、失はれたる
 子こそ、父母の爲に愛へ、父母の爲に泣き、其寢食をも安んぜる者、神の人に於

ける、亦然らざらんや。茲を以て、よく父なる神の心を汲みて、我が隣人に對
 するの人は、悪しき人、値なき人、失はれたる人を見る毎に、基督が我等の長兄
 として自ら義くして人間の罪を負ひ、自ら罪なうして、人の罪を泣き、人の罪
 を救はんが爲に、其生命をも捨てたるがごとく、いよ／＼これに注意し、いよ
 よこれを保護し、善に由りて惡に勝ち、愛によりて暴を制せざるべからず。

其仇を愛し、爾曹を憎む者を善くし、詛ふ者を祝し、虐遇する者の爲に祈禱せ
 よ、人爾の頬の右方を撃たば、亦左方の頬を向けよ、爾の外服を奪らば、裏衣を
 も禁まされ、凡て爾に求めば、これに與へ、爾の物を奪らば、それをまた索むる
 勿れ、己人に施られんとする事は、また人にも其如く施よ。路加傳第六章とある、
 又路加傳第十五章に記されたる失はれたる羊、失はれたる金、流浪する子の
 譬などを見れば、基督の教ふる博愛の根本精神が、那邊に存するかを知るに足
 るべし。

博愛は、靈魂其物を貴しとすることの必然的結論なり。然るを、今日の基
 督教徒動もすれば、博愛を、狹義に解して、病ある者、親なき子、さては、日々、バ

博愛の根

ンを、缺く輩を、いたはりて、これを保護し、若くは、人の境遇を進めて、普ねく、人生の快樂を享有せしめんとする事となすものあり。吾人の肉體は、靈魂の宮にして、肉體を離れて靈魂なく、靈魂を離れて肉體なし。靈と肉とは有機的必然的に結合し、相助け、相待ちて、兩者始めて全きものなり。茲を以つて、熱心なる基督教徒の動もすれば、陥るがごとく、肉體を偏輕して、靈魂を偏重し、獨り靈魂の爲に謀りて、肉體を顧ざるが如きは、吾人の左祖し難き所なれども、博愛を肉體的に解釋する今の基督教徒の態度も亦、吾人の斷じて一致し得ざる所なりとす。博愛の意義、若し人の境遇を善くするに止らば、基督はこれを蛇蝎視したるやも知る可らず。博愛の根本思想は、靈魂其物を貴しとするにあるなり。

昔者、希臘人および羅馬人は、夙に個人の價値を認め、國家の盛衰の個人に負ふところ大なるを知り、個人の活動、個人の發展を無限に運ばんと努めしも、彼等は、ソクラテスのごとく、シセロの如き偉人の價値を知りて、未だ凡夫婦の貴さを知らず、政治にたづさはる公民の價値を知りて、未だ奴隸の價値

人格の觀
念と基督

を知らず、希臘人羅馬人の價値を知りて、未だ他國人の價値を知らず、地位境遇を以て人を區別し、未だ人其物に價値あるを知らざりき。猶太人の間には、神の前には、何人も平等なりて、思想、夙に發達せしも、しかも、これを希伯來人に限りて、異教徒に及ばず、希伯來人は、神の特に選みたる國民なりと主張したり。この種の思想に反對して、基督の靈魂其物、人其物に價値あるを説きしは、既に略論せるが如し。基督は、實に歴史ありて、後始めて人其物の價値を教へし偉人なり。基督死して後、使徒ペテロ、ヤコブ一派の人々は、基督は、選ばれたる國民の救世主也、基督教に入らん者は、先づ割禮を行ひて、猶太人たるを要すと、教へしが、異邦人の使徒と呼ばる、パウロは、この國民的限界を打破して、基督の世界の救世主なるを教へ、我等の救主なる神の慈と人を愛し給ふ愛の顯れし時、かれ我儕の行ひし所の義しき功に由らず、唯其の矜恤に循ひ、重生の洗と、聖靈に由りて新にする事とを以て、我儕を救へり、聖靈は即ち、神我儕をして、其恩に由り、義とせられ、嗣子たるを得て、窮なき生命を待み、待たしめん爲に、我儕の救主イエスキリストに由りて、豊に我儕の

上に注ぎ給へる所のものなり、提多書第三章とて、再び人其物、靈魂其物の貴きこと、換言すれば、神の前には、何人も平等なりて、よき基督の思想を發揮したり。後教會の基礎漸く固きに及び、教會は、其正統的教義として、信者一般の信仰を維くべき具體的の信仰箇條を求め、其確定して後、教會の力を用ひしは、この教義を合理的に説明せんとするなりき。信仰箇條の確定が、教會の基礎を固うするに必要なるや、言ふ迄もなし、しかも其一度確定するや、これを以て人心を束縛して、各個人の宗教的實驗を無視し、教權に従ふものと、教權に従はざる者、教會の命ずる禮拜及び喜捨を行ふ者と行はざる者とに由りて、人を區別し、信仰其物よりは、寧ろ外面的行爲を重視するの奇觀を呈するに至れり。ルーテルの宗教改革は、教會より宗教を清めしもの、外面的行爲を捨て、各個人の宗教的經驗に重きを措くもの、靈魂其物の貴きと、利己心の卑むべくして、博愛の基督教的態度なるを明示したり。近世の初に於て、ルーテルの再び發揮したる靈魂其物は、貴し人其物は、貴して、思想は、其形式を變へて、人格の觀念となり、近世を通じて、強く人心を支配したり。人格とは

何ぞ、人其物これなり。其人の地位、其人の職業、其人の形體、其人の主義、其人の價值等あらゆる外面的關係より抽象せる人其物これなり。茲を以て、人あれば人格あり、人格は萬人に普遍的なると共に、何人にも平等なるものなり。近世の道德は、この人格の觀念を中心とし、これを尊重するを以て、其根本義となせり。カントが、人格はそれ自身に目的を有するもの、如何なる口實を以つてするも、方便として、人格を用ふるを許さずといひ、フヒテが、自己の人格を全うすると共に、他の人格を全うするを以て、道德の根本義となせるが如き、よく近世の道德主義を發揮するものと言はざる可らず。人格を離れては、道德なく、法律なく、宗教なし。歴史ありて、以來初めて、人其物の尊きを説きて、人格の觀念の端を開けるは、實に基督其人なり。基督教の思想中、美しく大なるもの少からず、しかも博愛のごと、人類の歴史に大關係を及ぼせる思想は、あらず。

(一)第二章 參照

(二)

前項の所論に徴すれば、基督教道德の根本義は、神を愛する事より、必然的

に隣人を愛する事、即ち博愛を導きて、宗教と道德とを結合し、兩者を打して一丸とするにあり。これに反して、道德と宗教とを峻別し、單に道德の立脚地より博愛を説かんとするの論者なきにしも非ず。例へば、人を社會的の動物と見、人は社會を待ちて始めて全く、社會は人を待ちて始めて全し、兩者の關係は補充的なり、社會はこれを組織する各個人の相愛するに由りて立つ、人相愛せざれば、社會全からず。社會全からざれば、人即ち立つに由なしといふが如き、或は、人に同情同感の性あるより出立し、同情同感の範圍は無限に擴めらるゝものなるを説き、これに由りて博愛を説明するが如き、これなり。斯の如く、單に道德の立脚地より博愛を説く事は、果して可能なるか。將た道德と宗教とを結合し、超越神論の立脚地に立つに非れば、博愛の眞義明らか難きか。これ實に宗教及び道德を論ずる輩の常に其頭腦を苦めたる大問題なり。

道徳の立脚地より博愛するの既り

社會の個人を待ちて立ち、個人の社會を待ちて立つは、論者の言の如く、個人相愛することに由りて、社會のいよ／＼健全なるも、亦論者の言の如し。

されど、社會には、反社會的行動を逞うして、社會の安寧秩序を妨害し、ひいて個人の福利を阻害する者少からず。盜賊其他の犯罪人これなり。茲に於てか、社會はこの種の惡漢を捕へて、これを獄に投じ、若くはこれを殺して、其害を除かんとす。若し夫れ、博愛主義の立脚地に立たんか、人其物は貴し、其罪人たり、はた良民たる何の關する所ぞ。犯罪人を獄に投じ、よりて以て、其行爲を反省し、惡を悔ひ、善に進むの機會を作るは即ちよし、これを社會より除かんが爲に、これを殺すに至りては、博愛主義に反するものと言はざる可らず。單に個人と社會との補充的關係に由りて、遺憾なく博愛を説明せんは即ち難し。又他の論者の主張する如く、人に同情同感の念あるも争ふ可らざる事實なり。されど、またこれと相併んで、利己の情あるを忘る可らず。他人の不幸を見て、これを憐み、これを救はんとすること、人性の半面たらば、自己の福利を進めんが爲には、他人の幸福を犠牲に供して、毫も顧みざるも、亦人性の半面なり。單に同情同感の念を以てして、遺憾なく博愛を説明せんも亦難し。

斯の如くにして、單に道德の立脚地より博愛を説くことの難きを觀破せる基督教徒は、遺憾なく博愛を説明せんが爲には、先づ人と人とは其本質相同じきを示すの要あり。人の本質相同じきを示すが爲めには、人を神の所造と見ざるべからずと主張し、博愛と超越神論とを必然的に結合せんと欲す。されど博愛は必ずしも基督教の獨占すべきものにあらず汎神論の立脚地よりすれば、優にこれを説明し得べきは識者の首肯する所なりとす。

例へば、ストア派の人々は、基督教徒に先ちて汎神論の立脚地より、四海同胞主義、世界主義を唱へたり、曰く一切は世界の根本原理たる理の顯現に外ならず、人も亦理の顯現なるが故に、何人も同一の法則に支配せられ、同一の權利を有す、四海は同胞なり、何人も皆世界の公民なりと。羅馬帝國の理想として掲げたる政治上の世界主義は、ストア派が哲學上の世界主義に負ふ所大に、基督教の宗教上の世界主義が破竹の勢を以て羅馬帝國に擴まり行きしは、如上哲學上及び政治上の世界主義が豫め時代思潮を開發せる結果なりとす。シヨールペンハウエルは、より詳に、より巧に博愛を説けり。彼に由

れば個人は、もと意志の顯現にして其本質は相同じ。然るに人これを悟らざるの結果、個人個人と相争うて、暫くも止む時なし。斯のときは、客觀化する意志、即ち客觀化する自我を非我と解するもの、意志のよくそれ自身を認識せざる過なり。智の光漸く明らかになり、意志よくそれ自身を認識して、この過失明らかなるに至れば、他と我との本質同じき事明らかになり、人と人の争忽然として止み、博く衆を愛するに至るべし。シヨールペンハウエルのこの立脚地は、意志を根本原理とする一種の汎神論なるが、これに由りて、人と人の本質相同じきを説明し、博愛主義に根底を與ふる事、斯の如く容易なり。佛教、宋學、心學等の汎神論よりするも亦然り。見るべし博愛は必ずしも基督教の獨占にあらざるを。

以上は、主として、理論的方面の議論なるが、これを事實に徴するも、博愛は、必らずしも、白色人種の獨占に非ず、基督教徒の獨占に非ず。基督教徒以外に崇高なる品性を有して、人の敬慕を値する幾多の偉人あるは、歴史の明らかを示す所なり。基督はよくこの間の消息を解したるを以て、よきサマリ

ア人の警諭もて博愛の宗教信者の專有物に非るを示したり。ある人、エルサレムよりエリコに下る時、強盜に遇へり、強盜其衣服を剥ぎ取りて、之を打ち擲き、瀕死になして去りぬ。斯る時に、或祭司この路より下りしが、之を見過しにして行けり、又レビの人もこゝに至り、進み見て、同じく過ぎ行けり、或マリヤの人、旅してこゝに來り、之を見て憫み、近よりて、油と酒を其傷に沃し、これを裹みて、己が驢馬に乗せ、旅邸に携れ行きて介抱せり、次の日出づる時、銀二枚を出し、館主に予へて、此人を介抱せよ、費もし増らば、我がへりの時爾に償ふべしといへり。路加傳第十章廿七 祭司及びレビの人却りて、隣人を愛せず、マリヤの人却りてこれを受す。基督の警諭、よく博愛の基督教徒の專有に非るを示して、餘りあるに非ずや。基督教徒と自稱する人々にして、博愛は基督教徒の專有なりなど主張する者少からず。吾人は、彼等の爲に、其洪量に於て缺くるものあるを惜まざるを得ざるなり。

基督教の諸徳と博愛

博愛の精神は、基督教道徳の中心點にして、罪ある者、美しからざる者をも

施財

愛せよて、寛恕、敵を愛せ、善に由りて惡に勝てよて、柔和、博愛の爲には、身を捨て、惜まざれて、ふ献身の如き、基督教にありて重視せられたる諸徳は、いづれも皆博愛の精神より、必然的に導かるべきものなり。基督はこの博愛の精神を行に示すに、二様の形式を用ひたり、施財は即ち其一なり。約翰傳第十三章三十一に由れば、基督がユダに向つて、爾が爲んとする事は、速に爲せといひける時、其弟子は、ユダは、金囊を職れる故、イエス、(中略)彼をして、貧者に施さしむるならんと意へり。この記事に徴すれば、基督は、貧者に遣ふ毎に、其金囊の底を叩きて、恵み與へし事思ひやらる。彼に幾何の蓄積ありしかは、吾人の知らんと欲して知る能はざる所、されど、彼の境遇、彼の事業に就いて考ふるに、彼に豊けき蓄積ありしとは、斷じて考ふる能はず。しかも、彼は、之を貧者に施すを惜まず。たゞにこれに止らず、基督は、隣人を愛する所以の道を教へては、往きて、爾が所有を售りて、貧しき者に施せ、馬太傳第十九章廿六といひ、又最後の審判の日、賞せられんは、飢し者に食を與へ、渴しし者に水を與へ、旅する者に宿を與へ、裸なるものに着せ、病むものを

慰め獄にある者を訪ふの人なるを教へて、斯くて王其右に居る者に言はん、
 吾父に恵まるゝ者よ、來りて創世より以來爾曹の爲に備へられたる國を嗣
 げ、蓋爾曹我が飢し時我に食はせ、渴きし時我に飲ませ、旅せし時我を宿らせ、
 裸なりし時我に衣せ、病みし時我を見舞ひ、獄に在りし時我に來ればなり、中
 略我誠に爾曹に告げん、既に爾曹我がこの兄弟の最微き者の一人に行へる
 は、即ち我に行しなり馬太傳廿六章と言へり。見る可し、彼の貧者に向つて、
 いかにかに豊かなる同情の涙を有したるかぞ。

基督の貧
 民主義

唯にこれに止らず、基督はまた富者を呪ひて、爾曹富める者は禍なる哉、す
 てに安樂を受くればなり、爾曹飽ける者は禍なるかな、餓んとすればなり、爾
 曹今笑ふ者は禍なる哉、哀み哭んとすればなり路加傳六章二といひ、又、小子
 よ、財を恃む者の神の國に入るは、如何に難いかな、富者の神の國に入るより
 は、駱駝の針の孔を穿るは、却りて易し馬可傳十章二といへり。彼の富者を
 憎むは、其現世に執着して理想の天國を見る能はざるに由るなり。貧者は
 これに反すこゝを以て、福音をきけば、虚心にこれを容れて、我自らも天國に

入らんことを思ふ。茲に於てか、基督は彼を捨て、これを選めり。(一) 嬰兒
 及び嬰兒のごとく柔和なる者、(二) 社會的關係の犠牲たる弱者、(三) 異邦人、
 マリア人の如き者の友となり、これによりて、其理想を實現せんと欲するに
 至れり。これ貧者に對する同情の餘りに切に、貧即柔和、貧即謙讓、貧即敬神
 と解して、貧其物を貴ぶかの觀あるに至れる所以なり。希臘及び羅馬の人
 々は、むしろこれに反して、貧者を忌み富者を貴べり。たゞ希伯來在來の思
 想には、貧と柔和謙遜及び敬神を結合する傾向あるが故に、基督も亦この傾
 向を受けたるなり。貧者の質朴にして柔和謙讓にして敬神の心に富むは、
 何人も首肯する所されど、多かる貧者の中には、其身體健全にして其額にだ
 に汗するを辭せざれば、豊かに衣食し得る者あるを忘るべからず。かゝる
 怠惰の輩に施さんは、徒に其者の怠惰を助長するのみ、害ありて益なし。基
 督や蓋し此間の消息に通じたりけむ、しかも福音書に、この際に處する教を
 掲げざるは如何。吾人の見を以てすれば、よく其富を利用して其熟練人に
 及ばず、其技能人後に落つる輩を保護し、これをして人らしき生活を營まし

むるものこれ實に施財の本義なり。

貧は固より人生の大不幸なり。されどこれにもまして大なる不幸は、病なるべし。基督の當時にありては、なほ醫學なく、たゞ奇跡に由りて病を治し、奇跡は預言者に特殊なる徴驗と信ぜられたり。希伯來人は希臘人のごと自然律によりて自然界の支配せらるゝを知らず、基督の如きすらなほ祈禱と信仰とに由りて自然界を支配し得るを信じたり。爾曹もし芥種一粒程の信あらば、此桑樹に抜けて海に植れと曰ふとも、爾曹に従ふべし路七章六五とあるが如きこれなり。茲を以て自ら救世主なるを確信する基督の自己に奇跡を行ひ得る力あるを確信せることいふ迄もなく、彼の救世主なるを信ずる彼の信者が彼に奇跡を行ひ得るの力あるを信じたることも、またさまで訝しき事に非ず、基督の至らん處には、人々争うて、すべての患へる者、萬殊の病また痛み惱める者、或は鬼に憑れたる者、癲癩癱瘋の病に罹れる者を彼に携れ來りければ、之を醫やせり、馬太傳四章二十四治療は實に彼が博愛の他の形式なり。聖書の中、奇跡の記事極めて多く、就中療治に關する者特に多

し。多かるこれ等の記事中には、基督の親しく行ひしものあるべく、又人より人に語り傳ふるの間、風聞に風聞を加へて、事實ならぬもの、確定せる傳説となりしもあるべし。されど、基督が自己に奇跡を行ふに足るの力ありと信じ、これを貧しき病者若くは信仰厚き人々に應用したるを思へば、博愛に對する彼の態度必ずしも知り難からず。基督教徒は超自然的に奇跡を説明して、極力これが辯護に努れども、吾人は、ストラウス、ルナン等の人々に倣ひ、歴史的に奇跡を説明して、時代精神基督を驅りて奇跡を行はしめ、時代精神當時の人を驅りて、基督の奇跡を信ぜしめたりと言はんと言ふと欲す。奇跡は實に時代精神の産物なり。△今日の如く、科學進歩し、人智開發せる時に當りて、奇跡の辯護に、全力を注ぎて、科學を排するが如きは、愚の極なり。寧ろ基督の精神を汲みて、この科學、この文化を利用して、博く衆を愛する所以の實を擧げてこそ、基督教徒たるに恥ぢずと言ふべけれ。△

第十一章 牧師としての基督

(一)

牧師とは
何ぞ

基督が歴史ありて後、始めて人其物、靈其物の價値を認めて、博愛を説きしことは、前章既に論じたるがごとし。人其物は貴し、靈其物は神聖なり。されど、世は姦惡の世なり、暗黒の世界なり、サタンの王たる世界なり、茲を以て失はれたる人は多く、失はれざるは少し。失はれざる靈は少く、失はれたるは多し。この失はれたる人の失はれたる靈を探し、これをして神を見しめ、これを導きて天國に入らしむるは神の切に欲する所、神はこの大任を其双肩に荷はしめて、メシアを送れり。メシアは即ち我が使命は失はれたる人失はれたる靈を探して、これを之が罪より救ひ、神國を實現するにありとは、基督の奮つて立ちし動機なり。三章 茲を以て、彼は漁者の魚を漁るがごとし、人を漁るを以て、己が任となし、馬太傳 四章 醫の病ある者を治するがごとし、罪ある人を招きて、悔ひ改めしむるを以て、己が任となし、同九章 十神の

たゞ神の
知を求む

國の福音を宣べ傳ふるを以て、己が任となし、路加傳 四章 羊の爲に命を捐つる善き牧者を以て自ら任じ、約翰傳 十章 長兄が、其弟妹の爲に、これが指導の任に當るがごとし、神の家庭に於けるあらゆる子を救ふの任に當れり。

斯の如く、基督の人を牧するは、我の父を愛し、且つ其命ぜしことに遵ひて行ふなり、約翰傳 十四章 父の意をうけて、これを成すなりて、ふ確信の上に立つを以て、人の爲に彼を誦諱する者あるも、彼はこれを意に介せず、人の爲に彼を迫害するも、彼は自若として、其道を説けり。彼は慰籍を世に求めず、彼は知己を人に求めず、たゞ其使命を果すことに由りて、言ひ知らぬ満足を感じたゞ、神の知るあるを恃みて、人知らぬ心強さを覺えたり。豈たゞに基督のみならず、や、荒野に於て、神に召されたりて、ふモーゼ、イザヤ、パウロ、エレミヤ、其他の使徒及び預言者の、誰かは、神に召されて、神の使命を果すて、ふ確信を有せざりし。この確信ありて後、始めて、道の爲には、水火を辭せず、たゞ、緑なき衆生の爲に泣きて、ふ美しき態度に出づるを得るなり。

既にこの確信ありて人を牧す、罪深き人をして、よく悔ひ改めしめ、失はれ

牧師の樂

た○る○靈○を○探○し○て○こ○れ○を○得○ば○言○ふ○べ○か○ら○さ○る○満○足○と○愉○快○と○を○感○ず○る○こ○と○い○ふ○迄○も○な○し○。路加傳第十五章に、失はれたる羊を獲たる牧者の喜を記して、
 「喜○び○て○こ○れ○を○己○の○肩○に○負○け○家○に○歸○り○て○其○友○と○其○隣○の○人○々○を○召○び○集○め○て○曰○は○ん、我○と○共○に○喜○べ、我○失○へ○る○羊○を○獲○た○れ○ば○な○り」といひ、失はれたる子を得たる父の喜を記しては、また肥えたる犢を牽き來りて幸れ、我儕食して樂まんといひ、一人の罪ある人悔ひ改めなば、神の使の前に喜あるべしと附記したる、この種の満足、この種の愉快を名狀し盡して、人を首肯せしむるに足るに非ずや。基督嘗てサマリヤの女を罪より救ひ、約翰傳四章四十二欣然として坐したる時、市に行きたる弟子、食を携へて歸り來れり。弟子かれに請ひて、ラビ食し給へと言ひけれど、彼は喜餘りて食ふ能はず、得々然として、我に爾曹の知らざる食物ありと答へぬ。弟子互に曰ひけるは、食物を彼に饋りし者は誰なる乎、イエス彼等に曰ひけるは、我を遣し、者の旨に隨ひ、其工を成し畢る、これ我が糧なり。この時、先のサマリヤの婦、數多の靈を導きて、彼の救を受けしめんが爲に來りしかば、彼はいよく笑ましげに、爾曹稔時になるに

は、猶四ヶ月ありと言はずや、我爾曹に告げん、目を舉げて觀よ、田は熟きて、稔時になれりといへり。失はれたる靈を救ひ得し彼の胸は、いかに喜にちどりけむ。基督が、エルサレムを望み見て、もし爾だにも、今この爾の日に於て、爾の平安に關れる事を知らば、福なるに、今爾の目に隠れたり。路加傳十九章四十一二と咒きしは、縁なき衆生の爲に、縁なき衆生を泣けるなり。人を救して、勞を厭はず、救はれたる靈を祝し、救ふべからざる靈の爲に泣く、吾人は、こゝに、牧師としての基督を見る。

(二)

人を牧して、失はれたる靈を求めんと欲す、前項に論じたる確信の外に、適當なる手段と熟練とを要するや言ふ迄もなし。基督は、果して、如何なる手段をか用ひたる。

(一) 基督は、先づ、奇跡を利用したり。

奇跡を博愛の手段とせること、及び奇跡の意義は、前章にこれを略論したり。されど、基督の奇跡を行ふや、單に人の病を治して、これに幸福を與ふる

人を救ふ
の手段

が爲にはあらで又これを利用して人を導きよりにて以て向上の道に入らしむべき門戸を開かんが爲なり。基督の周圍に螺集せる者は其數頗る多かりしも多くは彼の奇跡を傳へ聞きて彼の力の偉大なるに驚き己も亦奇跡の恩澤に浴せんことを欲りして來りたる者に過ぎず。基督はこの種無智の人々を探へてこれに天國の福音を傳へこれをして彼の教を信ぜしめたり。馬太傳第四章^{廿三}に「イエスガリラヤを遍く巡り其會堂にて教をなし天國の福音を宣べ傳へ且つ民の中なる諸の病諸の疾を醫やしぬ其聲名普くスリヤに播りしかば人々すべての患へる者萬殊の病又痛み惱める者或は鬼に憑れたるもの癩癩癩癩の病に罹れる者を彼に携れ來りければこれを醫やせりガリラヤとデカポリスエルサレムユダヤヨルダンの外より多くの人々來り從ふ」とあるよくこの間の消息を洩せり。豈た々に奇跡のみならず感謝は人の心の隔壁を去りて人の心の門戸を開くもの親切に由りて感謝の情を勵まし人の心の門戸を開きて後これに説くに其道を以てし以て人心の病を治す。親切博愛は眞の牧師の人に接してこれを化す

べき第一の手段なり。されど單に奇跡と施與とに由りて人を導かんと欲すれば功利を重んずる世の常の輩は單に利益を以てこれに集り病既に癒え苦既に去りて又利益なきに至れば去りて顧みざらんとす。茲を以て奇跡及び施與の如きはたゞ人を導くの第一歩なるを忘る可らず。

(二)基督が牧師として採用したる重なる手段は説教なり。

基督の説教に就いては、次章に詳説する所あらんと欲するが故に、こゝには、多く言はざるべし。たゞ基督は、其周圍に集り來る人々の貧しき者賢からぬ者、匹夫匹婦なるを知るが故に、彼は、眞理を眞理として傳ふる事なく、これに着するに譬喩の衣を以てし、何人にも理解し得ることを努めたり。人若し眞によく眞理を解しなば、何人かよくこれを愛せざらんや。されど眞理は、えて解し難きものなり。又これに添加するに、情の炎を以てするに非れば、人の心をひき難きものなり。基督は、よくこの間の消息を解するが故に、人に應じて法を説き、人をして、其境遇に反省して、よくこれに首肯せしめ、更に進みて、これを他の方面にも應用せしめたり。説教を試みし人は多し、しかも、基督

のごと、美しく、且つ人の心に透徹する説教をなし得たる人は少し。茲を以て、吾人は、基督のごと、よく牧師たるに適したるの人は少しと言はんを欲す。

(三) 基督は又説教と共に對話を用ひたり。

約翰傳第三章^{十一}に掲げられたる、基督のニコデモに新に生るゝことの必要を説きたるが如き、同第四章^{十二}なる、井の傍にてサマリヤの女と談りしが如き、共に基督が對話に由りて、失はれたる靈を救ひたる例なりとす。これ等の對話を心して讀まん輩は、基督がいかによく對話者の境遇を察し、又其心を汲みて、應病與藥的に、其良心に訴へしかを知るに難からず。思ふに、基督に對して、これと語りし輩は、其人の心を洞察するの鋭眼に、驚くと共に、この人に由りて、我が心の汚點を洗ひ、我が心の病を癒し得るを感じて、敬愛の念禁じ難き者ありしなるべし。人を濟度するに、同じく對話を利用したるソクラテスは、常に智に訴へて、破邪的の辨を振ひ、人をして辭屈し、語窮りて、其無識を自白せしむるに至らざれば止まざりき。基督の爲す所は、全然これに異れり。彼は主として、人の宗教的感情に訴へ、單に邪を破せんよ

りは、寧ろ其蒙を啓きて、自己の過を自覺せしめ、彼に由りて、救濟を得んとするに至らしめんを欲したり。ソクラテスに對して、これと對話を試みし輩には、秋霜烈日の感ありしこと疑なく、基督に向つて、これと對話を試みし人々には、春の日のやさしき光につまれし感ありしなるべし。吾人は、斯の如くにして、希臘主義、伯希來主義の相違のこゝにも著しく表顯するを發見す。基督の説教を聞きし者は多し、しかも、中には、其主旨を誤解して、激烈に彼を難ぜし輩も少からざりき。たゞ彼の對話を聞く者に至りては、よく彼を理解し、彼の如く考へ、彼の如く感ずるを得たり。世を擧げて彼に敵せし時、屢彼を宿したる家庭の人々は、衷心彼を愛して、彼に避難所を與へたり。これ一には、この人々の彼と對話を交すの機會を有して、よく彼を解したるに由るなり。なほ吾人の注意すべきは、彼の對話の彼より開かれず、彼に行きて、彼に問ふ人を待ちて開かるゝことなり。罪深き人の子の、其罪を自覺して、救濟を求むるの時、彼は喜んでこれと語り、熱心にこれを救はんと試みしなり。佛家の説に「加持てふことあり。加とは、此方より力の加はる謂、持

とは、彼を維持するの謂なり。彼の力の我に加里來りて、我を維持すると共に、又我の力彼に加里て、よく彼を維持し、相互に能加所加となり、又能持所持となりて、相化し相應するを加持といふなり。佛の衆生に對する須く加持の關係あるべし。佛に濟度の熱心あるも、衆生にこそ受くる誠意なくんば、これを濟度するに由なし。宗教家の宜しく力を用ふべきは、自ら其罪を自覺して、濟度救濟を求むる輩にあり。基督がこの種の輩と對話して、毫も厭くを知らざりしものいかて故なしとせんや。

(三)

彼の公生涯は最後の三年にして、第一年、第二年、第三年、各其特色を有す。第一年は潜匿時代とも言ふべきもの、彼はエデアにありて、道を説かんが爲に準備せりき。この一年の事を記して稍詳なるは、約翰傳にして、他の福音書には全然これを缺けり。第二年は彼のガリラヤにありて、盛に奇跡を行ひ、及び説教を試みて、彼の牧師たる本領を發揮せる時代なり。學者の徒バリサイの人々は、絶えず猜疑の眼を放ちて、彼の行動を觀察し、人を遣して、こ

公生涯の三年

とての死と
牧師と

れを偵察せしめしが、奇跡に由りて彼の異能を信じたる民衆は、靡然として彼に走り、彼はガリラヤに於ける一大勢力となれり。かゝる間に一年を送りて、第三年は來りぬ。其の前半六ヶ月は、彼なほガリラヤに留りしが、民衆の多數は、唯好奇心より來りしのみ、未だ眞に彼を解せず、加ふるに、彼は貧しき者、低き人々の友たりしかば、上流社會、即ちサドカイ派及びヘロデ黨の人々は、彼を目して、政治的野心家、政變を企圖するものとなし、バリサイ人及び學者は、彼を目するに背教者を以てして、極力彼に反對し、ガリラヤに於ける彼の運動は、全然失敗に終らんとせり。彼これを以て、避難の場所を異邦人の間に求め、公衆よりは、寧ろ使徒弟子を教へて、神國未來の計を爲さんとし、又其一身を犠牲に供して、道に殉するに非ざれば、よく其神國を實現して、彼が牧師たるの使命を果す能はざるを觀破したり。彼故にサイロピニシヤに旅して、後再びガリラヤに歸り、其弟子を率ゐて南の方エルサレムに向ひ、途に六ヶ月を送りて、エルサレムに到達したり。若し夫れ第二年を呼びて、被歡迎時代といふべくんば、第三年は、被反抗時代とも言ふべきか。被反抗

時代に次ぎて来りしは、十字架上の最後なり。彼の死や、人類に代りて、人類の罪を償ひ、由りて以て、メシアたり、牧師たるの大任を全うしたるものなり。七章失はれたる羊を得、喜んで、これを己の肩にかけ、家に歸るは、未だ以て牧師の至れる者に非ず。ガリラヤに於ける基督の態度これなり。羊の爲に命を捐つるに至りて、初めて眞の牧師といふべし。エルサレムに於ける基督これなり。基督の如きは、實に牧師の偉大なる者なり。

第十二章 基督の説教

(一)

基督静默の卅年は、修養の時代なりき、準備の時代なりき。かくて、修養成り、準備全く終りて、公生涯の晴れの舞臺に上り来るや、其勢の猛烈なる、積み、積み、港へに港へたる水の、一時に決したるにも譬へつべし。彼は、この勢を以て、ナザレに行き、カペナウムに行きて、こゝに其道を傳へ、以て牧師たる其天職を全うせんことを期せり。かくて後、漸く其活動の舞臺を廣めて、近

彼の名聲
四方に喧

聽衆

隣の市邑に及び、遂に全ガリラヤを風靡せること、前章に略論せるが如し。彼の道を説くや、日を撰ばず、處を問はず。安息日に、教會に教ふる、と共に、日々、街に出て、山に上り、荒野に出て、若くは、船を湖上に泛べて、其上に立ち、熱心に、其教を説けり。彼の説教や、條理井然、人の理解力に訴へんとする學者の講演に非ず、利害得失を比較して、人の功利心を訴へんとする政治家の演説に非ず、直ちに彼自らを披瀝し來りて、人の肺腑に訴へ、人をして宗教の眞理を直觀せしめんと欲す。こゝを以て、彼の説教や、深く、人心の底に徹し、彼を中心として、集る聽集雲の如く、彼の名聲は、人より人に、反響して、遂にシリヤ全土に及び。或時は、彼の室に居ること聞えければ、直ちに多くの人々集り來り、門に立つべき場所さへもなき程なりき。馬可傳二章一節又或時は、彼教に勞れ、人を避けて、閑静を求めしが、聽集は忍耐して、再び彼のあらはるゝを待ち、以て其教を聞けり。

彼の弟子は、多く位低き人々にして、中には當時の猶太人が齒するをだに恥づる税吏罪人の徒をも交へしこと、既にこれを言へり。況して、彼の聽集

中には、あらゆる階級の人々を網羅して来るものは、毫もこれを拒まざりき。嬰兒を携ふる者あれば、神の國に居る者は斯の如き者ありとて、これを迎へ、税吏及び罪人の來るあれば、康強なる者は、醫者の助を求めず、唯病ある者、これを需むとて、これを歓迎し、男子婦人少しもこれを問はず、パリサイの徒、學者、彼を難するに非れば、又喜んでこれを其聽集の中に加へたり。教育ある人を教へて首肯せしむる人はあり。賤しき者のみを集めて、其心を收むる者はあり。基督の如く、あらゆる階級の人々を對手とし、これに其道を傳へて、齊しく其心を感動せしむる人に至つては、其例いと稀なり。豈た々に彼に接し、彼の足下に集りて、其説教を聽くのみならんや。彼の山上の説教の如き、又彼の失はれたる子の説教の如き、一たび彼の口より發して、後年を重ねる二千餘年、又彼を見るに由なき吾人と雖も、なほこれを讀みて、我が肺肝に徹する者あるを覺え、身親ら彼に行きて、彼の説教を聽くの感あるに非ずや。彼の手人心を維く鎖をにぎるに非れば、いかてかよくこゝに至らんや。人心を維く鎖とは何ぞ、吾人をして、これを語らしめよ。

(二)

馬太傳第七章廿九に、山上の説教を聽きたる聽衆の状態を記していふ、集りたる人々、其教を駭きあへり、そは學者の如くならず、權威を有てる者の如く、教へ給へばなりと。學者は、會堂に於て、彼等民衆に對して、神の教を説くの人民衆は先づ、基督説教の態度が、いたくこれ等の學者と相異なるに驚けり。これ等の學者は、言ふ迄もなく、惡しき人々に非ず、忠實にモーセの律法を究め、舊約聖書に通じたる人々なれど、多くは死灰枯木の如くにして、何等の活氣なく、又何等の熱誠なく、よく人心の奥を穿ちて、これを動かし、由りて以て、民衆を感化するに足らざりき。タルムウド(第五卷)に、彼等の態度を記していふ、彼等の説を聽く者は、古物展覽所に入りて、道を失したるにたとへつべし、行けども、外とに出づるを得ず、古物より立ち上る塵埃は、遠慮なく、口鼻を突き、息はまさに止息せんとすと。故をたづぬるの要は、故を故として、學ぶに非らず、故を温ねて新を知らんが爲なり。故を故として、死せる昔を學ばんとす。故を以て、活氣なく、熱誠なし。故に於て新を發見し、よりて以

基督の感
化力と説

て、新に資せんとす。故は再び生きて、活氣爲に生じ、熱誠爲に加はる。學者の態度は前者にして、基督のそれはまさに後者なり。基督は自ら神を見、自ら神に交り、神の國を見て、これを語り、學者は昔を傳へて、これを語る、學者は他の權威の上に立ち、基督は自ら權威を有てる者として、これをいふ。基督の態度は、明らかに自己の天國に連るを意識する預言者のそれにして、確信なく、活氣なき學者のそれに非ず。宜なる哉、彼の聽衆の彼をたゞへて、大なる預言者、我等の中に興る路加傳七と言ひしことや。當時の學者もて、繪畫の美をますべき陰影燈の光明をますべき關にたとへなば、基督の説教のこれに由りて、いよゝ其力をまし、其勢を加へしこと、必ずしも想像し難からず。

平々凡々の説と雖も、これを述ぶる人の人品高ければ、偉大なる感化を與ふるに反し、深遠高尚の眞理と雖も、これを説く人卑しければ、人の注意をひくに足らざるは、吾人の常に經驗するところ、説教者に缺く可らざる要件は、單に其學力識見に非ず、單に其才にもあらず、人を以て人を化し、心を以て心を薰ずるの感化力なり。思想の符徴たる辭のみにて、遺憾なく、心を通はし

基督の性

得と考ふるは、謬見なり。我彼と相對して坐す、彼言はず、我語らず、しかも眼より眼を通じて、心心と相通ふに非ずや。其人に接すること、それ自身に値ありて、言語文字に値なし。言語文字は、たゞ其心を披瀝して、人の肺腑に訴ふるの手段のみ、これに或物の加はるにあらざれば、人人と相解し、心心と相結ぶこととえて解すべからず。偉人は、この或物を已に有して、人に臨み、これを以て、其人を化し、これを以て、其人を薰ず。茲に於てか、感化あり。感化力なき牧師の説教や、唯これ言語文字の行列たらんのみ。聖書に就きて、彼の説教を讀むに、必ずしも、吾人の迷を解くに、足らず。彼の態度、彼の音聲、果してよく、説教に適するや、否、吾人敢て、これを知らず。されど、彼の説教が人を動かし、人の心に透徹したるは、争ふべからざる事實なり。牧師は多ししかも、基督の如く、人品高き牧師は稀なり。人は多ししかも、基督の如く、偉大なる人は少し。この人を以てして、説教壇に立つ、彼の説教の人を動かせし者、主として、彼の偉大なる人品、彼の偉大なる感化力に由るに非ずして、何ぞや。

基督の當時は、猶太教の全然衰へし時にして、民衆は、たゞ乾燥無味なる學

者の説教を聴くのみ清新の氣遂に見る可らざりしも、猶太人は特に恵ま
 たるの民なり、昔は大なる預言者相次て起り、神聖なる猶太の地は、至る所に
 其聲を反響せりて、彼等の記憶は、なほ猶太人の宗教的狂熱を維持したり
 しこと、第二章及び第三章に言へるが如し。茲に於てか、基督の説教を始む
 るや、民衆は預言者を以て彼に擬し、或人は、バプテスマのヨハネ、或人は、エリ
 ヤ、或人は、エレミヤ、また預言者の一人なりと言へり。馬太傳十四バプテスマの
 ヨハネの事は既にこれを言へり。人の彼に擬するエレミヤは何人ぞ。エ
 リヤは何人ぞ。兩者の人となり、知らば、また以て、基督其人の人品を推す
 に足らん。民衆の意見に従へば、兩者は共に預言者の最も大なるものなれ
 ど、其性質は全然相反したり。人の兩者を以て彼に擬するに徴すれば、彼
 蓋し兩者の特色を兼ねて併にこれを有したるか。耶利米其預言書約全は
 情の人なり。彼は自ら涙の人となりて不幸なる人々の爲に泣き、其苦痛を
 滅せんことを欲したり。基督も亦實にこの種の人なりき。見よ、山上の説
 教が、貧しき者衰む者迫害せらるゝ者に對する同情の辭もて始まるを。こ

れを聴きし民衆の中には、彼が同情の涙、慰撫の辭によりて、其心を強うし、其
 悲を忘れし人の、いかばかりか多かりけむ。基督は、あらゆる階段の人々に
 向つて、其説教を試みしも、特に貧民、税吏及び罪人に對して、同情を有したる
 は、主として、彼の情の人なるに由るなり。エリヤは、秋霜烈日の人、王と其後
 とを面責するを辭せず、國人を擧げてこれを敵とするも、斷として阻む色な
 し。基督も亦實にこの種の人なりき。彼が母と争ひて、其干渉を退け、國民
 の期待に反して、其理想を追ひ、パリサイ人の非難に遭ひて、猛然これを反駁
 し、祭司學者の迫害に際して、毫もこれに屈せざりしが如き、よく彼の性質の
 この方面を發揮せり。彼の如く、同じ人にして、全然相反する兩極端の性質
 を結合せるは、吾人の稀に見る所、彼に接して、彼を仰ぎ、彼の説を聴くの人
 必ずや、一偉人の雲を抜ける峻嶺の上に立つて、目撃すべく、この偉人のやが
 て坂を下りて、徐ろに我が手をとる、鼓舞しつゝ、慰藉しつゝ、我を導きて、山
 上に至らんとするを感ずるなるべし。基督の偉大なるは、茲にあり。基督の
 よく、あらゆる人を動かすも、亦茲にあり。偉なるかな、基督。

(三) 基督の說教がいたく人を感動せしめたる他の理由は彼の用ひし說教の形式がよく聴衆の心を曳くに適ひてこれを動かしたる事なり。初心の說教者は單に說教其物の價值如何に苦心してこれに着するに如何なる衣服を以てすべきかを願ず。爲に聴衆の心を曳く能はざることを少しとせず。斯の如きは徒に善き地を選びて其仕立に注意せざるもの大なる誤謬なり。基督の選みたる形式の其宜しきを得たるが爲に彼の說教のよく人を感動せしめしものいかで偶然ならんや。

基督說教の形式は徹頭徹尾希伯來的なり。(第五章 一參照)著しき題目を捉へ來りてこれを種々の部分に分ち其一つ一つを説き明かして後密に其全體を結合しこれを結ぶに著しく人の心を曳き人をして猛然これが實行に向はしむべき警語を以てす。斯の如く説明又説明系統的に最後の結論に到達するものこれ實に西洋人の賞讃を博すべき演說の形式なり。希伯來人はこれに反して一點を捉へてこれを反復し彼の眞理と信する主なる思想を

拉し來り銳利にして容易く記憶し得べき少數の辭もて表出するを常とす。彼は簡潔を主とし短詩の形を好み託宣的神祕的なるを愛す。前者を以て輪々相連る鐵鎖にたとへば後者は夜の空の闇を破りてこゝかしこに美しき星の耀くにもたとへつべきか。學者はいざ世の常の人々は長き鐵鎖を辿りて輪より輪に至り遂に其端に達するが如き煩を好まず簡單明瞭なる數語によりて事物の全體を捉へんと欲す。基督の說教は前者よりは寧ろ後者の望に副へり。簡潔にして理會に容易く一見平易なるに似て意は即ち深し。水潔き流の容易く底を透見し得べきにも係らず手を投じてこれを探らんとすればえて達し能はざるにもたとへつべきか。彼の說教が大に民衆の心を動かす所以はこれなり。

學者の思想の抽象的概念的なるに反し常人の思想は具體的表象的なり。眼に見耳に感じ手に觸れ得るものにして初めて常人の注意を曳くべし。こゝを以て常人は精神現象の如き無形のものをもこれを見得べき外界に移し比論若くは譬喩に由りて表象的に理會せんとすこれ吾人の常に目撃

する所なり。基督の説教は、こゝに於ても希伯來思想の特色を追ひ力めて譬喩を自然界にとり、表象的に無形の神國、無形の靈性を説明せんと試みた。由來神は、人と共に自然を作れり。兩者共に神の所造、神の顯現なりとすれば、比喩を自然界に捉りて、人心を語る、必ずしも難きに非るべし。基督の説教が、いたく人心を動かす他の理由は、人の表象に訴ふることなり。基督の説教は、吾人に語るに、彼が祖國の土地、風物、鳥獸、花卉、其他の事物を以てし、彼の時代のあらゆる書物を集むるも、これ等を語りて詳細なるは、彼の説教に及ばずと傳ふ。見るべし、彼の説教の如何に豊かに自然物を假り來りて、表象的に人心を語れるかを。吾人は、彼の説教を讀みて、寧ろ、パノラマを見、油畫の下に立つかの感をなすなり。朝露を帯びて、あはれに立てる野の百合、牧者に導かれて歸を急ぐ羊の群、手に燈を執りて、新郎を迎ふる童女、太馬傳廿五章、其佩經を幅濶くし、其衣の裾を大にして、筵席の上坐、會堂の高坐に就く、太馬傳廿三章、道の傍なる瀕死の旅人を見て、其傷を包む、マリア人、路加傳三十七章、何れか、短き數語の中に、當時の生活を縮寫せる、パノラマ

ならざる。しかも、此裏面に、高尚深遠なる教を包むに至りては、たゞ其巧なるに驚くなり。巧に譬喩を用ふるは、もと希伯來思想の特色なれど、基督に至りてよく、これを大成し、其巧妙を極むるに至れり。簡單にしてしかも深遠に、繪畫の如くにして、しかも活氣に富む、基督の説教の如きは稀なり。彼の人品の高きを以てして、かゝる形式の説教を試む、宜なるかな、人心を動かすとの大なるや。

(四)

形式の人を動かすに大切なるや、言ふ迄もなし、されど、形のみ徒に美にして、其内容これに副はず、襤褸を蔽ふに錦を以てせば如何。一見頗る美、一時は人の注意を曳かんも、人の其内容を觀破するに至らば、何人かよくこれを願んや。基督の説教は、其内容の美に於て、毫も其形式に譲らず、内容形式と相須ちて、以て大に人心を曳けり。基督説教の内容を以て、これを當時の學者のそれと比較するに、學者の宗教は、儀式の國を中心とし、其説教の内容は、些々たる儀式の末に限れり。斯の如きは、宗教の根底果して那邊に存する

神國を語
りて人の
心を動か
す

かを忘却し、月を指すの指を認めて月となすもの、如何て人心の弦線に觸れ、人心の奥に透徹して、大にこれを動かすを得んや。基督はこれに反して、神國を宣傳し、宗教の根本義を拉し來りて、直ちに人の宗教心に訴へたり。光あるに見聲あるに聞くがごとく、我神を見、人をして神を見しめたり。三章

人若し彼の説教をきゝて、失はれたる羊、失はれたる子の譬喩に至らば、誰かは、天國の門の基督に由りて、我が爲に開かれしを感ぜざらんや、我が心に何物よりも貴き寶を宿して、この寶を守るの我が務なるを感ぜざらんや。彼は靈現の不死なるを示し、幕の彼方に位する神國を語りて、人生の意義を明らかめ、人は何處より來りて、何處に去るか、の謎を解かんとす。彼に行きて、彼に聞く者、誰かは物質の世界の外に、又靈魂の世界ありて、我が身はこの兩世界に涉るを首肯せざらんや。彼の説教のいたく人を動かせしはこの種の内容のよく人の宗教心に觸れたるに由る。靈魂は果して不滅なるか、我これを知らず。されど、基督の説教に宿りて、そのかみの人を動かし、爾後二千年の久しきに涉りて、絶えず人を動かしたる彼の靈魂は、生きて今日に働

基督の説
教は彼を
中心とす

きつゝあるに非ずや。

基督の説教に於て、一事のなほ注意を値するは、彼の説教の常に彼を中心とし、彼の創めたる宗教の彼に宿り、彼に於て活動しつゝある事これなり。彼が天國を宣傳して、凡て勞れたる者、又重きを負へる者は我に來れといひ、爾曹神を信じ、又我を信ずべしといひ、我を惡む者は、又我が父をも惡めりといひ、我を受くる者は、我が父を受くるなりといふが如き、何れも彼を中心として、彼の神國を説き、彼の道を教ふるなり。かるが故に、基督の人格を外にして、基督教なく、基督教會なし。後の基督教徒や、もすれば儀式、信條の末に走りて、其源流を忘却し、小宗派相併立して、黨同伐異を事とす、吾人門外漢より見れば、頗る奇異の感なき能はず。吾人は語を彼等に寄せて、基督其人に歸れ、基督教こゝにあり、基督教會こゝにありと言はんと欲す。彼等果して首肯するや否や。

第十三章 弟子の教育

(一)

説教者として、聴衆に對する者と、教師として、弟子を教ふる人とを比較するに、人を教へ、人を導くは兩者相同じ。されど、弟子は少うして、聴衆は多く、弟子の日夜來り學ぶに反して、聴衆は來り且つ去るを常とす。聴衆の求むる所は、花なり實なり。弟子の求むる所は、木其物なり。花の眼を喜ばし、實の口に適するものあれば、聴衆は喜んでこれに集り、其瞬間に於て直ちに其花を賞で、直ちに其實を味はんと欲す。花や美なり、されど、一度散りて、又枝に歸らず、實や甘し、されど、食ひての後、はよく何物をかといめん。木其物を得て、これを培ふ、其勞や大なり、しかも、これをだに忍べば、年毎に其花を賞で、年毎に其實を味ふを得。茲を以て、其學識に於て、其人品に於て、優に一家を成したる人の、弟子を有して、これに其學問を傳へ、これに其感化を與へざるものは、古來稀なり。希臘に於けるソクラテス、プラトーン、アリストートル、希

聴衆と弟子

弟子は何か
故に多き
ざること

伯來に於けるパプテズマのヨハネ等、其最も著しき者なり。基督も亦、一方に於て、奇跡を行ひ、説教を試みて、集ひ來れる聴衆に花と實とを分つと共に、又十二の弟子を撰みて、到る所にこれを伴ひ、これを教へ、これを導き、よりて以て木其物を培はしめんことを努めたり。被反抗時代に於て、彼の説教の効果極めて微弱なりしを發見するや、彼の聴衆を捨て、専ら弟子の教育に當りしに徴すれば、^(三十一)_三 彼の弟子に望む所の如何に大なりしかを推知するに足らん。而して、彼の望は、遂に空しからざりき。十二の弟子が、教會の將來に貢獻せるは、これを數万の聴衆に較べて、更に、大なればなり。

基督の弟子は、其數に於て、七十を越えたりと傳ふ。されど、家を捨て、親を捨て、妻子其他一切を捨て、彼に従ひしは、十二使徒のみ。人誰か我が繼承者たる弟子の多きを欲せざらん、しかも、眞に弟子と言ひ得べき者の、容易く得べからざるを如何せんや。親としてよく其子を教へんが爲には、先づ其子の性癖を熟知し、これに應じて、指導の方法を異にすべきがごとし、教師として、遺憾なく其弟子を教へんが爲には、先づ其弟子の個性を解し、これに應じ

で○教○育○の○方○法○を○異○に○す○る○を○要○す○。○聽○衆○の○心○事○は○豫○め○こ○れ○を○推○知○す○る○に○由○
なく、用ひ得べきは、誰巧妙なる辯舌と、人心を捕捉するの術とのみ。さて後
成功と不成功とは、これを天運に委せざるべからず。弟子に至りては、豫め
其心事を解するが故に、これに加ふるにしかくの教を以てすれば、如何なる
態度に出づべきか、これに臨むにかくの行爲を以てすれば、如何なる
結果を生ずべきか、略これに豫測するを得べし。かくて、其性癖に應じ、其長
を成し、其短を矯む、これよき教師苦心の存する所、基督にまれ、孔子にまれ、人
に應じて道を説くは、これにこれよるなり。教師と弟子との關係果して斯
の如くならば、弟子は來るとして可ならざるなき聽衆といたく、其趣を異に
すと、言はざる可らず。弟子の聽衆のごと多きこと能はざる一つの理由は
これなり。

教師に適するの人あり、辯士教師に適する人あり。人各其才能に應じて、
教師たり、又辯士教師たるを要す。唯基督は、二つながらこれをよくし、公生
涯の第二年には、主として聽衆を教へ、第三年には、主として弟子を教へたり。

されど、彼の説教よりは、寧ろ弟子の教育に心を用ひしこと、既にこれを論じ
たり。彼果して何の見る所ありて然りしか。人動もすれば、數によりて、其
成功をトせんとす。茲を以て、徒に多數の人を説きて、これに、其徒たるの姿
を、裝はしむれば、これを以て、大なる成功となし、彼等果して、我が教を解する
か、彼等果して、我に、信賴するかは、措いて、これを問はざらんとす。これ實に
誤れるの甚しきもの、貴きは、其數に、非ずして、其質にあり。來る者多ければ、
従つて、我が力を分たざる可らず、我が力を分てば、これを薰じ、これを化する
ことも、亦自ら小ならざるを得ず。基督が、公生涯の、第二年に於て、廣く、失は
れたる、靈を探して、其効果、頗る、小なるを、發見するや、忽ち、其方針を、一轉して、
十二使徒の教育に、全力を注げるは、力を一點に、集中することの、成功の秘訣
なるを、思へばなり。人はいふ、育英のごとジミなるは、なく、政治のごとハデ
なるは、なしと、果して、然るか。名を一代に馳せて、肉體と共に、消え失する人
と、感化を、万世の後に、殘して、肉體は、枯るゝも、精神は、依然として、消失せざる
の人と、何れかジミにして、何れて、ハデなる。偉大なる品性を、備へて、育英の

刻下教育の短所

事に従ふ、天下何物かよくこれと愉快を競はん。
 維新以後、制度、文物の長足の進歩をなしたると共に、教育も亦著しく進歩したりと雖も、品性の修養、人物養成の一事に至りては、徳川時代の教育に較べて、寧ろ著しく退歩したるを悲む。徳川時代の教育は、人を中心とし、この人を敬慕する者其周囲に集り、この人は又其弟子の性癖を究め、これに應じて、個人的の教育を施し、人を以て人を薫じ、心を以て心を化せんことを努めたり。伊藤仁齋、荻生徂徠、近くは吉田松陰の如き、其人々の人品に高下の差あり、其人々の學識に優劣あり、其人々の教育主義に相違あるにも係らず、弟子は、彼等を中心としてこれに集り、彼等は、弟子の性癖を熟知して、其品性の修養に努めしは、即ち一なり。越えて明治の初年に當りては、福澤諭吉、新島襄二氏の如く、尚ほこの主義を繼承し、自己を中心として、學生を其周囲に集むる者ありしも、この種の人々世を去りて、後は、學科を中心とし、學校を中心として、生徒を集め、學課を授くるをもて、能事終れりとするの教育、獨り其勢を逞しうするに至れり。教師は、其専門の學藝を以て、一步生徒に長ずるの

基督の教育法

み、其人全體を觀察すれば、必ずしも生徒に優らず、其人品如何をたゞせば、必ずしも、生徒の上に出でざるなり。茲を以て、弟子必ずしも、教師に信頼せず、學校を辭すれば、又これを顧みざる者比々皆然り。兩者相慕ふの厚薄、これを辯士、牧師と其聽衆との關係に較べて、よく幾何の差違かある。斯の如く、獨り學藝を重んずるは、時勢の要求に答ふべき教育法にして、維新以後、我邦文運の著しく進歩せるは、この種の教育法に負ふこと、固より大なりと雖も、たゞこれのみを以て、教育の能事終れりとすれば、教育は、遂に、品性の修養、人物の養成に向つて、何等資する所なきに至らんを憂ふ。今の學校教育に、加味するに、偉大なる人物を中心とする教育を以てし、兩者相補充して、よく教育の美を成さん、は、我邦刻下の急務にして、基督育英の態度の如きは、とりて以て、他山の石となすべきものなり。

(二) 彼の弟子を教ふるや、これを其聽衆に較べて、いたく異れりといふべからず。たゞ聽衆は、一度若くは二度、彼の説教を聴くのみなるに、反し、常に彼に